

精神の絶
對的自由

威力の意

威力の意
思の變態

自由の本
能の侮辱
に對する
反抗

▲余は精神の絶對的自由を主張す、世に眞理なるものなし、之れを以て神に出つとなすが如きは恐人の妄語のみ、世に眞なるものなし、一切のこと凡べて許さる。

▲人間の根本的本能は自由の本能なり、自由の本能とは無限なる自由を得むとする欲望の謂なり、威力の意志は其異名なり。

▲然れどもかゝる威力の意志及自由の本能は常に満足さるゝものに非ず、否常に世の束縛桎梏を受くるか爲に、其威を肆にすることを得ざるなり、然らばかゝる本能性は消滅に歸すべきか、否既に之を外に發することを得ず、勢ひ内に向はざるべからず、この企業心、勇猛心、掠奪心、統御心等は何れも威力の意志の變態なり。

▲若し此等の心にして世間の道義法律等の爲に不道徳の汚名を與へられ、或は有罪の宣告を與へらるゝことあらんか、人間本來の本能は茲に大なる侮辱を加へられたるものなるが故に、不快の念失望の恨は勃然として其人の心に燃へ、

外に向つて發揚することを得ざる本能を以て、自己の一身に加へ自己を輕侮し自己を虐待し自己を犠牲となすの痴態は茲に起り、惡しき良心即ち惡心は茲に始めて其萌芽を生ず、されば献身的行爲は他人に加ふべき殘忍を己れに加へたるに同じく、惡心は自己を虐待せんとする欲望に外ならず。

▲國家の成るや之を作れるものは猛獸の一群の如き者也、彼等は其恐るべき爪牙を用ゐて、數に於ては幾十倍幾百倍の人民、威力に於ては幾千倍も劣れる人民を統御し、以て國家と云へる一團體を作るを常とす。

▲彼の約束を以て國家の成立を論するが如きは其愚詢に及ふべからず、自から命じ能ふ人、天成の主君たるべき人、威力を用ゐて己が欲するまゝに大建業を成すべき人の、如何で約束等を爲すの要あるべき、彼は運命の神の如く現れ来る、其来るや理由なく理性なく願慮なく口實なし、彼の在るや猶ほ電光の在るが如し、其出現の恐るべく且つ突如たるは兩者共に相似たらずや、彼の作れる大建築物の全く人間の無意識的本能の爲に成るは、恰も母の其生める子に於けるが

國家は
獸の一群
より成る

自ら命じ
能ふ人
天成の主
君たるべ
き人

如○き○な○り、彼○は○罪○の○何○た○る○責○任○の○何○た○る○を○知○ら○ず、彼○を○左○右○す○る○も○の○は○唯○恐○る○
べ○き○藝○術○家○的○個○人○主○義○あ○る○の○み

自由意志の發揮

▲彼○の○為○政○家○の○國○家○を○造○る○や、一○の○願○慮○を○用○ひ○す、一○の○讓○歩○を○為○さ○ず、唯○々○其○本○
能○の○命○ず○る○が○ま○に○く、之○を○成○せ○り、人○間○固○有○の○自○由○心○及○威○力○欲○は○遺○憾○な○く、發○輝○
せ○ら○れ○た○り○と○謂○べ○し

道德は悪しき良心に依つて作らる

▲然○れ○ど○も○國○家○の○成○立○以○後○に○在○て○は○國○家○の○主○君○た○る○べ○き○人○亦○前○日○と○同○じ○き○を○得○
ず。彼○は○其○國○家○の○一○部○を○形○成○せ○る○人○民○に○向○て、多○少○の○願○慮○多○少○の○讓○與○多○少○の○憫○愍○
を○加○へ○さ○る○べ○か○ら○ず、彼○れ○主○君○の○臣○民○た○る○者○は、固○よ○り○既○に○人○間○の○本○能○性○を○外○に○
向○て○發○す○る○こ○と○を○得○さ○る○輩○な○り、自○由○な○る○猛○獸○の○如○く○咆○哮○す○る○の○權○利○は○彼○等○の○
有○す○る○所○に○あ○ら○ず、殺○人○殘○忍○拷○問○等○の○欲○望○は○彼○等○の○希○ひ○得○る○所○に○あ○ら○ず、彼○等○
は○此○に○於○て○自○か○ら○自○己○の○立○脚○地○を○求○め○た○り○彼○等○は○己○の○本○能○性○を○外○に○向○て○逞○し○う○
す○る○こ○と○を○得○さ○る○が○故○に○之○を○己○の○一○身○に○反○轉○せ○り、彼○等○は○道○德○を○作○れ○り、惡○し○き○
良○心○此○に○於○て○か○成○る、彼○等○は○其○自○由○を○失○へ○る○を○歎○か○さ○ら○む○が、爲○に○は○た。之○と○同○

奴隷の精神の復讐

時○に○壓○制○者○に○對○し○て○幾○分○復○讐○の○念○を○放○た○む○が○爲○に○道○德○な○る○者○を○作○れ○り

▲彼○等○奴○隸○以○爲○ら○く○眞○の○自○由○は○外○的○自○由○に○非○ず○し○て、内○的○自○由○な○り、即○ち○粗○暴○
な○る○情○慾○及○野○獸○的○本○能○よ○り○解○脱○す○る○所○に○存○す○と、彼○等○は○如○此○し○て○以○前○善○な○り○と○
考○へ○し○も、即○ち○絶○對○的○に○動○物○的○本○能○に○從○ふ○べ○き○自○由○を○以○て、今○や○惡○な○り○と○な○
す○に○至○れ○り、而○し○て○以○前○惡○な○り○と○思○惟○せ○し○も、即○ち○動○物○的○本○能○の○制○限○束○縛○を○
以○て○今○や○善○な○る○者○と○な○す○に○至○れ○り、彼○等○は○自○己○の○境○遇○よ○り○打○算○し○來○り○て、自○己○
の○本○能○性○に○叛○逆○し、自○己○の○本○來○理○想○を○棄○却○し○て、不○自○然○虛○偽○の○理○想○を○立○つ○る○に○
至○れ○り。彼○等○は○如○此○に○し○て○壓○制○者○に○對○し○て○精○神○的○復○讐○を○企○て○た○り、惡○し○き○良○心○、
同○情○、客○觀○的○愛○情○、獻○身○的○行○爲○等○は、悉○く○彼○等○奴○隸○の○作○爲○す○る○所○な○り、禁○慾○的○
理○想○乃○ち○起○る

奴隷道德の勝利

▲此○時○に○當○り○て、恚○る○奴○隸○の○君○主○な○る○大○壓○制○家○等○は、かゝ○る○禁○慾○的○道○德○に○對○し○
て○も○全○く○冷○然○た○る○を○得○ざ○り○し○な○り、彼○等○も○亦○知○ら○ず○識○ら○ず○奴○隸○等○と○共○に、本○來○
の○善○を○以○て○惡○と○な○し、固○有○の○惡○を○以○て○善○と○な○し、善○惡○の○價○値○を○變○換○し○て、惡○し○

道德實造者

き良心として發生せしめ成長せしむるに至れり、一言せば彼等は知らずく奴隷の理想をして勝利に歸せしめ、奴隷をして巧に復讐を遂げしめたり、君主道德に對する奴隷道德の勝利乃ち見るべし。

▲道德實造の術に妙を得たる國民は、古今少からずと雖も、其最も著るしき者を猶太人となす、而して如此道德の叛逆。如此理想の具體的表彰は、耶穌基督に於て最も明かに最も大に之を見ることを得べし、愛の生ける福音たる基督、病あるもの貧しきもの罪あるものに、天に幸福を與ふる救世主たる耶穌は、即ち彼の理想の權化に非ずや

君主道德

▲羅馬が君主道德を固持し、其壯嚴と強大とは日に月に底止する所を知らざりし時に當り、一たび猶太人と接觸するに及んでや、基督教の害毒は羅馬人の全身を胃かし、疲弊困憊の悲境は全帝國を襲へ、忽ち健全なる日耳曼猛獸の餌食となれるを見よ、然れども勝利者たりし日耳曼人も、亦忽ち彼傳染病の犯かす所となり本來の健全を失ひり

粗野卑賤なる貧僧

▲其後に至ては榮利威權を欲して已まざりし加特力教會の僧侶達のみ僅かに貴族的組織の下に君主道德の幾分を傳へたるは極めて珍となすべし
▲文藝復興時代に於ては、基督教精神に對する反抗、異教的君主道德の再興を見ること得たり、許多の法主は自ら奮て如此君主道德を實行せり
▲此時に當り粗野卑賤なる一貧僧現れ出で、君主道德の貴き鏡を粉碎せり、マルチン・ルッテル之なり、宗教革命は教會に於ける奴隷の暴動に過ぎず、此時より以來君主道德は益々衰亡の悲運に陥り、佛國革命の起るに及んで、奴隷道德は絶頂の高進に際會せり

絶大の君人

▲ナポレオンは絶大の君主なり、かゝる世に生れ出で、君主道德を既に倒るゝに回したるは千載の快丈夫なり、然るにかゝる天稟の英雄も、亦幾多奴隷の犠牲となれるに至りて君主道德の盛觀はまた見るを得べからず

▲爾來人は益々小となり世は愈々奴隷の舞臺となれり、卑しきもの、共和的なもの、平民的なものは天下を横行し、大なるもの強きもの、美しきものは

奴隷の舞臺

非基督教的救世主

悉く暗黒の中に没す、而して近代社會主義の如きは、地球を變じて平等なる牧場となし、牧者を用ゐずして牛羊を放たむとするに外ならず、咄々怪事と謂はざるべけんや

▲君主道徳は長しへに亡べるか、否然らず、早晚非基督的救世主の現はるゝことあるべし、若其人ありとせば、彼は戦争と勝利とに由りて其心を強うし、奪略、冒險、危難、苦痛等を喜び、鋭き高き空氣に慣れ、嚴冬の逍遙に慣れ、水雪と深山とに慣れ、高尚なる猛惡心を有し、智識の自覺的放逸とを有する人たらざるべからず、彼は固より今日の人に非ずして未來の人なり、彼にして一たび現れんか、現今もろくの忌むべき現象は己み、獸性を厭ふ心は廢たれ、虚無を欲するの念は去るべし、彼は吾人の意志をして再び自由ならしめ、地球に其目的を與へ人類に其希望を回復すべし、彼は反基督の人たらむ。彼は非虚無主義の人ならむ、神に勝てる人虚無に勝てる人は、嗚呼一たび斯士に來らざるを得ざる也

宗教家の不人情

▲若し神々なるもの存しませば、吾は自から神たる能はざるを堪ふることは能はず

▲音楽家が樂器を弄するの快速明敏縦自在なるが如く、文章家も亦自由自在に文學を使用するを得べからざる理由なし

▲美を好むは大に美しと嚮も、惡を惡みて惡人の不幸に陥るを見て之を喜ぶは人情に非ず、人情は道徳界に於ては正義よりも高尚なる權威を有す、故に正義を完ふするも人情を破りたる者は決して道徳界の人に非ざる也、宗教家が宗教に熱心なるは可なりと雖も、單に自家の信せる誤謬の信仰を以て、道徳唯一の標準となし、狹隘にも他を以て外道となし惡人となし、以て其信する所の神罰を受くるを見て之を喜ぶは、これ全く吾人の道徳とせざる所にして、吾人の攻撃せざる能はざる所なり

▲アダムの長子にして惡人の開祖たるカインは父母弟妹等の神を讚美し祈禱せるにも係はらず、獨り平然として停立せり父母其故を問ふ、カイン答て曰く「我

惡人の開祖

我を咀ひ
たる者は
父母也

偶然的
生

れ神に求むる所有らざればなり」アダム「又感謝する所もあるざるか」カイン
「無し」アダム「汝は神に由て生けるに非ずや」カイン「我れ又死せざるべからざるに非ずや」カインは智言を爲せり、誰れか其論法を破るものぞ

▲カイン其父を咀ひて曰く、我父エデンの園に在りし時、神の命令を守らざりしより世上一切の害悪生ず、父の罪行我關する所にあらず、何となれば、其時我未だ生れず、又生れんことを求めず、又生れ來りし所の状態をも求めざりしを以てなり、如何となれば父は女エバに惑はされたるや、父の愚昧と母の無思慮これ罪惡苦痛の大原因なり、父母の罪我に於て何かあらん、若し父母罪を犯さば、父母をして死せしむべし、我れ固より罪無し、我れ他人の罪科の犠牲に供せらるべき如何なる事を生前に爲したるか……父は我を生みて先づ我を咀へるに非ずや、我を生むの前神の禁じたる果實を食ひて我を咀ひたるに非ずや、▲父母一時の色慾より我れは人となりたるものにして、云はゞ誤りて人生に置かれたるなり、我かく偶然に人生を稟けて世間無限の苦痛を受く

死の吞食

破壊者兼
造物者

死の生命
の發明者
生れざり
せば寧ろ
幸福

▲人は唯死せんが爲に生けるなり
▲死は形體を有せずと雖も、よく地上の萬物を吞食し盡すもの也
▲能く如此惡を爲すものは、吾れ一箇の存在者なりと信す
▲死は破壊者なり、又造物者也、唯汝の好む所の名稱を以て之を呼べ、彼は破壊せんが爲に萬物を造りたり
▲言ふべからざる苦悶に於て死の啓示せらるる時は幸福なるべし
▲死せざるべからざる生命を發明したるものは咀はるべきかな
▲花の如き眠れる我愛子、嗚呼此内已に永遠無限の苦痛存す、寧ろかく眠れる間、握み取つて岩角に投じ、徹塵に碎きて死せしめんこそ、却て其生けるよりも遙かに優れり、若し我子生き居らんには、一人苦痛を受くるのみに非ずして、又其苦痛を後代の子孫に遺さるべからず、之を以て其生さんよりは死せるを以て優れりとなす、否々、此可愛き我子、如何でか之を殺すを得べき——生れざりせば幸福なりしならんと思ふのみ

殺人の増殖

日に下に行はるに
慮遇

哲學宗教道徳

一八八

▲我れ死せん多年苦しみて後死すべき者を生む、これ死の種子を播くものに外ならず、而して又殺人を増殖する所以也、……されど死する能はず、死を厭ふは生命の抵抗すべからざる天性なるらん、我れ死を畏るゝを卑むと雖も、尙ほ畏死の念に勝つこと能はず、かくて我尙ほ生存せり

▲茲に我れ身を轉らして、日の下に行はるゝ諸々の慮遇を見たり、嗚呼慮けらるゝ者の涙流る、之を慰むる者あらざるなり、又慮ぐる者の手には權力あり、我は猶生ける生者よりも、既に死せる死者を以て幸なりとす、又二者よりも幸なるは未だ世に在らずして、日の下に行はるゝ惡事を見ざる者也

▲何を以て我は存在するや、何故に汝不幸なるや、又萬物若くは不幸なるは何故ぞ、神は不幸の原因として、神自身も亦不幸と云はざるを得ず、然るに神は萬能なりと、然らば善たる神は何故に惡たるや、我之を問ふ答へて曰く惡は善に行くの道なりと、恐ろしき反對物より其反對物を生ずるとは、豈奇妙なる善に非ずや、過日我れ小羊の蛇に刺されて轉々苦悶するを見たり、時に我父一種

惡より美
を生ずる
を見よ

の草葉を摘み來りて、之を揉みて其刺されたる所に塗りたり、之に依つて苦痛漸く去り、小羊喜ばしき風情あり、而して父曰く我子よ惡より善の生ずるを見よと……我何事をも言はず、彼は我父なればなり、されども我思ふ所に依れば、かの中毒の激烈なる苦痛を感じ、消毒藥を以て之を治療し、而して其生命を助けんより、寧ろ初めより刺さるゝの苦しみに若かずとなす

▲善性は如何にするとも惡とすることなく、惡性は如何にするとも善化することなし

惡も亦神也

▲耶蘇及マホメット教徒に問へ、神若し善ならば惡を許すは何故ぞ、神之を知らずとせばこれ全智に非ざるなり、神もし惡を禁ずることを勉めずとせば、神の善果して何れにかある、神もし之を爲すこと能はずとせば、其全能何處にかある……彼等は惡魔樂園に入れりと云ふ、若し果して然らんには、神は何故に之を拒ぐに堅固なる墻壁を作らざりしか、惡は今も尙ほ盛に行はれ、何れの世にも善に勝てり、これ神は惡魔の己れに反對するを前知せざりしなり、豈之を

哲學宗教道徳

一八九

神の虚言

咀けるべき神の失策

剛復なる靈體

全能なりと云ふを得ん、もし神にして真に善のみならんには、素より惡のあるべき理なし、今世上の事物を大別せば善と惡との二なるべし、此二者神より出でたりとせば惡も亦神にして、一概に卑しむべきに非るなり

▲神は誠心より云ふか、或は單に虚言なるか、『我は善の友にして惡の敵なり』と云へり、然るに世上惡は善より多きに非ずや

▲愛する神よ汝は萬物を造り之を恵み玉へり、されども只蛇(惡魔)をして樂園に入るを許るし、我父を樂園より追ひ出し玉へり、されど神よ此他の惡より我等を守り惡なからしめ玉へ、讚むべきかな讚むべきかな……惡魔をして樂園に入らしめ、而して人類の父母を追ひ出さざるを得ざるやう爲せし神は讚むべきかな

▲剛復なる靈體よ、汝かく傲慢なる言語を爲すと雖も、汝は尙奉戴すべき上位者を有せるに非ずや……否我天地に誓て否と云はん、我は實に我に勝ちたる強者を有せり、然りと雖も奉戴すべき上位者は之を有せず、彼エホバ萬人より讚

媚を得ん、されども我のみよりは一語だも之を得ざるべし、我天上に戦ひたる如く、尙何處に於ても戦へり、全永遠に於て、陰府無限の深底に於て、間無限の際に於て、徹頭徹尾彼と戦へり、大千世界も、星辰も全宇宙も此戦争の止まざる以上は、其衝平を得んとして震動すべし、されども此戦争は永久に止むこと無けん、何となれば我身體は不死にして、彼と我とは永久に調和すべからざる怨恨あればなり、彼勝利者として敗北者たる我を惡と云ふと雖も、我若し彼に勝ちしならんには、彼の事業は惡となり、善惡所を代ふべきのみ

▲神よ我惡ならば我を罰せよ、汝は全能なり、誰かよく汝に敵せん、若し我善ならば或は罰し或は愛せよ、唯汝の意に任せん、善と云ひ惡と云ふ、其物自ら力を有せず、唯汝(強者)の意思に由て力あるが如し、我全能者に非ず、又全能者を判断するを得ず、是を以て何れか善たり何れか惡たるを知ること能はず、唯命せられたる所に従ふのみ

▲祈禱か、嗚呼祈禱か、雲は降り、浪は逆捲き來るの時(ノアの洪水)、嗚呼何

神が世界を造りたるは耻辱也

汝全能者

處にか祈禱は達せん、汝ヤヘテ及び汝の父ノアを造りたる神は咀はるべきかな、
 されども我咀ひは無益なり、我等如何でか此赦さるる全能者に向つて膝を屈し
 て讚美を爲さんや、讚美するも讚美せざるも、死は一なるものを、神は世界を
 造れり、これ彼の耻辱たれ何となれば世界を苦しましむる爲に造りたるものな
 れば也

▲嗚呼我同胞たる人々よ、誰か汝等一般の墓上(ノアの洪水)に立ちて汝等を哭
 するものぞ、我の外、誰か汝等を吊ふ爲めに生殘るものやある、嗚呼我れ生殘
 りて汝等に何の優る所あらん

▲救はれたるもの、子等(ノアの一族)よ、汝等獨り逆卷き來る洪水を遁れ、以
 て幸福なりと思へるか……汝等苟も生を偷み、飲食男女の慾を逞うし世界の
 政滅を目撃しつゝ之を憐れむことなく、又勇氣を以て激浪に面し、同胞たる人
 類と共に其運命を同うすること能はず、父等と共に船に遁れて世界の墓上に都
 市を建てんとす、汝等之を耻ぢざるか……萬人盡く死す何の顔ありてか生き殘

吐ちべき
ノアの
族

人々と共
に地獄に
行かん

汝と共に
地獄に降
るべし

宗教家此
精神無し

道理は誤

りて飲食男女の慾を逞うするを得んや、耶蘇教の云ふ所に依れば、不信者は盡
 く滅び唯信者のみ天國に行かんと、バイロン曰くさらば我は一人天國に匍ひ行
 かんより人々と共に地獄に行かん

▲一少女の父、少女の頭を撫で、曰く假令我は耶蘇を信じて天國に至るを得る
 とも、若し我娘にして地獄に呻吟することあらんには、余は寧ろ天國の歡樂を
 受けんよりも、直に馳せて地獄に降るべし

▲ラッドボットは、スカンチナギヤ古代の王にして、久しく耶蘇教に反對したる
 が、一朝之を信奉して將に洗禮を受けんとし、左足を水に浸しながら僧に向ひ問
 ふて曰く、朕は天に於て高祖高宗に面會するを得るやと、僧曰く、洗禮を受けざ
 りし異教者は地獄に於て永遠の苦痛を免るゝ能はずと、王直ちに足を水中より
 引出して曰く、朕は汝等と共に天國に在らんよりは、寧ろ皇祖皇宗と共に地獄
 に陥落せんと、遂に洗禮を受けざりしと云ふ、宗教家又此精神ある者無し

▲吾人の道理は誤謬に充てり、生命は短くして真理は深きを好む眞珠也、萬事

誤に充て

哲學宗教道德

一九四

盡く誤謬の天秤に由て測定せられ、憶説は萬能力を有して地球を蔽ふて暗からしめ、遂に善惡を以て偶然的のものとならしむ、而して人は蒼然として、自己の判斷の世上に明になり、其自由思想は罪となり、地球は光明に過ぐることを恐る。

▲惡魔は眞理を語るものなり

▲人の性として獨斷よりは懷疑來り、偽善虛禮の甚しきに至る時は必ず公惡の生ずる者也

▲彼は能く自己の惡人なることを知れり、然りと雖も、他人みな外形の外、善なる所あらざるを知れり、而して其善良なる者をすら、彼れ偽善者なりとして之を輕蔑す、偽善者とは大膽なる者が公明正大に爲す所を、秘密にするもの也

▲惡魔は大智也、大智の人には必ず惡魔的分子存在す

▲道德は一に非ず、我國以外、別に種々の道德あり、吾人の規則は狹隘にして偏見壓制也、人間と云ふ植物は、管に雪中にのみ生育するものに非ずして、南

公惡

偽善者

惡魔は大智也、道德は一に非ず

脆弱なる道德の方

世に處するの一大覺悟

忿れる惡神アリス

方風物温暖なる地にありても、又能く美果を結ぶもの也、何ぞ必ずしも一氣候一地方の道德を以て律すべけんや

▲見よ社會の畏れ神の觀念、或は義務の思想等に基きて構成したる論法に由て、其德義の目的を確乎たらしむる程有力なるもの他に有ることなし、何物か此決心を動かし得るものぞ、一唯一事を除くの外、其一事とは何ぞや、或る六月の月影朧ろなるの夜、密室内に於て、兩人のさし向ひ之れなり一嗚呼此間何事か行はれたる、知らず唯神之を知るのみ

▲人生の活動界を權力的、重學的に觀察し權利、義務、善惡等の強者の實權に由て定めらるゝことの哲學を得たる者は、既に活動界に處するの一大覺悟を得たる者也

▲天地の主惡神アリス、彼呼吸せば暴風起り、海震蕩す、彼語れば、雷霆轟き、彼睥視すれば日光飛ぶ、彼れ動けば地は震動して破裂し、彼の足下には火山生ず、彼の影は惡疫なり、彗星彼の途を前驅し、彼れ忿怒すれば遊星灰

哲學宗教道德

一九五

盛となる、戦争は日々其朝貢を爲し、死は其租税を輸す、生命は無限の苦痛を包含して彼の有也

妬み且仇
を報うる
神エボ
バの

▲エボバは妬み且仇を報うる神、エボバは仇を報ふる者、忿怒の主、エボバは已に逆ふ者に仇を報ひ已に敵する者に向ひて憤恨を含む者也、……エボバの道は旋風也、大風也、雲は其足の塵也、彼海を指斥めて之を乾かし、河々をして盡く涸れしむ、バシヤン及びカルメルカルメルの草木は枯れ、レバノンの花は凋む、彼の前には山々ゆるぎ嶺々溶く、彼の前には地噴き起り、世界及其中に住む者皆吹き上げらる、誰か其憤恨に當ることを得ん、誰か其燃ゆる忿怒に堪ふることを得ん、其震怒の注ぐこと火の如し、巖も之れが爲に裂く

暴君の哲
理

▲強者は弱者に對して一義務なく、弱者は強者に對して一權利なし、暴君は無意識的に此哲理を識り、以て自意を遂行して憚るなし、而して自ら他人の權利を破れりとは信せず、彼他人の權利を認めず、自己に義務ありと感ぜざるを以て也

天上に敗
れたる惡
神の意思

陸の反逆
人海の海
賊

反亂的自
由の精神

▲強者に對する弱者の權利は、殆んど絶無なるも、其意思に至つては絶對的不羈自由也、故に意志の強大なる者は、山の如き自重心を起し、決して人の下風に立つを甘んせず、彼脅力を以て我を壓伏すと雖も、我精神は毫も屈せず、ミルトンのサタンの如き即是也、彼天上の戦争に敗れたるも其意志は毫も屈せず、彼エボバ脅力を以て我を壓す我亦脅力を以て戰はんのみとして曰く「我權利は我物也、我右手は何人が我と同等なるやを證明し、以て我至高なる行爲を示さん」▲道徳的感情を去り、單に權利の點のみより云ふ時は、君主權に同情を表すと共に、又反亂者をも咎むるを要せざる也、バイロン亦此點を感じたるが如し、彼自尊心強大にして、敢て人後に立たざる氣象は、常に反亂的自由の精神を歌へり、嘗て曰く人若し自國の自由の爲めに戰ふの要なき時は他國の爲に戰ふべし

▲我れ(惡魔)をして留意せしむる價值あるものは唯一人のみ、我之を助けたり、彼は陸上には反逆人たり、海上には海賊たる也

我運命の星

▲我運命は此鞘中に在り、之れ我運命の星也、一度輝く時は慧星をも眩惑せしめん

一箇の硬頭紅唇

▲天若し我を罰すとせば、サタンと共に我れ天と戦はん、己れの意志の遂行を助めよ、血性的たれ熱情的たれ、苟も男子たらんとすれば、唯一箇の硬頭を有し、一撃以て敵を破碎せよ、苟も又女子たらんと欲せば一箇の紅唇を有し、地球の北極より南極迄を接吻し盡せ、暴君、反逆者及大望の女子等は皆哲理を奉せる者也

機むべき飛脚

▲強者は自意のまに弱者の心意を形成し、彼等の手もて事を成さしめ、其結果を我に收む、弱者は之を悟らず、至大なる事を成しつゝも、自ら之を爲せしに非ず、其主領の功也と思へり、……日の下に於ては皆之れ也、又未來に於ても然るべく、衆弱は唯一強者の爲めに勞役せざるべからざる也
▲苟も我大權力を有すとせんか我慾望は善たる也、我意志は他に向つて法律たる也

一切の正意の一致の邪見のみ

▲正たり邪たり天然に存せるに非ず、只人々の意見の一致のみ、故に永久不變の眞理あるなし又素より一定の善あるなし、法律とは唯其都府或は國の法なるのみ、其都府に其意の存する間、其都府に限りて尊敬せらるべきもの、如し、一切の法は皆意見の一致也、而して其一致とは其國の強き部分に由て制定せらるべき筈也、即多數の意志也、正義とは強者の利益のためのもの也

道徳は強者の理想のみ

▲道徳と云へば一見高尚優美の如しと雖も、其裏面に於ては理想と理想と戦争し、之に伴ふ制裁無し、唯強者の理想は生きて弱者の理想は殺さる、如何に高尚優美なりと雖も、道徳の名稱ある以上は尙これ戦争たる也、實に道徳的善惡は感情上の力學問題に歸するものとす



苦樂厭世樂天

他人以外に立つて生活す……後悔的不平……至高の熱心の壊敗……獅子となつて獨歩せん……道德は人間の上衣也……心の寒冷なる氷山……常に新たなる心痛……偶然の運命……境遇の玩弄物……偶然は誤謬の神也……大惡神アリマスネス……礎石不毛の社會……血を流せる塘鷺……精神の露の源泉……昏醉と至樂……快樂これ絶對的純粹の善……苦樂の一瞬……死は生得の大權也……死來る時は我既に在らず……葡萄を化する魔法……彼等の不平……快樂の紀念碑……快樂的黃金時代……人を疑ふは問者の職也我一生は愛の一生也……凋むより摘まれん……生命主義と快樂主義……耻にあらざりき……汗を流して快樂を追求す……快樂の短き時間……葡萄の血液……黄金を好むは下等なる礦物を愛する也……大海の飲料……酒杯の露……王冠は何ぞや……我宴席の光榮……凋み行く生命……黄金墓の中夜を照さず……死は嘆息を顧みず……我今現に生あり……死近づき快樂益々貴し……愛生れて幾才ぞ……死神の家は暗し……心に恐れを懐く長壽者を羨まず……自然の殘忍刻薄……裏にも表にも悲哀憂患を録す……一大屠殺

他人以外に立つて生活す

後悔的不平

至高の熱心の壊敗

場……神性の分有……柔和なる者地を嗣……代贖的犠牲……苦痛の感覺……動物の苦感……苦痛の鍛鍊

▲自己の思想を他人に服従せしむることを知らず、其青年なるに當てや、彼の精神は自己の思想に依つて壓屈せらるることありと雖も、彼の意志に反對せる者に對しては、一步も自己の領地を讓ることを爲さず、假令其身は零落すと雖も、神氣依然として尙ほ高く、自己の生命は自己の中に存せりとなし、獨り超然として他人以外に立つて生活す

▲人性或は惡に非るか人間の性は善なりと思ふは不平の元なり、社會は嫉妬と忘恩を以て特性となす、之に好意を盡くし、恩を施すと雖も、誤解と嫉妬とは、却て迫害と無禮とを恩人に加ふるなり、愆くて人性及社會の性質の誤解は、人をして後悔的不平を生せしめ、一種の失望的厭世の人たらしむ

▲我青年なりし時は、至高の熱心を有し、我心を以て他人の心となし、以て自ら人心を照らす者たらんことの幻像を描き、以て高く登らんとせり、何處に上

獅子と
なりて
獨歩
せん

道德は人
間の
上表
也

られとせしやは知らずと雖も、之れ實に失落せんが爲なりき、而して假令失落したりと雖も、猶ほ山上より落下する瀑布の如く、眩む高さより落下して、暗黒なる深淵に突入し、其反動を以て水柱を跳ね上げ、霧を作り再び雨となして之を降さんとの勢を有し、失落せりとも尙は有爲の勢力を存し居たり、然るに今や此氣力無し、我思想は誤りぬ

▲若し人の上に立て之を支配せんと欲せば、人に仕へ人に服従し、配慮愛心至らざる所なかるべし、これ僞りを以て生活するものにして余の潔しとせざる所なり、假令我れ其首領となるとも、豺狼の首領たらんよりは、寧ろ獅子となりて獨歩するの勝れるに若かざるなり

▲人或は人間は道德的なりと云はん、然り、余は今日のみは其語を許さん——汝若し十分飲食し、愉快なる室内に起臥し、身心機關の運轉整利を得て、よく油を以て圓滑せるときは、吾人は人間の道德的のものなることを許さん、然りと雖も、一旦機關に損所を生じ、破船戦争飢渴等の危急に際するに當てや、汝忽ち狂

心の寒冷
なる氷山

常に新た
なる心痛

萬事盡く
偶然の運
命のみ

人の如く或は叫び或は吼へ、或は白痴の如くならん、文明も、教育も道理も、健康も、此處に至ては果して何の益か有らん、宛も吾人上衣を脱き去るが如きのみ

▲人は瑣少の事になりと雖も、思ちにして豺狼に變ず

▲若し道德世界のコンプスあらんには、よく人心の地圖を明にするを得べし、大人の心情には寒冷なる氷山あり、自愛は其中心に極を爲す、王國を支配する者の十中八九は食人者たるは、豈驚くべき事ならずや

▲人生は錯誤的のものにして、事物と調和を有せざるなり、此鞏固なる命令、此斷滅すべからざる罪惡、此無限の毒樹、地は其根帯たり、天は其枝葉たり、而して惡疫を人間の上に降らすこと露の如し、疾病死亡囚虜……此等の患苦は眼以て見るべしと雖も、尙一層の患苦にして眼以て視るべからざるは、精神中に脈搏つものにして常に新なるの心痛これなり

▲萬事盡く運命のみ、血統、富貴、財産、健康、醜美、みなこれ運命の偶然のみ、我等時に運命に逆ふて叫ぶことありと雖も、運命は其與へたるもの、外

境遇の玩弄物

我等の呼吸に他人の呼吸を存するのみ

敢て一毫も取り去らざることを記憶せざるべからず、運命の取り去りたる殘遺は、只是赤裸の身體のみ、慾情のみ、空想のみ、……飢渴は人を下等なる慾望中に吞入し、太初に受けし命令の如く、人をして汗を流して働かざるを得ざらしめ、單に飢渴を恐るゝの情のみとなす、而て之れ皆下等にして虚偽たるなり、人は終始泥土たることを免るべからず、王侯の遺灰を盛れる壺瓶なりとも、唯是陶器師の壺瓶に過ぎず、我等の名譽は他人の呼吸に存するのみ、我等の生命は彼等の呼吸よりも一層微々たるものに存す、我等の生命は日々であり、日々は時候にあり、而して我等の一身は全く我等以外の物に依つて存す、至大なるものこれ至微なるものなり、我等盡く奴隸にして、萬事我意志の左右する所に非ず、我意志すら暴風に依頼するよりも、寧ろ一小葉に依て存するを得るものなり、我れ事物を左右すと想ふときも、實は他に左右せられ居るなり、我れ必然に生れたるが如く、又た必然に死の方に向ひ行く也

▲境遇は人の玩弄物と見ゆるときすら、人は境遇の玩弄物也

偶然の誤謬也

愚者より世界を支配する神託を出さしむ

確不毛の社會

▲偶然と稱する誤謬の神は、吾人に來らんとせる所の惡中に働き、其又狀の棒を以て觸るゝ時は、吾人の希望も忽ちに變じて塵埃と化す、然り、吾人の足下に蹂躪する所の塵埃と化す

▲偶然是我を我とせり、又我を無とし得べし

▲大惡神アリマヌチヌの配下たる運命神曰く、我れ都市に黒疫を飛ばして數千人を仆したり、數萬又死せん……悲哀苦痛、罪惡及び恐懼は人民を圍繞す……これ我が數代爲し來りし所にして、今も尙ほ盛に行へり……滅亡王國を再興し……愚者を高め、智者を狂とし愚者よりは世界を支配する所の神託を出さしめ、或は王位を天秤に衡り、平等自由説を人々に唱へしめつゝあり

▲如此確不毛の地(社會)より、吾人は果して何物をか收獲するを得ん、吾人の感覺は狹隘なり、吾人の道理は微弱なり、生命は短くして真理は深きに隠るゝを好む寶石たる也、一切の事物は習慣の最も誤謬なる權衡に由りて計られ、輿論なるものは全能の力を有せり、而して輿論なるものは暗黒を以て地球を蔽ひ、

血を流せ
る塘鷺

善○惡○の○判○斷○を○偶○然○な○ら○し○む○、○又○た○自○己○の○判○斷○の○餘○り○に○明○瞭○に○輝○き○、○自○由○な○る○思○
想○は○罰○と○せ○ら○れ○、○地○球○に○は○餘○り○多○く○光○明○な○か○ら○し○め○ん○が○爲○に○人○々○戦○々○競○々○た○り○
▲我れ悪時に生れ、我血統は我をして無禮を得せしむる所の知事となせり、我れ
エチチア國及其國民の爲めに或は兵士となり、或は、忠僕となりて働きたり、
我或は戦ひ或は血を流し或は兵士を命令し、又た勝利せり、苟も我國に利益する
ものならんには、或は陸し、或は海することを厭はず、我々として、我が義務
を盡すこと此に殆んど六十年、一として躬の爲にせしものあらざるなり、汝等
往てかの血を流せる塘鷺に問へ、汝何故に其胸を裂くやと、鳥若し言語するあ
らんには、只其雛の爲めなりと答ふべし。

酒は精神
の露の源
泉也

▲酒は精神の露の源泉なり、心情の甘露なり、何物の樂みか古酒に若かん、人
若し好まば隨意に説教なすべし、されどもこれ唯無益なるのみ、酒と女、歡樂
と笑謔、而して説教と「ソーダ」水とは翌朝のことなり、人間は道理的のものな
り、酔はざるべからず、一生の至樂は實に昏醉の中にあり、名譽も、葡萄酒も、

人生の至
樂は昏醉
の中に在
り

戀愛も、黄金も、皆此中に潜在す、是萬人の希望する所也、……若し醒めしときは
何をか持ち來すべき、曰く、家僕を呼びて速にホツク及ソーダ水を持來らせよ、
然らば汝はキセルキセス大王の快樂を知らん……キセルキセスは、一切の
快樂を爲し盡くし、新快樂を得んとして懸賞を以て募集したることありと云ふ
▲人生の眞價は快樂に在り、其他の事物は快樂の方便及條件たるに過ぎざる也
▲人生の目的は快樂にあり、これ絶對的純粹の善なり、徳義とは止むを得ざる
社會必要の條件にして決して人間終局の目的たるべきものに非ず、徳義は制限
的の形式にして、快樂之が内容たり、人生の幸福利益の爲めに盡力する人こそ、
吾人稱して眞の大人とは云ふなれ、徳義の爲に徳義を行ふ人は、人間を愛する
ことを目的とせざる人なり、何を尊敬するに足らんや

快樂は絶
對的純粹
の善也

苦痛の百
年快樂の
一瞬

▲人生の人生たる價値は、年月の長短に非ずして、其實質の如何あり、若し唯
長生をのみ求むとせば、始めより無生の木石たるを可とす、苦痛或は單調無味な
る百年よりも、寧ろ快樂にして一瞬を生くるの勝れるに若かざるなり、元來時

間とは何ぞや、實在とは何ぞや、永久とは何ぞや、永久も實在も全時間も、實は一瞬間の現在なるのみ、一瞬過ぐれば既に無に歸す、現瞬の未來は又無なり、現一瞬これ全時間、全生命、全實在也、故に一瞬の苦痛は全生の苦痛也、一瞬快樂にして死せんには、吾人は一生快樂なりしものと謂ふべし、觀樂戀愛の最中突然死來るとせば、實にこれ吾人の最大幸福にして、我一生は快樂にして我本躰は快樂なりしものと云ふべし。

死は人間
生得の大
權也

▲人若し強大なる決斷力を有し、よく自己の生命を左右するの力あらんには、素より可なり、大快樂、大歡喜、大戀愛を盡くし、生理上及其他の苦痛の來らざるに先立ち、直に短刀一閃の下に倒るとせば、彼サルダナパルスの快樂論を體得せるものと云ふべし、ストア哲學派は往々此種の人を出す、其説に曰く若し彼れ世界を惡なりとせば死すとも可なり、死は生得の大權也、我は我身の主人也、然りと雖も究迫して死すべからず、大胆なる勇氣を以て見事なる死を遂げざるべからずと、ツエノーよりセチカに至るまで、皆かく自殺せり

突然の死
に均し
なき

▲若し快樂の馳場にして其最終迄に爆烈彈の備へあらんには、我亦此馳場に入り、我乗る馬の手綱を弛め鞭打を加へ全速度を以て進むべし、終る所は突然の死なればなり、突然の死は死無きに等し、エビクローヌ曰く吾人死を恐るゝは眞に愚なり、吾人は決して死に出逢ふものに非ず、生ける間は素より死無し、死來るときは我れ既に在らざれば也。

葡萄を化
すの魔法

▲グレンシアにバックスと謂へる神あり、酒杯者來れ……我れ新神たる古代の勝利者を禮拜せん、此神とはこれ酒の謂なり……彼れ全印度を征服せり、然らずや……郷は血を流す人を以て英雄なりと云ふか、此神は葡萄を化して魔法となし、悲しむ者を樂しましめ、老いたる者を壯にし、壯き者を勵まし、勞れたる者をして其勞を忘れしむ……余は云はん、凡て人は善たれ惡たれ、其極端まで行ひて世を驚かすを眞の人となす。

彼等の不
平等の

▲忘恩の奴輩なるかな彼等の不平を唱ふるは、我が彼等の血を流さるるに依るか、又は彼等を導きて、數萬の骨を沙漠に乾かし、或は彼等の白骨を以てガン

ガの岸を白くせしめざるに依るか、或は壓制野蠻の法律を以て彼等を束縛せざるに由るか、或は彼等をピラミットの建築に苦役せず、或はバビロンの城壁を築かしめざるに由るならん

快樂の紀念碑

▲「飲み食ひ且つ愛せよ其他は一切指彈すべきのみ」此等の短句は能く人事の全歴史を示せるもの也。若し汝をして紀念碑に銘せしめたらんには、汝必ず此く記さん曰く「サルダナバルスは此處にて敵の五萬を殺せり、此等は其墓なり、而して之れ其凱旋標也」と、されどかゝることは戰士に任ず、我れ唯人民の苦痛を少くし、彼等をして苦しむことなく、墓中に滑り込まざるを得ば幸福なりとす。▲我に向て戦争は名譽に非ず、勝利は光榮に非る也、我れ我が治世をして人民に嫌はれざらしめ、此血腥き年代記中、我世代をして太平無事の世たらしめ、此年代記の沙漠中翠滴る樂地となし、後代の人民をして、其往時を回想して、サルダナバルスの全盛黄金時代を謳歌せしめんとす、我國を樂園となし、日月の變化を新快樂の時期となし、賤の男女の樂める其歡笑を愛となし、親友の呼

快樂主義の黄金時代

吸を眞理となし、婦人の唇を我が唯一の報酬となさんと欲す

人を疑ふは問者の職也

▲如何なる危難迫れるも我之を知らず、一々かゝる細事に配慮して、此短き生命を短縮せしめて可ならんや、若しそれ死を恐れ反亂人を探索し、或は我身に關して猜疑を懷き居るが如きは眞に死時に先つて既に死せるものと云ふべし、……明朝汝等其空想なりしを知らん、人を疑ふは問者の職なり、我れ無益の談話及無益の恐懼に貴重なる光陰を費せり

我一生は愛の一生也

▲彼等若し我を滅ぼし、併せて王國を奪はんか、嗚呼これ何事ぞや、地球とは何物ぞ、地上の王國とは何物ぞや、我れ相愛して生活す、死とは此身の自然の事變のみ、我れ能く血を流し、又能く我名をして死と同一ならしむるを得べし、然れども我れ之を爲さず、何となれば我が一生は愛の一生なればなり、若し人我を嫌はしこれ我が彼等を嫌はざりしに由る、若し人我に反逆せば、これ我が彼等を壓制せざりしに由る、嗚呼人よ、汝は笏を以て統御すべからずして、鎌を以て支配し、草を莠る如く刈り倒し、不平腐敗の徒を斷滅し、他の善良なる

凋むより
摘まれて
砕けん

生命主義
と快楽主
義

王を愛せ
しは耻に
あらざり
き

者を害せず、豊饒なる地を礎角ならしめざらんことを努めざるべからず
▲喜悅、歡樂、愛情の最中、死よ突然來れ、我れ枯れ凋む所の薔薇たらんより、寧ろ摘まれて砕くるものとならん

▲生命主義と快樂主義とは、自ら異なる所の結果を生ず、若し生命主義に據る時は身體を節制し、或は前後の思慮を要すと雖も、快樂主義に在つては、快樂の感情其物こそは真正の生命なりとするの主義にして、長命敢て願ふ所に非ず、苦痛の千年は快樂の一時に若かず、凡て人間の身を慎み行を正ふするは、實に長命を欲するに由るのみ、されど快樂なきの生命を保ちて何の益する所ぞ、若かず一意快樂を盡して終らんにはと云ふにあり

▲耻に非ざりき、妾が王を愛せしは耻に非ざりき、妾は以前は思はざりしと雖も、今や思ふ、王のグレンシア人にてありしならんにはと……王は幼きより成年に至る迄深宮に在て婦女子の如く養育せられ玉ひたり、然るに其の一旦奮起し玉ふや酒宴より勇進して戰場に打出づること、宛も愛の床に行き給ふが如し、實に

グレンシアの女子は王の情婦となり、グレンシアの樂師は王の樂師となり、又グレンシアの墓は王の紀念碑たるに足るなり

汗を流し
て快樂を
追求す

▲他人の眼には彼爲すこと無きの人と見ゆべしと云へども、我眼より見るときは王は尙或物たる也……彼の軟弱なる胸中には、尙ほ腐敗せざる勇氣あつて存す、潜伏せる勢力は、たとひ境遇の爲に壓迫せらるゝと雖も、決して滅盡せるに非る也、彼若し鄙の農夫に生れしならんには、必ずや勇壯なる男子となり、尙進んで王國に達すべし、若し帝王に生れしならんには、唯名聲を残すの外一物も遺す所あらざるべし、彼は人の難しとする所を撰べり、彼れ一國を統御するは、自己の生命を衰耗するよりも其勞少しとせるか、千軍に將とし萬馬の間に往來するは宴席に遊興するよりも容易なりとせるか、彼は快樂を追求して汗を流し、其精神を勞する也

短しと雖
も其生活
は快樂に
充てり

▲かく活きかく死せり、彼女の容貌には悲しきことも耻も無し、彼女は年月に依つて生息し、冷淡なる心情となり、年老ふるに至るまで尙ほ地上に生を保ち、

内部の苦痛を忍ぶやう、造られざりき、彼女の生きたる日月も亦爲したる快樂も、其時間は短しと雖も快樂のみにて満ちし也

▲吾人は歡笑し宴樂し相愛し美を味はんが爲に人世に出でたり、これ天の命じたる人生の道なる也

▲彼名譽の念に迷へる者は、宜しく戰場に出で、之を獲べし、我不名譽の心は酒杯以外に求むる所あらざる也

▲宗教家の喜ぶ所の野蠻なる儀式を爲すこと勿れ、又歴史を語るに於て戰慄する悲劇を語ること勿れ

▲今宵烈しく我れ歌はん、我れ快樂に狂すべし、古は狂して人を殺せし者ありき、されど我は人を殺さず、唯葡萄の血液を流すのみなり、古はユピテルの子、手を鮮血に染めて、恐ろしき大楯を持ちて戰ふ、我手は楯も矢筒も之を持ち得ず唯黄金作りの酒杯を擧ぐるを得るのみ、而して我凱旋の紀念とは、唯散亂したる花環あるのみ

酒杯以外に求むる所無し

葡萄の血液凱旋の紀念

拜金は下等なる物なり愛する也

大海の飲料

心神の歌起す

王國は何ぞや冠は何ぞや

▲黄金は唯是婦人の夢みる所、神よ此下等なる鐵物を好むの罪を許すこと勿れ、一旦黄金を好むの情起るときは、人は、人の爲めに感ずることを忘れ、社會的の情は死し、温和なる思想亦逝去るべし、又戰爭は黄金を好むより起るもの也、而して黄金の最も有害有毒なる力は、愛者の心情を破ること之れなり

▲萬物の母たる地、其乾くに於てや天の落滴を飲み、渴ける草木に恵みの雨露を與ふ、夕暮に立つ水氣はこれ大海の飲料也、太陽紅を東天に染めて昇る時は大海の雲霧深き涙を飲み、月も亦天の光輝の青白き流れを飲む也、さらば人々眞面目の心を以て思考せよ、自然の神聖なる法則は實に飲むことたる也、我れ自然法を我規則となさん、我れ宇宙を酒に於て祝賀せん

▲我れ飲む時は實に感ず、實に感ず詩歌の想ひ胸中に湧き出で、新鮮なる酒杯の露に浴して心中天の歌神を呼び起すを感ず

▲王國は何物ぞ、我は最も富み且幸福にして又人間第一等の者也、我杯に構はずして歌はん、想像我をして王よりも大ならしむ、ロシア王クロインスの宮

我宴席は
光榮あれ

老の感

凋み行く
生命

我之を求めざる也、我れ青天鶺鴒の臥床に横はり、蔦の蔓我額に纏り、我心の歡喜せる時、嗚呼王國は何ぞや、王冠は何ぞや、若し是等の物にして我足下に在らんには、我之を蹴散さんのみ、強力の者は戰場に突進せよ、花咲く葡萄よ我只汝の血を流すのみ也、かの溢る、林を見よ、只これのみは能く我に打勝つことを得ん我れ思へり、戰場に斃るゝよりも、酒宴に於て斃るるは心地好しと

▲我宴席は光榮あれ、歡樂酒より輝き出づ、四筵の若き樂師は、我の琴に合せて歌へ、紅き酒杯のめぐる時は、樂の心も調子も合せよ……我れ大に調子外れの事を嫌ふ、共に深切なる心を合せ、平和に整和に歡樂せよ……かく唯平和に、かく又幸福にあらまほし、如此生活はいや遠ながく息むことならん

▲我れ飲む時は我心清く、杯傾く時は我心高くなる也、而して其高くなるや、樂しき流れに於てす其味たるや世の交りの道を知る人のみ之を知らん

▲我れ知る、天我れに人生の路を歩むことを命じたるを、而して我が經過したる觀來りたる景物は、今や再び返へすべからず、嗚呼實に再び返へすべからず

凋み行く
生命

黄金墓の
中夜を照らす

▲我が將に往んとする所は、其如何なるや我未だ之を知らず、又知ることを願はざる也、之を以て「心配」よ、汝は我が如き心意には汝の鐵鎖を投じて之を束縛すること能はざるべし、否々我の如く感ずる者は、決して汝の奴隸たることあらざるべし、死の我に來らんまで、我尙は歡喜の豊艷なる花を集め、我が凋み行く生命を輝かさん、パックス(酒神)我冬を花咲せ、エヌス(女神)我墓にまで舞踏し來らん

▲我若し黄金を蓄積せば、一寸たりとも生命を延べ得るか、若黄金にして一時なりとも、死の手より呼吸を買ひ得るならんには、我實に此貴重なる礦物を積上げ、一朝運命其使者を送りて我をして、虚影ならしめんとする時は、我れ此礦物を以て生命の或時日を購得し、又其使者に賄賂して、彼をして再び地獄に歸らしめん、然るに金錢此能力を有せざる也、我れ焉んぞ妄りに死を恐れん、生命の日の不定何ぞ悲しまん、金光毫も墓の中夜を照らすことなし、我何ぞ金錢を求めん、唯我求むる所は酒席也、宴會也、朋友相會して樂しむ事也

暗き世路
は酒のみ
を照さみ

死は我が
嘆息を心
に介せず

死後墓上
に涙を注
がるを注
すを願は

快樂の今
日主義

▲今や涙は何處にかある、嘆息何處にかある、風に吹かれて飛び去る也、風に吹かれて飛び去る也、誰か我往く道を知る者ぞ、否々世路は暗き也、唯酒のみ能く之を照さん、然らば我れ泡立つ酒を飲み、以て人生の道を練り行かん

▲此酒杯中、一切我れの心憂を沈め眠らず、如何なれば、恐れを洩らし、又は無益の涙を流すや、「死」は我が嘆息を心に介せず、又涙に依りて其情を柔らめざるなり、樂しき笑顔の人も、悲しく歎ける人も等しく死なざるべからざる也、吾等無益に悲しまざらん、殊更に快樂の道を踏み外つし、好みて悲哀の道を行くべけんや

▲我れ何ぞ死後冷却せる無覺の墓上に、薔薇の花を撒くことを願はん、花吹く風も其色香も、死の冷却何ぞ之を感せんや、我又死後、墓上に涙を注ぐことも願はざる也、されども我れ今現に生ありて脈搏ち身體温かなり、今其香を吸ひ、燃え立つ色の薔薇を我額の上に香らせよ

▲今日我れ急ぎて杯を傾けん、宛も明日のあらざる如く、明日とならば、何かあらん、我又再び飲まんのみ、……終日日の照る間、時たちて花の如き光を暗く爲さる内は我等樂しまん

▲我れ髪薄くなりしや否や之を知らず、又意に介せず、唯我れ墓の方に近づきたるを知るのみ、されども死の近づき來るに従ひ、快樂の益々快にして又益々貴きを感じせり、我若し一時なりとも生命あらんには、其小時をも快樂の爲に費やすべし

▲假令額には老の波打ち、其紅は去れりとも、額に非ずして心を讀め、必らず愛の老ひざるを見ん、其愛は小兒也、日々生る、人必ず云はん、愛生れて幾歳ぞと死の念は凄きかな死神の家は暗く、其路は悲しく、其陰暗凄愴たる旅行の終りし時は、或等再び歸り能はざらん

▲或れ古代の長壽者を羨まず、年老いて足よろめき、心に恐れを懐くものとなることを願はざる也、一小時の快樂は、無味單調の永久よりも勝れる也

▲吾人が自然界を探究するに當りて、其注意を第一に惹く現象は果して是れ神

死近づき
快樂益々
貴し

愛生れて
幾歳ぞ

死神の家
は暗し

長壽者を
羨まず

自然の理
忍耐神

が我等の父たるの證明なるや、若し自然てふ者の目的を之が萬般の作工わざに就て窺はんと試むるならば、自然は如何にも殘忍無情刻薄にして、殆んど人を嘲弄せんとするの顔色あるに非ずや、自然てふ者の慈悲德澤を噴々頌讚せる人々を譏りて、ミル氏が『若自然の日々に行ひつゝある如くに行ふならば、文明國に於ては死刑に處せらるを、免かれず』と辨じたるは、幾分の道理ある者にあらすや

▲活眼を開きて世界を觀察せよ、全能者たる父神の顔容は何處にかある、世は是れ恰も夫の豫言者の卷物まきものの如く『裏にも表にも嗟嘆と悲哀と憂患とを録す』にあらずや、吾人は聖パウロの如く『萬づの受造物は今に至るまで共に歎き共に苦む』ことあるを知るに非ずや

▲世には患難苦惱充ち満てり、而して此事たるや罪の未だ世に入らざる前より然るが如くにして罪とは關係を有せざる者に似たり、地質學は萬般の岩石、及び永遠なる山嶽の證驗する所を吾人の爲に譯解す、人類の未だ場に登らざりし久しき前よりして、世は争闘殺戮の夥しく行なはれたる證驗歷々として見ゆ、戰慄して逃ぐるあれば猛烈にして追ふあり、其足は快捷に其肢は強勁にして其爪は能く裂き、其牙は能く咬むあり、強者は全く弱者の肉を食ふて活く、…皆是れ人類の未だ存在せざりし時代の正確なる記録中に特筆大書せられたる者也、此事實と全能なる造物主の存在するてふ信念とを、如何にして調和するや、實際造物主は世界てふ一大屠殺場の主なるの觀あれば也

▲神の永遠なる聖子が肉體を受けたるは、從來造物主と受造物とを分離せしめし大隔絶を繋ぎ合せ、此兩者をして或意味に於て一ならしめ、聖子が肉體を受けたるの功德に依りて、受造物の諸階級を通じて悉く神性を分有せしむるに至ると、果して然らば動物界の苦痛は人類の道德的練磨れんま一即ち苦楚を嘗めて完全の地位に達する練磨れんまに類似するに非るか

▲一見すれば獸力は飽迄も其暴を恣いままにするに似たり、我等が見る所は適種の生存に非ずして、最も強力なる最も殘忍なる、最も刻薄なる者の生存なり

哀にも表
露に悲哀
す悲患を録

造物主は
世界てふ
一大屠殺
場の主也

神性の分
有

柔和なる
者途に地
を調くこ
とを得

とや云はん、但し暫く待て、動物界に於てすらも、『柔○和○な○る○者』こそ外觀は如何に之に反するが如くなるにもせよ、遂に『地○を○嗣○こ○と○を○得○』べきなれ、暴力は終に必らず自から敗るゝの性質を有す、是れ一は自力の反動に依り、一は遂に自ら由て以て亡さるべき大反對力を喚起するに因る也、人間に於て然りとす、暴力を以て與り、暴力を以て維持する權勢は、遂に亡びざるを得ず、唯力のみを恃みし昔時の諸國は皆短命にして、岩に碎くる波濤の如く、互に相追ひつゝ皆亡びたり、動物界に於ても亦然り、唯暴力にのみ倚賴して生を保たむとする動物は漸く絶え、柔和にして有用なる動物は其後を襲ぎ來る、單に是に止まらず、柔和なる動物をして、強者の餌たるに易からしむと見えし品質は、正に是れ却て其生存に利せしもの也、是即ち苦○艱○の○練○磨○に○依○り○て○發○達○せ○る○結○合○の○性○質○に○し○て、能く柔和者を聯合せしめ、以て壓制者に敵するに餘りあらしめたり、如此我等は動物界に於てすらも、戰鬥の勝利は遂に疾足強腕なる者に歸せずして、溫柔耐忍なる者に歸するを見る、柔和なる者は必らず地を嗣がん、聖十字架は

苦艱の練磨に依り發達せる結合の性質

苦痛の感覺と無感

必ず刀劍に勝たん、如此下等動物の中にも代贖的犧牲の法は行はれ、全族の改良の爲に身を捨る者あることを明かにす、故に動物界の苦艱は、我等が一見して思ふ程に刻薄亂暴なる無目的の者にも非らんか

▲動物の苦痛は果して其外見の如く大なるものなるか、夫れ苦○痛○の○眞○所○在○地○は○靈○魂○に○在○り、戰場に於て心激昂したる時に、兵士は其兵器の重さ及び創傷の痛みを感ぜざること屢々あり、智力と感情他に向つて強く注ぎ居るに依りて、肉體に於ける神經の痙攣の如きは其感ずる所にならず、又心が俄かに大震動を受けたる時に於ても然り、肉體上の苦惱は暫く感せらるゝ事無し、我等をして苦患を愛しと思はしむるは我等の概括力也、即ち記憶、思考、豫期の諸力之をして然らしむ、我等は從來經驗せし諸苦痛を記憶に收め、而して其將に受んとする苦痛を豫じめ強く心に感ずる也、動物には此能力甚だ鮮なし、彼等に於ては大抵苦痛の到る毎に、之を新に感じ、苦痛終れば其感も亦滅す、久しく苦惱するが如き事ある無し、勿論人類に馴れて、其支配訓練を受けたる或動物は、少し

苦痛の功
用

く苦痛を記憶し、又之を豫期するや疑ひなし、然れども我等が茲に論ずる所は野に在る動物に關す、而して彼等の苦痛が實際果して然か甚だ大なりやは疑ふに足れり、僅かに暫く追はれ、速かに撃たれ、而して其生命は終る也
▲苦痛は動物を警戒して、其己れを傷け或は殺さんとする禍害を避けしむるに効あり、是れ豫防の功用を有す、動物若し苦痛を感ずること無くんば、其身恒に危殆に瀕すべし

苦痛は惡
しき物に
あらず

▲苦痛の感覺は、吾人有機體の外營に散處せる哨兵のみ、此等の斥候あるに非ずんば、吾人が生命の本城は不意を撃れて直ちに乗取れん、されば今茲に論述せる所の事が誤らざる限りは、夫れ丈の全範圍に於ては、苦痛は惡しき物にあらず、善き物にして其物自身の存在をも、之を創造せる者の行爲をも共に是となす、是自らは目的にあらず、或る目的に達するの手段也、而して其目的たるや仁慈たる者也、苦痛の性質自身も創造者が仁慈なる者……其受造物の利益の爲に與へ給ふ具……たるを示すが如き者也とす

苦痛は奮
勵努力に奮
しむる刺
衝力也

▲苦痛は動物を驅て奮勵努力せしむる刺衝力也、而して諸能力が練磨せられて發するは、偏に奮勵努力に由る者とす、各種の肉慾は缺乏を感ずるに起因す、而して缺乏を感ずる事は一種の苦痛也、動物もし肉慾てふ者なく、又其肉慾に由て起る活動なくば、何如ぞ其中なる許多の者が今然る如くに尙も果して美麗なるべきや、兎もし怖を懷かずんば、豈今日の如くに快捷ならん、獅子もし飢を感せずんば、豈今日の如く強勁ならんや、人類若し此世に在りて毫も闘ふべき者なくんば、豈今日の如く活潑、智巧、技術に富み文明に進まんや、苦痛は動物の發達を完全ならしむるに與かりて力あり、是れ善良なる目的を有す、既に善良なるが故に、此目的たるや苦痛を之が手段に用ふるを可とす、假令發達が幸福を伴はざるに於てすらも、此事は依然として然るべし、抑も發達なる者は、それ自身甚だ貴き目的なれば、之に自然に伴なふ苦痛は是れ眞個の惡事に非ずして、固より何の辯解をも要せざる也

▲苦痛が其受苦者を完美の域に驅るの力は、動物界よりも人間界に於て最も著

苦痛が人

を完美の
域に属する

苦樂厭世樂天
二三六
るしく見つべく、其身體上に及ぶ影響よりも精神上に及ぶ勢力に於て最も著しく見つべし、是れ靈魂を矯正し訓練するに於て其功最も大也、是れ心の硬復なる者を柔らげ、驕慢なる者を挫き勇氣と忍耐を生せしめ、同情同感を擴め、敬天の感情を働かしめ、全性情を鍛錬し、強堅且高尚ならしむる功あり、凡そ人は精金となりて出で來らんには、必ず先づ苦難の爐を経ざるべからず



戀愛

戀愛の解剖……女性の哲學的解釋……男子の戀愛觀……女子の戀愛觀……
戀愛の技術……戀愛の魔力……盲目的の愛……不貞の解釋……戀愛の飽醉……
失戀と苦痛……純潔なる愛情……道德と兩立せざる戀……情の傾向……
愛情と結婚……大詩人の戀愛觀……
▲色の戀のとは人は騒ぐが、何だか斯う、片手で仕事をして片手が遊んで居るやうな枯魚で茶漬を喰ふやうな、樂で、淺つさりして、苦しみは中位に苦しく、熱も中位に熱く肉を撈り取りたい程に痒くもなく、後れ毛を食ひ切る程に痛くもなく、思つた半分の齒答へがあるものぢやない

▲全體男と云ふ者はあんまり女の機嫌を取り過ぎる、五月蠅い、執拗い、甘い酸っぱい、東京ッ娘は人にチャホヤされるのが嬉しくはありませんが、男なら、若い男なら、何故、震ひ着くのを見つともないと突き飛ばして、痛かアなかつたかへつて、後で優しく云つて呉れないんだらう

戀愛

思つた半分の齒答へが無い

若い男なら

此眼には
勝ち得な
かつた

戀 愛

二二八

可憐な
滋味を
抜く

一握み
帽子を
落し上
げ振り
下す

▲屹と眸を定めて阿玉を睨めた、阿玉は男に見られて眩しがる女ぢやない、相手の眸の動く迄は此方の眸も動かさない、併し乍ら、未だ曾つて男に譲つたことのない阿玉も此眼には勝ち得なかつた、視線は脆くも折れて、自分の手の指の指輪の金に落ちた、お玉がこんな眼に遭つたのは、臍の緒切つて以來である、強く而も温かで、微塵も男が女を認めた時の厭味がなく、ア、美しい娘だと思つたには相違ないが取つて食へば旨さうな娘だとの邪念は毛厘も見えぬ、お玉は男に見られたやうに覺えない、唯太陽に照らされたやうに感じた
▲今の若い者は、みんな女の子に好かれることが嫌ひと見える、石鹼とか云ふ泡の立つ物を使つて、可憐な男の滋味を抜く
▲微かに齒の白さが見える程の笑顔を作つて、忽ちクルリと後向きになつたかと思へば、瓢箪の形した池の細い處、幅五尺許りあるのを、左迄身構へもせずヒラリと飛び越し、楹側に片膝突いて身を延ばしさま、帽子を敷居の内へ押し遣つたが、何と思つたか一攫み壁の上の落花を掬ひ上げて、ハラ／＼と帽子

逢つて
言葉を
交へ
なけれ
ば
云ふ
眞劍
な
覺悟
にな
つた

に振り掛け、急に驚いた様に飛び降りて、跡をも見ずに裏手の方へ駆け去つた
▲其美しさには、豫、要心して口元を引締めて居ただけ、男子の威厳を損ずる程の見惚れ様はしなかつたが、こんな恐ろしく氣高くつてさうして馬鹿にお俵な娘は今が始めた、幅五尺の水を、裾も亂さず脛も露はさず身軽く飛び越す娘は、今迄そんな者があらうと想像した事さへない怪物だ、帽子の上に花片を振り掛けて行つた悪戯は、之を無意味とすれば驚き敬ふべきものであつて、之を有意味とすれば驚き恐るべきものである、逢つて言葉を交へて見たいと云ふ浮いた心でなく、逢つて言葉を交へなければならぬと云ふ眞劍勝負の覺悟になつた

物の味も
覺えぬ

▲山女の置いて行つた飯櫃と膳を引き寄せ、鯉節を儉約した露の玉子とち、木の皮に鹽味を附けた様な鯖の干物、お負けに色の白くないお飯で、一人淋しく箸を取り乍ら、物の味も覺えぬ迄に山本は肝膽を砕いた
▲平生人を相することを以て自慢として居る河本も、小河内から山の半腹迄彼是

戀 愛

二二九

のまだ此娘
見破つた
結果のつた
なつたも
得

戀愛

四里近くの道をば、今朝から話し乍ら歩いて來たに拘はらず、まだ此娘の性質や素性に就いて、確かに斯と看破つた結果の一つをも得ぬのである、馬鹿にお転婆で、浮ついて居るかと思へば、馬鹿に沈着て、疑と一つの物を底に透る様な目で味へることがある、悪戯をしたり飛んだり跳たりして、心はまだ罪の無い小兒かと思へば、叱と改まつた形に、何もかも承知し抜いて態と知らぬ顔をして居る様な趣の見えることもある、御同伴に参りませうと唐突に申入れた時には、怖氣立つほど心を騒がしたが、扱て同伴に來て見れば別に變つた事はない、唯自分を道連れにしたわけである、語を換て言へば唯自分は道連れにされたわけである

充分の氣位

▲何たる飾りなさいであらう、お前達なんか生意氣を云つたつて仕様が、あるもんか、口へは勿論出さず腹の中でも豈夫思ふまいが、さう云ひ得る氣位は充分に持つて居るので、河本は二の矢が繼がない、仰げば日は午に迫つて、若葉の影人を染むるばかりである

戀愛の怖るべき罪

▲彼の女の毛髪も其容貌も、盡く我に酷似せり、人々の言ふ所に由れば、其聲の調子すらも我れの生き寫しなりと云ふ、彼の女の思想も趣味も皆我に類す、我は彼女を愛したり、而して我は彼女を殺したり……我手を以てせしに非ず、心を以て殺したり、彼女をして絶望せしめて殺したり、我れ血を流したり、は云へ彼女の血には非ず、されども彼女の血は流されたり、我之を見つゝも其を止むること能はざりき……此女何者ぞ彼の血統上尤も近きものなるべし、或は彼の妹たりしならん、然るに兩人互に戀愛せり、兩人心に其行爲の恐るべき罪なるを知る、然るに兩人互に愛せざること能はざりしなり、血族の兄弟の戀愛實に恐るべき罪たるなり

苦痛は智者の悲哀は人の智慧也

▲我寝しときは眠りに非ずして連續不斷の妄想なり、止めんと欲して止むる能はず、我が心中には不眠あり、我眼は外に閉すと雖も内に向て開けるなり、然るに我尙は生を保ち呼吸ある人の形を有す、苦痛は智者の教師なり、悲哀は人の智慧なり、最も多く知れるものは、最も深くはかなき眞理を悲まざること

戀愛

得ず、智識の樹は生命の樹とは異れり、哲學も科學も驚嘆の本源も、亦世界一切の智恵も、我皆之を盡し、又之を使用するの力を有せり、然りと雖も如此も、の毫も我に益なし、我れ人に善を施し又世に善人を知る、然りと雖も是亦我に用なし、我敵あれども我を害せず、皆我前に斃れたり、されども是亦我に用なし、善惡生命權力感情皆これ他人に存せるを見る、されども、我毫も痛痒を感せず、沙上に降る雨の如し、我畏るゝ所なく又望む所なし……之れ絶望厭世の極にして、苦痛遣る方なく、轉々反側願ふ所は唯此苦痛を忘るゝにあり、たい死能く此苦痛を忘却せしめん、然れども死は果して忘却を興ふるやとまで懷疑せしむる也。

▲王國も權勢も權力も長命も願ふ所にあらず、禍なるかな長命！之を得て何とせん、我れ已に其長きを厭へり。

▲余は行かん、何所に行くとも余が爲に泣きて呉るゝ人は一人もあらざるべし、極めて少しなりとも、親切になしくゝとも好き所だに、毫も親切なる心情あ

るなし。

▲罪の観念と其絶望とに苦しめられ、獨り静寂に在りと雖も、多くの妖靈は四周に圍繞せり、眼を閉ざして眠らんとすれど、外に閉ぢたる眼は内に開きて、妄念續々として息むことなし、死は其怖れざる所なれども死する能はざるなり、彼かくて苦しむ、自ら死する能はざるの情を謂ふて曰く今我斷巖絶壁千仞の上なる岩角に立てり、俯せば激流渦を捲き、松柏遙かにあるを見る、一瞬、一息、一擧、一躍、忽ち我身は亂岩の間に粉塵せられて永久の休息を得べし、我何を以てか之を躊躇す、我れ撥動の内部より起るを感ず、然れども我躍らざるなり、我は此位地の危険なるを知るも敢て畏縮する無し、我腦は眩惑すと雖も我足尙ほ確乎たり、之れ果して何故ぞ、必ずや我體內に一種の力の在るありて、我を支へて死なざらしめ、此苦痛なる生活を爲さしむるなりと、殆ど癡癡して生氣將に絶えんとす。

▲悪魔直に來つて彼を服従せしめんとす、彼忽ち意志を以て苦痛を制御し、戀

として來

我が自己の破滅者也

若き兩人の親密なる結果

戀愛

然として惡魔に面す、其意志の確乎たる、死すとも惡魔の下にあらすと誓ふ、惡魔よ汝は我上に力を有せず、汝我を左右する能はず、我爲したる事は我爲したる事なり、我が自ら爲して受くる所の苦痛は甘んじて我之を受けん、不死の我精神は自己の善惡の思想に向て自ら要求する所あり、心は自己の惡及罰の本源する所なり、我若し此肉體を脱離すれば、色を外部の事物に借らず、よく自己の智識より生ずる苦痛或は喜悅に吞入せられん、汝等決して我を誘惑し或は我を亡ぼすこと能はざるべし……我は自己の破滅者なりき、又此後も然るべし、去れ、汝等惡靈、今や死の手は我上にあり、汝の手には非る也

▲足下は愚人に非ずんば惡人なり、其若き兩人の親密になるより生ずる結果を前見すること能はずとせば足下は愚人也、又知りつゝ之を默許せしとせば足下は惡人也、足下何れなりとも其好む方を擇べ、此十二月の間、足下の目前に於て、又如何にも爲し得るの事情あるに係はらず、如此に至らしむるは實に笑ふに堪へたり

地平線上の輝點

妾自らの

女子の愛情は其全生命也、男子の愛情は其全生命也、別物也

戀愛

▲地平線上に輝く一點の光輝はたゞ彼女の愛情あるのみ、我れ過つ時は彼女益々我を憐みて忠告す、我運命は轉變し、我愛は遙かに去り、憎惡の矢は迅速に集まり來るの際に於て、汝は唯一の希望の星にして永久に光を失ふことなし

▲此愛情は、國も、位置も、天も人も亦妾自身の身分をも失はせて、少しも惜しとは思ひ申さず、過ぎにし夢の思ひ出は、まことに得がたく覺え申し候、自ら誇るには無之候へども、若し妾自らの罪を申上ぐるとならば、妾自ら其身を判決するよりも嚴しく判決し得る者は無之候

▲男子の愛情と、其生命とは別物に御座候へども、女子の愛情は女子の全生命に候、されば男子の方は、或は朝廷に、或は戰場に、或は寺院に、或は海上に、或は商業に、或は劍、或は衣冠、或は苦痛、或は名譽、是等を其交換として自慢、名譽及び大望等の念を生じ、以て男子の胸を充たすを得べく、誰しも之に洩るゝ者はなかるべしと存候、かく男子は凡て是等のものを持ち得ることに候へども、我等女の身に在りてはたゞ一つ再び愛することあるのみに候、されど

好みて死す
なるとは死
る者は死す
は嫌ひ申候

全然汝らに
吞入せらる

人生に於ける
婦人に

戀愛

再○び○愛○す○る○こ○と○は○も○は○や○叶○ひ○申○さ○す○候
▲た○と○へ○如○何○に○磁○石○を○振○り○動○か○す○と○も、其○針○は○な○ほ○北○極○を○指○せ○る○が○如○く、如○何
に○狂○ひ○候○と○も、妾○の○こ○れ○と○定○め○し○人○に、妾○の○な○づ○か○し○き○切○な○る○情○は○指○し○向○ひ○申
候

▲妾は爲すべきことは爲し申べく、妾の受くべき不幸は未だ十分に御座なく候、
若し悲みが妾を殺し呉れ候ひしならんには、妾は今までながらへ居らざりしな
るべきに、好みて死なんとする者は、死は嫌ひて避け申候、されば惜からぬ生
命をも此の最終の御別れの言葉の後までもながらへて、玉の緒絶ゆる時まで、
なほおん前さまを戀ひ、おん前さまの爲めを祈らねばならぬぞ是非もなき次第
に御座候

▲我は我を失ひ、全然汝に吞入せられ世界亦消滅す、汝は我に對して世界をも
打ち壊れるもの也

▲人生の太初は婦人の胸懐より萌芽し、汝の小さき言語は女の口より教へられ、

の位地

女子の嬌美

山は愛情の
告別を
反響す

宿命の表
中最も多
く人を殺
す者

汝の涙は女に依つて拭はれたり、而して生命其終りに臨み、幸運我身を去るに
當てや、以前に恩恵を施したる者も、今や一人として顧みる者なきの時、尙ほ
汝の側を離れず、汝の臨終の語を聴くものは女也

▲其嬌美は我恐懼の念を去りて希望を復活し、よく我をして再生せしむ、黄金
なせる鬢の毛は、雪の額に波立ちて房を爲せり、汝の頬は美の模型に従ひて作
られ、汝の唇はよく我をして美の奴隷たらしむ、汝の眼は又よく美術家の筆を
して失望せしむ

▲彼所に人生を脱出して森林洞窟に遁世せる彼れ何人ぞ、彼れ其所に狂妄し、
風に向ひて不平を吐露し、山は愛情の告別を反響す、人世を嫌ふの情は心中の
王となり、失望肢體に瀰漫して空しく愛の最後の告別を悲嘆す

▲或者は快樂に死し、或者は學問に死し、或者は過勞に死し、或者は病に死し、
或者は狂に死し、或者は戀愛に死す、然れども宿命の表中に列擧せられたるも
の、中、其最も多く人を殺すものは戀愛の絶望なるかな

戀愛

不死の火

胸中は暗
夜の如し

唯愛一心
也

女子の容
貌は無益
すに作られ

戀愛

二三八

▲戀は天よりの光明なり、不死の火光の輝く也、戀は吾人の生命の誤ることなき導者也

▲今や光明は消へ去りたり、今より何を光と頼み、我前途の暗きを照らさん、我呼吸は存すと雖も、生ける人間の呼吸に非ず、前には萬物我に嬌媚の色を呈せしと雖も今や我胸中は暗夜の如し

▲婦人の性たるや一意一心に愛するは唯一の術にして其他何の思ふ所なく唯愛一心也

▲美は實に人生終局の目的にして人生の大動機なり、又大理想也能く吾人を慰安して、精神を鼓舞し、活動力を生せしむるものは愛也、女子は此發動力の位置にあり、故に其目的に向て作らる、女子の顔は見んが爲に作られたるもの也、故にバイロン詩中の英雄フアンを謂て曰く女子の容貌はフアンに向つては決して無益に作られず、彼れ教會に行て祈る時も、其白髮の古聖者を見んよりも、顔を處女マリアの美はしき肖像の方に向けぬ

戀愛の學
術的解釋

麗美なる
詐僞者

▲男女相愛するは心理學的に云ふ時は、愛情其者が目的たる快樂にして、生子孫等は念頭に存せずと雖も、之を形而上學或は生物學的に考ふる時は、單に愛情的の快のみに非ずして、種族の繁殖其目的たるが如し、故に我子孫を生むを欲せずと雖も、愛情の結ぶ所必ず子孫なきを得ざる也、これ我意決して然るに非ずして然らざるを得ざる也、必ずや我以外に在て我をして之を爲さしむる所のものにて存すべし、之を世界の本體なりと云ふはシヨツペンハワーなりとす、彼の哲學に依る時は、此本體は盲目のものにして、愛情の錯覺的快樂に依て男女兩性を合一し、以て子孫を生殖せしむ、宇宙の目的は生殖にあり、女子は生殖機にして生殖これ大目的也故に箇人的に非ずして普遍的也、普遍的なるを以て、輕薄にして貞操少しとなす

▲女子よ一度汝を見たる者は、汝を愛せざるを得ざることは我が經驗の教ふる所也、さは云へ汝の嬌媚の前に在ては、唯汝を頌美愛慕するの外、萬事盡く之を忘却す……女子よ汝は麗美なる詐僞者也、女子は一日中にも約したることを

戀愛

二二九

變ず、汝の誓言は沙上に書かれし記録也とは永久不變の格言ならん

危険なる
深き渦巻

▲女子の心中は旋風也、又危険なる深き渦巻也、既婚者を始とし寡婦、處女或は母に至るまで、何れも皆其心を變ずること風の如し

女子は命を
子に命を
し又欺か
んが爲に
作られた
る也

▲汝の我に無情なるは我が怒に堪へざる所也、さはあれども女子は男子を命令し、又欺かんが爲に作られたる也、我れ汝の容貌を見ては、殆んど汝の無情を免したり、汝の笑顔を見るときは、我胸中の忿怒も疑念も、皆我が誤り也との念を起せり、我汝を見る時は、汝に對する忿怒は、忽ちにして汝の頌美と化し、我が心情に願ふ所は再び汝と睡ぶにあり

愛情海に
熱練なる
航海者

▲女子は男子の好美心、其下層には無意識に存する色情に訴へ能く男子を擒にして自由に之を弄ぶの力を有せり、故に男子は女子に命令せられ、又能く欺かるゝ者也、然れども必ずしも女子のみ之を能くするに非ずして、男子亦能く女子の愛情を左右するを得べし、之を爲さんには技術無かるべからず、技術を施さんには先づ女子の心理の工合を熟知することを要す、此愛情海に乗出さんと

互に伴は
るの技術

する者は最も熟練なる航海者たらざるべからず、而して航海を試みんとする者は精密なる心情的の海圖を知らざるべからず、愛情の海圖とは、男子は知性に由て思慮すと雖も、女子は唯感情に由るのみ、其感情は如何なることを情思するやは、神之を知り給ふ』是也

紅涙は可
悉武器也

▲男子の利己心は、能く女子の技術を看破し、女子伴らば男子も伴り、男女互に伴はると雖も、其愛情を減すること無く、如何なる徳義も、能く此最悪なる生殖を止むること能はず、唯餓渴のみ之を能くす

▲女子の紅涙の、其恐るべき愛らしき形容すべからず、これ眞に繊弱なる女子の武器にして、之を以て其身を助け又敵を服せしめ、同時に矛たり又楯たる也、之が爲に古來徳義を失ひ知識を誤り、國家を滅ぼし併せて天國を失ひたるものそれ幾何ぞ……トロヤ十年の激戦は一淫婦ヘレンより起りたるものなることを思へ

▲若し女子の若かくして、容色艶に美なる時は、王位も世界も全宇宙も、彼女

クレオパ
トラ

トウの眼
はセザル
平均せり

大シイザ
ロは戀の
口説者也

嚴正却つ
て滑稽

戀愛は偉
人の額を
玩弄す

の爲とし云は、何かあらん、假令天上よりは星辰を振ひ落さんとも、假令我身は自由を失ひ心緒錯亂することありとも、又假令彼女は悪魔なりとも、此情一旦燃ゆる時は、帝位も世界も棄て、顧ること無けん、アントニーはクレオパトラの眼に依て、アクチウムの戦に敗北せり、さらばクレオパトラの眼は、セザルの勝利と平均せりと謂ふべきか

▲大シイザは戀の口説者也、チトスは其主人也、アントニーは奴隸也、サッポアの墓上には中性的の者集るべし

▲如何に嚴正の容貌を装ふ人なりとも、尙且つ戀愛することありと思へば、彼等の嚴正は滑稽の情を喚起す

▲あゝ戀愛よ、汝は貞固なる結縁を不安となし、又能く偉人の額を玩弄す、ジーザ、ボンベ、マホメット、ベリサリウス彼等は、歴史の女神に筆を執らせ、勳功偉績を記るさしめたり、彼等の經歷及び運命は、變化甚だ多くして、かく價值ある歴史上の時代は、再び見ること能はざるべし然れども此等の四人に

は同一なる三事あり、乃ち彼等しく英雄なりしこと勝利者なりしこと、而して其妻の不貞なりしこと是也

▲グレンシア古代の傳説に愛情を示すに弓矢を以てす、ソクラテス之を解して曰く美は遙かに隔つと雖も能く我心に力を及ぼすを以てなりと、それ然り愛は又能く人を盲目ならしめ、又小兒たらしむ、故に曰く愛して同時に賢こからんことは難事也

▲嚴格武骨の人と雖も、戀愛に關しては軟化して骨無き如く、勇者勝利者なりと雖も、必ずしも婦女の愛情を乗り取る能はず、爲めに「偉人の容貌を弄び、以て之を滑稽にす」、古來英雄にして女運の拙なかりし人少なからず、又女子に嫌はれたるの反動を以て大業を成したる者少なしとせず、蓋し愛情の生滅するは、決して道義に由るに非ずして、唯相互の心情及生理組織の最も適合せるに基ひするものにして、權威富貴も戀愛の情を起すものに非ず、學才ありと雖も未だ必らずも婦人の愛を得ること能はず、恩愛を施すとも、愛情の報恩は期

愛情は弓
矢の如し

愛情の發
生及退潮

愛せらるる奴隷

唯神之を
知り給ふ

すべきに非る也、一度愛情ありし者と雖も、其退潮に當てや人力亦之を如何ともすること無し、愛情は自然也、人間の手中に有るものに非ず、故に愛情は起さんとして起るものに非ず、退くに當てや止めんとして止まるものに非る也

△愛は自由と共に存す、(壓制して情起るものに非ず) 妾の今の状態は愛せらるる奴隷にして、彼(夫)の光榮を共にし、外より之を見るときは、實に羨ましく思はるとも、其實情は左に非ず、胸中に自問して「汝は彼を愛するや」と問へば、烈しく否と答ふるなり、理由も無くして夫を嫌ふの情を去らんとすれども其甲斐無し彼れ妾の手を執れども、妾は與へず又拒まず、胸の動悸は遅くなる無く又速くもならずして、只冷然として静かなり、彼れ妾の手を放せば生活なき者の如く懸垂がるのみ

△媚目は秋波を生じ、秋波は嘆息を生じ、嘆息は情願を生じ、情願は言語を生ず、言葉は何時しか雁の翼に文を添へ、情を互に通ず、さて其後如何なる痴の起るやは唯神之を知り給ふ

眼の雄辯
愛は變化
すべき性
質を有す

女の戀の
變化

憐むべき
罪

酒より酔
を出す

家内の愛

△愛の言葉は言語よりもよく目に發顯するものにして而も、言語よりも雄辯也

△愛情の性質たる、其内己に變化の萌芽を有す、豈他あらんや、自然萬物に依りても之を推知するを得べき也、急激なるものは疾く止む、雷霆豈永久天に轟かんや

△花の香りを愛する人は、摘み取つて之を其胸に置く、されども花は此に凋まん

△凡て婦人の情として、其初つ戀には戀人を愛すと雖も、次には人の愛を愛す、婦人の初つ戀は一人の男子のみ、其後は多くの内より男子を選ぶもの也

△愛情と婚姻と一致することの稀なるは、實に人生の弱點にして、憐むべき罪たる也

△愛情よりの結婚は、酒より酔を出し、辛酸勞苦は時を歴て益々其味を強くすべし

△婚姻中には思慮の分子を包有し、後來の利害及び義理如何等を考ふるを以て、

情は戀格也

戀愛

二四六

全く純粹の愛に非ず、愛は盲目にして利害を思ふものに非れば也、故に若し單に愛情のみに由て結婚する時は、之れ實に眞正愛情的の結婚なりと雖も、遂に盲目的の愛たる也、嗚呼思慮的の婚姻には愛情なく、愛情的の婚姻は苦に終る、

愛情と婚姻とは終に一致すること能はざるが、故に一家を持つに至らば、情愛の夫婦も今や情愛的とならざるもの也、人も亦家内の愛情は變格とし、夫婦間には戀愛の情無きを常なりと認むるが如し、

▲情人なりし時の情は、人稱して名譽の如く云ふと雖も、夫若し妻のことを美として語る時は人稱して情痴と云ふ、されば小説は兩人戀愛の點を艶にし、筆を極めて描くと雖も、婚姻に至て茲に擱筆するに非ずや、凡ての悲劇は死に終り、凡ての悲劇は結婚に終る、著者若し其後を寫すときは前段の美を害すれば也。

悲劇小説の擱筆點

私通不貞

▲愛情と婚姻はよし兩立せざるものとするも、之に由て男女愛情の源泉は涸れにしに非ず、源泉を決すべし、愛の水は滾々として流れ出ん、雪の下なる種子

愛情なきの夫婦

は、春に逢へば再び緑に萌出つべし、其春風を吹かせ又停滯を決するの所行、吾人之を何とか云ふ私通一不貞

▲愛情なきの夫婦には幸福無し、若し幸福なからんには、婚姻の結繩及び道徳の性質に疑念を生じ、遂には道徳と幸福との衝突を感ずるに至らん、人は幸福を求むるが天性たる以上は、其之を得ざるに於ては遂に道徳を破るに至るべし、詩人格言を爲して曰く此高尚なる世界に於て、時には罪が幸福たり又幸福が罪たるは、實に悲しむべきの至り也と……人或は愛情は神聖にして、理性的、道徳的の者なりとするあらん、如此を「プラトーン的愛」と稱す

▲フリア、ソアンを見て愛情を起せり、されども夫ある身のかりそめにも、此の如きとあるべからざるを感じ、又宗教の爲め、名譽の爲め、及び道徳の爲め、以來決してフアンを見ること無しと誓へり、されど亦思ひ返へすらく「苟も貞操なる婦人ならんには、能く誘惑に抵抗し得て、始めて眞の貞操堅固と云ふべき也、誘惑を恐れて之を避くるが如き卑怯也」と、然り歳寒ふして松柏の凋む

フリアは深
ソアンは想
道徳なるは
像を以て
不徳の橋
りを渡した

二四七

に後るゝを知る、フリアの決心や健氣也殊勝也と云ふべし、而して「神聖純潔光明なる愛ありて、天使之を純潔なりと認め、母たるものも危ぶまざる男女の愛ありと思ふ人あらんこれプラトンの愛的の愛にして、フリアのファンに於ける愛情は、眞に如此ものなりと思ひたり」此理想を以て彼女ソアンと交はる「其愛情や無心にして毫も危険無くして存するを得べし、初めは手と手と握り合ひ、次には互に接吻す、此點までは罪あること無しと雖も、もし此點を越ゆる時は罪となるべし、此適當なる範圍内に愛せんとは、フリアの無邪氣なる愛情なりき」これプラトンの愛的の愛也、一時我邦に流行したる所謂情交なるもの即ち是也、美なりと云ふべし、されども遂にパイロンをして「あゝプラトンプラトンプラト、汝は深遠なる想像を以て不徳の橋を渡したり」と云はしむるに至るを如何にせん

戀愛と肉情

▲人或は精神的と云ひ、情交と云ひ、或は神聖なる愛と云ふ、其終る所は肉體的に非るは無し、殊に婦女子の如きは感情的のものに非れば好まざるに於てお

や「肉情は短時間なりと雖も、よく愛情を結びて鞏固ならしめ、精神的不變の愛を生ずるもの也」とは詩人の言へる所

不貞の解
釋
徳義の
作
れる
罪

▲凡て人は平和なるのみを以て快樂となすものに非ず、不安の情及抵抗の感覺は快樂をして一層大ならしむるもの也、故に盗みたる水は一層の甘味を覺え「盜視の秋波は盜視者に向つては一層の快事也」是人性の單調を嫌ひ新奇を好み、自己の有する勢力を發表せんと欲するの心理に由るものにして、有夫の妻之を爲せば不貞と云ふ、されども若し必然論に依るときは、不貞も亦止むを得ざる必然と云はざるべからず、此理を以て或種類の學者間に「自由結婚説」行はれ、愛情の存する間のみ夫婦たらんと主義を唱ふるありと聞く、これ愛情なきの夫婦は幸福ならざれば也、愛情なき者を強ふるは苦痛也、然るに徳義の念を以て之を壓制繫縛し、徳義の神聖は犯すべからずとせば、今や徳義を咀はすして夫を咀ひ「あゝ夫にして死せしならんには……」との思想起らざるを得ず、之れフリアの情なり、茲に於て私通生じ甚しきは夫を殺さんと企つるものあるに

多情に
し
て
貞操
を
守
り
難
き
性
婦
人
の
本
質

至る、罪なるかなされど之れ「徳義の作れる罪」なるを如何せん
▲婦人は元來多情にして、貞操を守るは難き所なるが如し、長途の旅より歸りたる夫或は父等は、其家に近づく時は必ず一種の小疑念なくんばならず、實に婦女子ばかりの家族程面倒なるものは有らざるなり、妻は夫の不在中にさかしくなり、娘は父の不在中家僕と共に走ることあり、正直なる紳士と雖も、其遠き旅行より歸りしときも必ずしもエリセスの如く妻に好遇せらるるものにあらず、母となり居る人なりとも、皆必ずしも死せし夫を哭するものに非ず、又盡くは戀慕者の接吻を拒絶するものに非ず。

不貞の性

▲不貞とは若かくして豊艶なる美が、或る愛すべきものを覆へる所を頌美するに外ならず、恰も壁窩に安置しある愛らしき肖像は、皆之を頌美するが如し、如此の實物頌美は、實に理想美の高揚したるもの也、之れ美の知覺也、之れ無きときは人生眞に乾燥無味に終るべし、不貞の性質如此男女に通じて然り且つ人の心情は天の一部たる空の如く、又晝夜あること天空の變化の如し。

純潔なる
男子の
貞操

▲バイロン男子の貞操を海賊コンラットに表はすコンラット日々美麗なる女囚に遭遇するも心を動さず、一意に妻を愛す、「然りこれ愛情なり、變ずべからず、又た變せず、只だ一人のみに向て此愛あり、假令彼日々美麗なる女囚を見ると雖も、是等には目をも止めず、心も亂さず冷然なり、然りこれ愛なり、其温和なる思想は、數多の誘惑に試練せられ、辛苦に遭ふて愈々堅し、夫婦久しく別るとも水天遠く隔つとも、其愛情は確乎たり、如何に時日を経過するとも、此愛情は弛むことなし」若し人間に眞の愛情てうもの有りとせば、これこそは其愛なるべし、彼は惡漢也、萬人の忿怒は一身に集まる、然れどもこれ唯他の一切の徳義の彼を去りしを證するに止まるのみ、此惟一愛すべき温和なる情に至つては、罪行其者と雖も、之を埋没消滅せしむる能はず、彼れ其妻に語て曰く汝に對する愛情は、遂に人間を嫌ふに至れり、若し我れ人間を愛すとせば、汝に對する我愛は忽ち茲に消ゆべきのみ

▲鳩は再度の愛を知らず、一愛死せば已れも亦死す、空中に飛ぶ鳥も、池に浮

戀愛の實

戀愛も亦
精養を要す

氣候の寒
温と愛情
の相違

べる水鳥も、一雄一雌に非るは無し

▲人○躰○に○在○て○健○康○は○愉○快○な○る○も○の○に○し○て○、○之○れ○真○に○戀○愛○の○實○質○也○、○健○康○と○遊○惰○
○と○は○、○情○慾○の○火○焰○を○熾○な○ら○し○む○る○油○也○、○又○硝○薬○也○、○健○康○の○神○セ○レ○ス○及○び○「○酒○神
○バ○ッ○ク○ス」○無○き○時○は○、○愛○の○女○神○ヴ○エ○ヌ○ス」○も○吾○等○を○攻○撃○す○る○こ○と○能○は○す

▲戀○愛○も○亦○吾○人○身○體○の○血○液○の○如○く○、○其○營○養○な○き○時○は○生○存○す○る○こ○と○能○は○さ○る○也○、
セ○レ○ス○は○食○を○供○し○、○バ○ッ○ク○ス○は○酒○を○注○ぎ○、○或○は○ジ○エ○リ○ー○を○與○ふ○、○雞○卵○及○蠣○等○は
又○色○情○的○の○食○物○也

▲人○或○は○斷○食○し○或○は○祈○禱○す○と○雖○も○、○肉○體○は○弱○く○し○て○精○神○之○を○如○何○と○も○す○る○こ○と
能○は○す○、○人○間○は○艶○事○と○稱○し○、○諸○神○は○姦○淫○と○稱○す○る○も○の○は○、○多○く○氣○候○の○温○暖○な○る
國○に○行○は○る

▲南○方○温○暖○の○地○に○生○れ○た○る○人○、○及○び○そ○れ○に○相○當○せ○る○熱○情○的○の○人○と○、○北○方○的○冷○淡
な○る○人○物○と○は○、○自○か○ら○其○德○義○を○異○に○す○べ○し○、○今○若○し○北○方○的○の○眼○光○を○以○て○、○南○方
的○の○道○徳○を○見○る○時○は○、○彼○れ○南○方○の○状○態○を○以○て○、○直○に○不○道○徳○と○な○さ○ん○、○而○し○て○北

悦ある喜

若此美な
き時は世
界は乾燥
無味のな
らぬ

方○的○の○人○は○自○然○に○道○徳○の○名○稱○を○取○る○と○を○得○ん○、○此○に○於○て○バ○イ○ロ○ン○嘲○弄○的○に○北○方
人○を○羨○や○み○て○曰○く○道○徳○的○北○地○の○人○々○は○幸○な○る○か○な○、○其○處○に○は○人○皆○道○徳○な○る○の○み
▲彼○等○の○關○係○は○決○し○て○道○徳○的○男○女○の○關○係○に○非○り○き○、○然○る○に○彼○等○は○不○道○徳○に○於○て
幸○福○な○り○き○、○不○義○の○關○係○に○於○て○罪○ある○喜○悅○を○味○ひ○た○り

▲昨○夜○假○装○會○に○於○て○、○一○箇○の○美○婦○人○を○見○た○り○、○而○し○て○我○心○中○一○種○の○情○起○る○、○哲
學○直○に○來○り○て○我○耳○に○囁○き○て○曰○く○「○汝○神○聖○な○る○婚○姻○の○結○繩○あ○る○こ○と○を○思○へ○と」○、○余
曰○く○「○余○之○を○思○ふ○、○さ○れ○ど○も○彼○女○の○白○き○齒○鳴○呼○其○眼○の○美○は○し○き○を○如○何○に○せん、

彼○女○は○人○の○妻○な○る○や○、○或○は○處○女○な○る○や○、○我○之○を○知○ら○ん○こ○と○を○欲○す○唯○好○奇○心○の○み○、
哲○學○曰○く○「○默○せ」○余○其○言○の○如○く○默○し○た○り○、○さ○れ○ど○も○不○貞○と○云○ふ○も○の○、○如○何○な○る
も○の○な○る○や○を○思○は○ん……人○の○不○貞○と○稱○す○る○所○の○者○は○、○唯○或○る○愛○す○べ○き○物○を○、○自
然○の○豐○艶○な○る○美○が○覆○へ○る○所○を○頌○美○す○る○こ○と○に○外○な○ら○ず○、○宛○も○壁○窩○に○安○置○し○あ○る
愛○ら○し○き○彫○像○は○、○吾○人○皆○之○を○頌○美○す○る○が○如○く○に○し○て○、○此○の○き○の○實○物○頌○美○は○實○に
理○想○美○の○高○揚○し○た○る○も○の○也○、○之○れ○即○美○の○知○覺○に○し○て○、○吾○人○の○官○能○の○一○種○の○擴○大

男子は多
妻の傾向
を有す

其感應は
毒藥の如
し

我糸は唯

也、此美たるや實にプラトンの、宇宙的且つ驚くべきものにして、天上の諸々の星に其源泉を有し、諸天を濾し通して人界に來りしもの也、若此美なき時は人生は極めて乾燥無味のものならん、短言以て之を蔽へば、之れ吾等自身を目を用ひ、而して一二の小感官の之に加はりしものにして、我等の肉體は熱氣ある塵埃より形勢せられたるを暗指するもの也
▲若し吾人永久一人の婦人に満足し得るとせば、如何に吾人の心も肝臓も喜ばしきことなん

▲彼の白き容貌は實にこれ我不運也

▲彼女は常に彼の書を手にして離す事なく、宛も鋼鐵にて結べるが如く、或は之を讀みて枕の下に隠し置きし事あり、而して此書の彼女に感應したる事は毒藥の如く、感情の暴風を起して全身を覆へし、終には之に得堪えずして、以後斷然此の大著述を讀むまじと決心し、其有力なる大魔力を脱せんとせり

▲我琴を鳴して烈火の如き名高き人の事業を歌ひ、其高き音に合はせて、アト

戀にのみ
響く也

ロイスの子の戰場に進み、チリアのカドモスの遙かの地に偏歴し時、如何に勇者戦ひ、國民斃れたるやを歌はんと欲し、琴掻き撫でしこと其幾度なるやを知らず、然るに糸の響き忽ち消え、我琴は勇ましき曲に響くを好まずして曰く「我糸は唯戀にのみ響くべし」と、我れ此柔弱なる音聲を憤はり、未來の名譽に燃え、一層高尚なる調べを以て、戦争なるかな戦争なるかな、我が琴は實に戦争にのみ適せりとなし、乃ちヘーラクレース及アルキデースの英名を歌ひ、消え入る音を再び強く掻き撫でたり、然るに片意地なる我が琴は優しき聲をもて曰く「さらばよ、戰場名譽の大將よさらば、戦争呐喊の聲響よさらば、我糸は他の優しき事にのみ響かん、唯愛のみは樂しかり、名譽の夢よいざさらば」と
▲我れ王國の如きは空なりとなす、ベルシヤ王の富強、我其王位も羨まず、又蓄積せる金錢も我欲する所にあらず、唯我願ふ所は薔薇の花の我額を覆ひ、其香の馥郁たらんこと之なり

▲去れ規則的人よ、去れ、學問我に用なきなり、學者は我をして學ばしめ、

去れ規則

又考へしむと雖も、能く我をして飲ましめ、又能く愛せしめ得るか、願くは我精神をして漫々と湛ゆる酒杯の中に泳がしめ、我胸をして神聖なる女神ニンを擁せしめよ。

戀 愛

我れ愛と戦へり愛と其矢を注ぐこと急也

▲我心は決定せり、戦争は止みたり我終に愛することに決したり、愛の子キユピッド微笑して我を招きて従へと命ず、我心に謂へらく、唯愛の一微笑を以て我内心の静平に代ゆること能はずと、即ち其優しき招きを拒絶せり、是に於てキユピッド怒りて直に弓矢を取り、我に戦場に來れと挑む、我亦武器を手にし勇氣を以て愛と戦はんと欲し、乃ち甲冑を着し、楯を持ち槍を携へて戦に臨む、我れ愛と戦へり、我れ愛と戦へり、愛其矢を注ぐこと急なり、我恐れて遁れ、而して我が負傷せざるを誇る、彼れ今や一矢だに殘すことなし、然りと雖も我内心を伺へり、我心、嗚呼死せり、知らざるの間に愛の神は我心に座を占む、我楯よ、我汝に暇を告げん、何ぞ我に不忠なるや、嗚呼無益なるかな外部を勉むることや、我敵外にあらずして内にありき。

愛情は徐々に心内へ終りに達す如く何れもすすべからず

眼の矢に

▲夜も深く大熊星は天に輝けり、人は盡に勞れて今は安く眠れり、此寂寞たるの時一小兒來りて戶外に音なひ、悲しげなる聲を以て我れに宿りを乞ふ、我れ目を覺して何者なるやを問ふ、小兒答へて曰く、別に異しきものに非ず、一人寂しき荒野を辿り、雨降り來りて我身を濡らし、霧深くして一點の燈火だになし、願くは一夜の宿を借し玉へよ、我其憐れなる話を聞き、又夜風の吹けるを聞き、火を點じて戸を開きて小兒を入らしめて之を見る、嗚呼これ愛の子なり、夜目にも其容貌は輝けり、彼の手足は冷却せり、我れ憐みて小さき手を握りて之を暖ため、愛ふる勿れと告げ聞かせり、小兒漸く温まれり、乃ち我に請ふて曰く、願くは我弓を試みることを許せ、夜雨其弾力を弱めもやせんと、彼れ矢を弓に番ふるかと見れば、早くも矢は飛び來りて我胸に中り、心の深き奥に立てり、小兒忽ち微笑して飛び去りつ曰く、さらばよ、我弓は雨にも弱められず、我矢は尙ほ能く人を狂はしめ得ることを知りたり、さらば、さらば。

▲天は牛に角を興へ、馬には迅速なる足を興へ、獅子には鋭利なる牙を興へ、

戀 愛

は戦争の
矢も敵す
る力無し

戀・愛

二五八

人には天の光明たる思考するの心を與ふ、萬物皆天に得る所あり、天豈女子に一層善き者を與へざることあらんや、嗚呼快樂の子たる女子よ、天は汝に美を與へ、眼の光を與へたり、眼の矢には戦争の矢も敵する力なく、美の火焰には戦争の火焰も尙ほ消え去るべし、女子よ美なれ、我れ汝を讃めん、微笑せよ、世は汝の前には弱かるべし

美の至大
なる勢力

戀に就て
種々の願

▲美は實に至大なる勢力を有す、一種の理想的の力也、然りと雖も美は單に遙かに置きて之に對して見るのみを以て満足せらるべきに非ず、必ずや我れ其美に觸れ、出來得る限り密接し、成るべくは美其物と化したらざれば止まざる也、哲學者茲に曖昧なる言語を以て之をエクスタシー「恍惚」と謂ひ、詩人は天地と同體になると云ふ

▲若し我れ鏡ならんには、其神聖なる微笑を照らし、我心の如く唯君のみを寫さんものを、若し我れ衣にてあらんには、君の四肢に纏りて情けき肌に觸れなんものを、若し我れ帯にてあらんには君の胸に觸れて其呼吸を感すべきに、羨

同上

ましきは眞珠なるかな、雪の肌に觸れつゝ輝やく、若し我れ珠にてあらんには、又其如く有らんものを、我れ此何とならんとするや、願くは草履となりて、君の足にて踏まるゝは、我の樂しとする所

▲我れ若し軟風となりて君の上衣に戦まぐ時は、君其胸を開きて容れ玉へ、我れ願くは百合の花となりて温かなる君の胸に凋まん、我れ願くは薔薇の花の蕾とならん、然らば摘まれて君の雪なす胸に置かれて其處にて花咲くべし

同上

▲戀しき人の手袋となり、其美しき頬を接吻せんことを願ふ

▲人は美の奴隷也、されども心よき奴隷にして、其束縛と命令とは好みて之を受くる也

心よき奴
隷

▲一日ミューズの諸神、花の糸もて愛てふ小兒の手を縛り、之を天の美に與へ、以て其奴隷となせり、小兒の母多くの玩弄物を持ち來りて小兒を連れて歸らんと欲し、種々に之を諭すと雖も小兒は歸らんとする心なく、其花の鎖を取らんとせす、又鎖を取り去るとも尙ほ歸らんとせすして母に向ひて云ひけらく、

戀・愛

二五九

「若し之をしも束縛と云ふものならんには誰かは自由を願ふべき」と

愛より受
けし傷

▲我れ愛の近づく迄は幸福に花咲きしに、一度び愛來り纖弱き我枝に觸れしよ
り、我れ其傷を受けて、それより心の平安なるは一日だに無く、冬の河瀬に柳
の枝の力彼方此方に振り動くやうなれり

戀愛と苦
痛

▲一日愛の子キユピット草の上に横はれり、時に蜂ありてキユピットを刺す、
キユピット痛さに堪えずして聲を揚げて泣けり、母エヌス行きて之を見るや、
キユピット「小さき怒れる物、羽根ある小蛇我を刺せり、我れ痛さに堪えずし
て死なん計りなり」と、母云はく、「汝蜂に刺れて痛みかくも甚しとせば、汝の
矢に由りて射られたる人の痛みは幾何なるやを思へ」と

尤も痛切
なる苦み

▲戀は苦しきものなりと雖も、戀なきは又一層の苦しきことなり、然りと雖も
其最も痛切なるは我人を愛すと雖も、人我を愛せざる事也

可愛き鳩
の文使

▲可愛き鳩よ、汝何の爲に翼を動かし、空よりは香ばしき花の香を降らすや、
汝何處より何處に行かんとするや願くは余に告げよ、鳩の曰く汝は奇妙の人な

其僅愛す
べし

るかな、我はテオスの詩人の内の者なり、今其命に由りて美はしきニンフの許
に使用するなり、其ニンフ眼は青天の如く澄み、見る人をして盡く恍惚たらしめ
又狂せしむ、特に我詩人は最も心を奪はれし者なり、我今空を飛びて詩人の愛
する彼女の許に戀愛の文を運べり、我羽翼は暴風強雨に對し、山谷に飛遊して
食を求め巢を得ること能はざれば、アナクレオンの手より甘き食を得、彼と共に
に杯より酒を飲むなり、酒飲まば我れ琴の音に合せて羽を廣げて舞ひ、樂人は
歌を歌ふ、宴終れば我れ琴にとまりて眠り、又も樂しき曲を夢む、我が言ふべ
きことは是のみなり、妄りに時を費やしたり、いざ往かん、さらばよ

實に静け
き樂みな
らすや

▲可憐の少女、此處に來りて暫く休め、木の葉茂りて屋根を爲せり、いとも樂し
き景色かな木は尙ほ若くして、吹く軟風に櫛くしげられて振り動き、泉の聲は耳に澄
みて冷しく覺ゆ、げにこれ静けき樂みならずや、嗚呼少女誰かは此樂しき場所
を見過ぐべき、我も汝も見過ぎはせざらん

群書中の

▲群書中の奇書と稱すべきは愛情の書也、専心之を味ふに、其數葉は歡喜快樂

奇書
眼の火涙
の海

心の奥の
美はしき
一間の室

愛の幻化
力

暗香
失戀の苦
痛

の事にして、其全部は悲歎愛悶の事のみ離別其一段を爲し、再會其一章を爲す
▲愛情は嘆息の氣に由て生ずる所の激動也、之を怒らすれば眼中火焰出で、之
を苦むれば涙の海に水まさる、是豈他あらんや、忿怒怨恨及び馨香たるのみ
▲人心の奥底に至淨なる美はしき一間の室あり、眞實の深き者ならでは之を覗
ひ知る事能はず、其室の名は「愁の中の樂」と云ひて、隱語にさも似たるが、
是なん愛情と云ふ者なりける

▲日輪の金光は黒雲を轉じて金とならしむ、愛の物を感化するも亦此の如し、
愛は其氣息に觸るゝ者を感化して之を貴くす、是即ち愛の幻化力也

▲樂は常に明るき處にて光を發つ、然ども愛は暗き處にても亦香氣を放つ

▲人は朋友に棄られ、世に棄らるゝも、尙其慘憺を感ずるに於ては寥しからず、
其燃たつ憂愁を悲みて冷し、其失ひし者の形像を心に念ひ見る時は、過去は嬰
孩の如くに己れの傍に遊び戯むれ、未來は己れの前に明鏡を捧ぐる也、斯る人
は慘憺と涕淚とを友となし、心靜かに慕ひ暮し、念ひ明して樂自ら其中にある

別離の情

靈妙なる
光輝

永遠不滅
の光輝

べし、然れども若し思ひ違へなどよりして我身より愛を失ひたりと心に感ずる
ことあらば、其時こそは深く悶え惱まざるべからず、己の故郷をも立去らんと
す

▲寔に別離と云ふ者は、悲しくも亦美はしくも思はるゝ者なるよな、然るから
に此身は明る日まで、おさらばよ君安かれとは言ひ得ざりき

▲同情同氣の男女二人相會する時、其心鼓動して熱火熾盛なるは、是他なし、
愛情の光輝たる也、此光輝たる靈妙にして甚だ力あり、此時に當りては反抗な
く選擇なし、天の結び合する者は人之を解き離すこと無し

▲男の愛は蓮葉に玉なす露の如し、其中には彼虹の諸々の色盡く具はる、然れ
ども日光之を照し輝かすに至れば忽ち消失す、又女の愛は多角金剛石の如し、
其殊勝なる所は金剛不壞なるに在り、但し其露滴も金剛石も共に神靈たる日光
の照映する者にして、其中には永遠不滅の光明ありて、下土の塵中に存在する
也

無限なる
愛の徳

慾と炬火

濁水中の
五彩

戀人と妻

人生儘に
なるなら

戀 愛

二六四

▲嗚呼盛なる哉愛の徳、愛は誠に神妙にして其力は無限也、宜なる哉人汝を名けて精神の王となすこと、諸元素皆汝に服す、汝は能く相生相剋を調和す、凡そ生活する者にして汝の眷顧を被らざるは無き也

▲愛慾の人に於けること炬火を執て風に向ひ行くが如し、恐者炬火を釋すば必ず手を焼ん

▲人愛慾を懐いて道を見ざる時は、濁水の中に五彩を投じ、力めて之を攪亂せるが如し、衆人共に水上に臨むも、其影を見ることを得ず、愛慾交錯して心中濁るが故に道を見ざる也

▲戀愛は、見てよきものにて可也、されど妻は、家婦として適當なるものならざるべからず、戀愛の生命は、家庭をはなれたる所に存す、唯二人、花園に逍遙する間が戀愛也、一たび家庭を作れば、乃ち戀愛は消滅せざるを得ず

▲嬌羞を帯ぶる間が、女の花なれば、戀愛は神聖なりなどいふ間が人生の花也、人生まゝになるなら、唯戀愛のみありて、妻は無いもがなと思はるれど、人間

の常情、結婚無しには濟まされず、寢酒にありつかむと働きつゝある間こそ面白けれ、戀愛は青年者の夢也、結婚は其夢が覺めたる也



戀 愛

二六五

男と女

視線に透る一種の光り

顔の美を支配する力

顔の美を支配する力……氣の利いた新造ッ兒……意氣張り見得張り……樂天主義の男女……女の古手……薄墨で書いた繪のやうな一生……涙は女性の良藥……女と生理心理の微妙な作用……世話女房……意地悪い程悲酸な女……双方より見たる男女……姉妹……三都の女性……可愛い男女の兒……男達に非ずんば泥棒のやうに粹な男……ヒステリー性婦人の代表者……詩化されたる東京的真髓の女……俗を離れた女離れぬ女……氣の鈍い女……妾と後家……美人と醜婦……再婚の婦人……男の浮氣女の我儘……顔面に閃めく人を魅する力……婦人令嬢と花柳界の女性……薄紅な神

▲芝居寄席花見神詣でと生れ落ちるから目玉を働かしてばかり育つて來た東京女は、年を取つても其視線に透る一種の光りを失はない

▲女の顔の美を支配する権力は眉毛が持つて居る、眉毛は實に女を活殺する大能力者である、天然人事共に健康に不利な東京は遺憾乍ら女的美を妬む癖がある、折角顔の造作の揃つた美人に癡病のやうな眉毛を與へて、目の働きの配合

名題娘

意氣張り

女の樂天主義

氣の利いた新造ッ兒

東京女が理想の男

を害するの例は極めて多い

▲特別に東京の祝福を受けて自在な目の働きを鬼に鐵棒の眉毛に助けさる名題娘は少ない

▲東京女は棺桶へ片足を突つ込んでも微塵其意氣張りを見得張りを弛めない弛めると直ぐ腰が曲つて仕舞ふ怕れがある

▲東京ッ兒の樂天主義は野郎ばかりの専有ぢやない『涙に剝げし白粉の』と搾れば水の垂る若い聲を轉ばして湯歸りの三尺帯にイヨウ昔の新造と顔を覗かれるのが五十有余のお婆さんの生命である、尻をひつてもお念佛を申す同じ年頃の田舎者と比べて見れば東京人は醒めざる酒を飲んで居るかのやう

▲今時の新造ッ兒に小股の切り上がつて腿の締まつて振袖に風を孕まして、腰で梶を取つてフハリ／＼と地べたを三寸も離れた所を舞ふて歩くやうな氣の利いた代物は金の草鞋で搜がしたつてない

▲強さうでスツキリとして無口の方だけれども適にはアツと云はせる旨い洒落

も出て、羽織の紐だの帯だの下駄だのに身上九で打込むやうな凝り方をする男は東京女の理想とする男だ

▲幕府衰亡の兆として出た新内しんないと云ふ力なき悲哀の聲は幾多花の如き青春の男女を誘ふ嵐となつたらう、今も猶ほ昔の名残りの女の古手に依つて大路小路に絲の如き亡國の聲を揺るがし、動もすれば痴男痴女の運命を或る傾向に導くのである

▲輕佻浮薄は東京人の氣風であるがそれが輕佻浮薄のなりに陶冶され鍛鍊されて美化し得るのである、浮世を鑑一文に値踏して自分の生命を玩弄物のやうに取扱ふとは輕佻浮薄の最も甚だしいものではないか、而も苦樂生死の表に超脱して毫も局促の態なく薄墨で畫いた繪のやうな一生を送るのは亦是一種の美ではあるまいか

▲人生に悲酸も多いが其悲酸や世間の同情を買ひ得ず、己れ自身さへどれ程悲酸の境遇に在るかを知らずに居る所の、即ち殆んど滑稽に近い程意地悪い悲酸

女の古手

薄墨で書いた繪のやうな一生

余りに重過ぎる負擔

涙は女性の良薬

生理心理の微妙なる作用

世話女房

時めく女
男落ぶる女

は弱い婦女子に對して餘りに重過ぎる負擔である

▲女と云ふ者に若しも涙を出すことを禁じたなれば大抵の女は發狂せず居ない女は常に其頭の中に發狂の分子を蓄積しつゝあるものだ、それが充分に蓄積されて物になつたら大變、ならない内に時々涙を以て洗ひ流す機會があるので先づは無難なのだ、泣いた跡と雨降つた跡程氣の晴れることはない、涙は生理的にも生理的にも女の爲に最上の良薬である

▲呉服屋と小間物屋の老舗には女の子が多く生れ別て比較的繚繚の好い娘の生れるは理屈よりも事實である、如何に微妙なる生理的及び心理的作用であらうか
▲意氣張り！是は東京の女の生命で亦生命を絶つての刃である東京の女は多く見掛より弱いのである、横面を張る札ビラに唾を吐き掛けて、迎への玉の輿を足で蹴飛ばし白魚細き無名指へ去年誂へた指輪が喰ひ込む程に太らした迄の世話女房振り、適れ出来したと譽めてやつても惜しくなつたやうだが、扱て其次が問題
▲向ふから天下泰平にプラ／＼やつて來るのは美しい着物の生きた陳列臺とも

云ふべき男女の一對である、こちらから内外多事らしくチヨコく小股走りに行くは邪慳に服装を糞した中年増である、諸君如何に思はれる？世に落ちぶれた女が狭い往来で時めく男女の一對に遇つた時、女の傍を摺れ違ふものであるか或は男の傍を摺れ違ふものであるか、それは殆んど一定の法則の如く女を避けて男の傍を通るものである。

▲年は二十七八目尻の切れ端思ひ切つて上を指し、鼻筋小氣味好く通つて一寸の虫が有する魂の寸法を示し、東京種の女に特有なる武蔵野の秋の末のやうな生え際、乃至店晒し物の鼠双子幾度か揮發油を浴びせられた唐縮緬の半襟其全體を包む鼠色の空氣に此女の不可思議な半生の歴史を込めて居るやう

▲意氣張と後悔との激しい戦ひを其心にも其歴史にも充たし墮落と煩悶を墓場迄携へ行くところの東京女の或種類がある、彼女は後悔の苦いよりも其次に来る自棄の味の酸っぱいのを厭ふ爲に態と何時迄も後悔を舌の上に乗せて置いて吐き出しもせず呑み込みもせず終には其苦味から一種の甘味を噛み出しそれを

其全體を包む鼠色の空氣

後悔を舌の上に乗せたまゝ

氣味の悪い化物

粉屋の幽霊

女の眞面目な希望

白き花紅き玉

唯一の慰安として生きて居るのである

▲東京は一風變つた女の古物が多い、中にも人間の骸骨を鼠縮緬の切れで包んで其上を白い粉で塗り潰して太丸番の地の鬘を附けたと云ふやうな氣味の悪い化物は殆んど特産物だ

▲奥様の七つ道具を抱へて洗湯へ行く後姿が寺の門に消え去らうとして居るこれから粉屋の幽霊になつて歸つて來られる迄は大丈夫二時間半は僕の世界だ

▲白粉を塗つた頬へ涙が地圖の川を畫く

▲女の見得張りは其競争心の結果である世界に自分以上の美人なからしめ自分以上の美服を着た女なからしめたいのは、凡ての女の眞面目な希望である

▲姉は白き花、妹は紅なる玉、姉は俯向いて微笑し妹は仰向いて大笑する、姉は岸邊に打寄する一帶の白波を見てどんなに冷たいんでせうと首を縮め、妹は眞面目腐つて海の果迄は五里もあらうかと云ふ、姉は詩的感情を有し、妹は推理的頭腦を具へて居る

三部の女性

▲京都の女は甘く苦い、東京の女は酸っぱく濃い、京都の女は黄色で東京の女は青い、山の手の女は京都に近く、下京の女は東京に近い、大阪の女は唇で物を云ひ、東京の女は舌で物を云ふ、大阪の女は眉で物を見、東京の女は鼻で物を見る前から見れば京都の女と大阪の女と近く、後から見れば東京の女と大阪の女と近い。

可愛い女の見

男の子の見本

▲大きいのは女で筆ちやんと云ふ、齡を問へば軒の楓の様な小さい血色のいい手を開き、其上に一方の手の可愛らしい人さし指を載せて出す。
▲去年は病上りで元氣に乏しかつた徳ちやんが顔も圓く身體も圓く肥え太つて兩の頬に刷かれた紅は、今年六つになる山の子の壯健と梳白とに燃えて其活潑なこと宛然男の子の見本の様である、這ふてばかり居るもの、様に思つた賢ちやんも、今年はやや三つだ、チヨコと走り出で、兄さんへ御土産のサーベルを引つたくり、开を引抜いて、ウムと力みつゝ振り上げた武者振り、可愛くて抱かすには居られない。

婆さんやうな美しさ

男達に泥棒のやうな癖

ホステラの女性代表者

▲爺さんは多少運命と苦闘した痕が見えるが婆さんは何の痕も無い、自分は茲に於て若い女の美ばかり玉に比べられては無く、婆さんの美も亦玉のやうなと云ひ得ることを發明した詰まり新しい智識を一つ得たのである眞誠にこんな情深く氣立ての好い婆さんを見たことは無い。
▲男達にあらすんば泥棒の如く粹なもの、身體に障れば羽二重よりも柔らかくつて、たいてい見れば、紫檀の柱へ瑪瑙の珠を打つ着けたやうな響があるもの、息が自然に芳しくつて櫻の花を嗅ぐやうなの、併しそんな男は今の牛肉臭い世にありさうもない。
▲淀君が驕慢なるホステラ女性婦人の特色を極端迄に發揮し及び、多少不身持の形迹ありしは、全く秀吉の妻たる能はずして其妾たりしが故なり、秀吉を獨占すること能はざりしが故也、彼が如き美貌と、それに伴ふ自負心とを有せる婦人の夢想は、寧ろ秀吉の英雄に兼ねるに絶世の美貌を有せる男子を得て、之を絶対に獨占せんとするにあるなるべしと雖も、淀君は必ずしも此夢想の實現

男と女

二七三

を信ずる程の空想者にあらず、秀吉の如き英雄にして人を魅するの容貌を有せる男子をば、最初より自己の所天として獨占するを得しならば、淀君はあれ程に我儘の意地ツ張りの、二六時中怒りと泣きとを以て生活の全部となせし煩悶苦惱の人たらざるを得たりしなるべし、虚榮何物ぞ、淀君は虚榮の爲に自己の根本的不満足を忘れ去る程の淺ましき婦人にあらず、而して憐むべくも、虚榮を以て根本的不満足を蔽ひ去らんとする事をば、我乍ら淺ましと思ふ程の生しほらしき心を有せり

白象

▲女相撲へ入つたら横綱にもなれさうな體格で、阿龜から愛嬌を抜いた様なまづい面相であるが、こんな身體に惜しいほど色が白い、店一杯に坐つて居る状態は、まるで白象の様である、年齢は四十五六であらう

絹雪洞に照される花の色

▲黒いと云ふではないが、人に優れて白い程でもない、けれども其餘りに白くない所に、絹雪洞に照らされる花の様な床しい色がある、恐れず羞合ます左りとて誇らず媚びざる、餘念の無い顔の美しさ、眼ざしと鼻筋の氣高き神々しさ

女王の位

には、自然頭の下るを覺えたが、頬べたと口元の活々してお俵らしいには思はず馴々しく言葉を掛けて見たくなる

▲花菖蒲、堀切に若き紫を眺めての歸り路、一群の美人傘は向島の葉櫻に涼しき袂を飄へした、問屋の箱入らしいのから、帯を低く、締めた頭の娘お跳に至る迄、花壇の花に路傍の草花をこきませた大束、中に一輪、薄紅刷いた白芍薬の蕾、姿は云はずも、其匂ひの厭味なく清いのが、此中の女王たる位を持つて居る、水色の地へ其花の色に堀切の曙を染め出した縮緬の單衣、下には朱鷺色の肌襦袢、同じ蹴出し、帯の緞子は菖蒲の葉で、帯揚にだけ真紅を見せて居る

▲細面のスラリとした背格好、藍鼠の薄いの白い立縮のあるセルの單衣を裾長に引すつて、黒襦子の丸帯、品の好い丸鬘、年頃は三十五六、商家の女房として高尙に過ぎる程の起居動作ではあるが、兩の頬にばかされた薄紅が此人を年齢よりも若く仇つぼく見せて、未亡人で一家の元締をするには、どうも適當の人と信ずることが出來ぬ

兩の頬にばかされた薄紅の

天地忽然
として冷
たく真蒼

一は醒め
たる物の
極なる物
の極なる

己が姿の

男と女

二七六

▲瀧子が起きてから一時間も過ぎて、母に叩き起され、お嬢様をお迎へにお出でと追て立られて、夢を見ながら鳥の間を歩いて来るお常は、濡れた里芋の葉を取つて不意に顔へ蔽被せる瀧子の悪戯に、天地忽然として、冷たく真蒼になつたかと肝を潰し、飛び上つてキヤツと叫ぶ事がある、さうでなければ、人の丈の倍もある玉蜀黍を揺ぶつてシタ、かに露の滴りを浴せられ、青空の驟雨かと悔りし、息を呑んで逃げ戻る事もある

▲瀧子は蝶よりも軽く鳥の中を飛んで行き、路の角々に立停つては、遙に後れて来るお常を待ち合はすのである、胡瓜の蔓も角豆の蔓も、瀧子が足を下す時には避けて通す様に見え、お常が身體を運ぶ時には態と搦み合つて邪魔をする様に見える、瀧子の行く所は物の葉がサラ／＼と鳴り、お常の行く所は物の根がミシ／＼と動く、一は軽き物涼しげなる物醒めたる物の極で、他なの一は重き物遅き物熱げなる物睡たげなる物の極である

▲蹲んで、手を延べ下して、招く様に指先を動かした、屈まぬこと縦に五寸

水鏡に見
惚る白
百合

水だらけ
の花を高
く捧げて

瀧の女の

である、清水が滴る苔の下に根を張つて、崖の横腹から小川を覗いて、己が姿の水鏡に見惚る、白百合は、頭が根より低く、垂れて莖から花に清水を傳へ、ポト／＼と瓣から露を滴らして居る、瀧子は吃と唇を結んで、今迄蹲んで居る處へ俯向きに臥した、岩と苔ばかりで泥が無いが、水氣は乾いた着物に吸ひ込まれて、昨夜小川の水に濡れたとは異なる冷味を與へる「アッ」とお常が叫ぶ間も無く瀧子の身體は伏した儘、ズル／＼と前下りに滑つた、「阿嬢さん」と阿常は思はず瀧子の足へ手を掛け様と身を屈めた途端、バラ／＼とシタ、カ襟元に冷たい水を打込まれて、平生の臆病キヤツト飛上つた、飛上つたは悪くないが、飛上つた場所が好くない、危く崖から足を踏み外さうとして、合歡樹の垂枝に助けられた、尙も顔と頭の嫌ひなく打ち来る水の礫に、身を盛め乍ら上を見れば、瀧子は早や目的を遂げて、根こそぎ抜き取つた水だらけの花を、高く捧げて打振つて居るのである

▲小さい手提籠に色々の貝殻を充たしたのをカラ／＼振り鳴らして、十ばかり

男と女

二七七

の女の子が海の方から来た、袖無一つに紅木綿の色褪めた腰巻、素足に砂を踏んで、其色は焦がした様に赤黒い、勿論髪も亂れて居る

乳の膨ら
みがほの
るかに見え

▲紺緋の二三度水を潜つたらしい單衣を着て帯は何か、クルリと捲り上げた裾に包まれて見えぬが、山に珍らしい緋縮緬を膝より少し長く下げて、下に白金巾やメリンスなどを捲いて居ぬらしい、可惜足に薙刀草履を突掛け、亂れ髪を眞白な手拭の姉様冠りに隠し、水桶下げた手の杖を折り返して口に啣はへて居るので、脇明けの擴がつた處から、乳の膨らみがほのかに見える、見得に構はぬ極めて不調和な打扮が、態を凝つても出来ぬ程美しく引立てゝ居る

ふくら
に貼する
水玉

▲水溜の前に進んでガラリと水桶を投げ出し、籠の掛つた長柄の大柄杓をザブリ／＼と鳴らして、ラムチの沸騰する様に桶から溢れる水に、草履を重たくなる程濡らし、ふくら脛に貼じた水玉を拭ひ去らうともせず、水桶を持ち上げて歸り行く

女子を敬

▲女子は成長したる小兒也、女子を敬するは勳爵士の野蠻時代の遺風也、女子

風するの壁

醜婦

は一面の鏡と數個の果物を興へ置けば満足して喜悅する也

▲十人に六人迄は、醜く生れつきたる女、心ひがめり、十人に六人迄は、醜く生れ付たる女、迷ひ深し、十人に六人迄は、醜く生れ付たる女、片意地なり

美人

▲美しく生れ付たる女、十人に六人は心驕れり、十人に六人は智乏し、十人に六人は命薄し、家を破れる者の母を見るに、十に六までは美人なり、浮き名の淵に沈みて果つる女の母を見るに、十に六までは美人なり、しほらしかりし心變りて、家の亂れ世の謗りを引出せる寡婦を見るに、十に六は美人なり、美しき花の好き實を結ぶは草木にも多からず

妾

▲妾と云ふものに身をなす女にも、それ／＼あるべし、一むきに云ひ定めんは、理に勝つとも、情には通せぬ所あらん富める人、貴き人に身を寄せて、己が鄙しき心の望みを果さんとする女の如きは、誠に疎むべし、寄邊なき身を、情けある人に救ひ出されて、恩に感じ、情に入り、甘んじて生命のあらん限り婢となる女の如きは、心強き人は如何にと云ひ下だし得べし、我は云ひ下し得ず、

後家

東坡の妾の朝雲の如きを、むげに云ひ下さんは、尤もなりとばかり肯ひかたし
▲男みまかりて後、猶年若く、色衰へぬ女の、世をば淋しげには渡れど、心を
ば清く持ちたると見えて、獨り住める、いと勝れたり、忘れかたみの兒など慈
しみ育てたる、特に優しくあはれ深し、亡き人の徳も、其身の操も、心ある人
の眼には輝きて見ゆべし、嵐の夜半時雨の晨の心細さも歌など讀みて、聊か思
ひを遣りたるいよく氣高く、人と云ふものより少し抜け出でたる人のやう思
はる

再婚婦人

▲人の事のもつれ、天の命の定まりなどにて、夫と頼みたるものに或は生別れ
或は死別れしたる女の、親兄弟の勧めもだがたくて、再び人に嫁きたるが、
我から心を弱くし身をつしみたる、よそ眼にはあはれなり、げに男の思はん
ほど、舅姑のさげすまるところも測りがたければ、如何ばかりか其身にしては
己が明け暮れの頼み無かるべき、世の人は又これを憐まんとせで、生別れし
たりしを世帯くづしの果といひ、死別れしたりしを男を喰ひしものなどと、笑

妻にあり
たきもの

ひ罵るが常なり、女と生れて、罪なきにかかる身となりしものこそ口惜かるべ
けれ

▲妻にありたきは、夫の業を夫のみの業とおもはで、夫の業やがて我が業なり
と常々思ひしみてあらん心がけなり

世の細君
注意し給

▲初めの程こそ、美しき妻君に満足したれ、根が浮氣もの、常に美味を食ひ乍
らも、隣りの雑炊が旨き自然の人情、遅くて三年早くて一年、自ら慎む考なる
も、細君が産前産後の三四ヶ月は、殊に危き時なるぞかし、世の細君に、悪智
恵つけるやうなれど、此際よく注意し給ふべき也、夜おそく歸りて、殊更
に細君の機嫌とらむとする様子見えなば、疑念の矢を放ち給へ、中らずとも遠
からざる也

顔面に因
魅する力

▲人間が好男子たり好女子たるの資格は、顔面に活動する人を魅するの力に在
り、縦令三十二相圓滿に具足し、大理石もて彫刻したる美神の如き容貌を有せ
る者と雖も、其眼底唇邊に一片人を動かすの神采なくんば、开は柩に添へられ

男と女

二八一

男と女

二八〇

天才の輝

たる紙製の花に齊しきのみ
▲彼が好男子たる所以は、其絶倫の天才が、眼に輝き、面に漲り、唇に溢れ、火となり、花となり、音楽となりて、男を魅し女を魅し、何人をも何者をも、馬をも犬をも魅し、一たび之に逢へば、恍惚として長く其面影を忘るゝ能はざらしめたるに在り

輪廓的好男子に非ず

▲顔の道具の寸法及び面の皮の色を資本となせる形式的輪廓的好男子にはあらで、顔面に閃く一種の人を魅する氣に依るものなれば、女にばかり惚れられて男に氣障がらるゝ所謂色男とは選を異にし、能く女を魅すると共に男をも魅せり

平和な顔

▲檀の方から自分を迎へた爺さん、大柄で骨太で若い折には嘸強かつたらうと思はれるが、大黒様のやうな福々しい人相に、平和と云ふ字を平假名で崩したやうな皺が刻まれて居る

雨に叩

▲ヒラリと上の段から飛び降りたは、之もビシヨ濡れになつて八歳斗りの男の

れて活々とした風采

兒である、紺緋の筒ッポを着て、裾は臍の上まで捲り上げ、藁草履の尾を曳いたのを穿いて居る、一體色の白いは此山の人の普通であるが、こんなに綺麗な兒は此山にも亦珍らしい一文字にギリ、と結んだ唇、澄み切つて張りのある目フックリして何にも譬へられぬ愛らしい頬、それに、躑躅、山吹の雨に叩かれて頭が傾き乍ら却つて生氣を増した一束を、斜に両手で抱へたのが、透徹るほど白い皮膚を照らして、活々とした風采に限りも無い趣を添へて居る

適れの美丈夫

▲四十になるかならずの、色が白く頬鬚を剃つた痕の青々として、目鼻口の際立つて鮮やかな、身體は角張つて肉付き豊に、威厳も愛嬌も兼ね備へた適れの美丈夫である

貧乏が夫婦間の幸福

▲餘計なお世話が知らねど、世の婦人に告げむ、卿等の良人、品行よしとて、心許し給ふこと勿れ、其品行よきは、金なきを以て也、若財産が裕かにならば、世の風に化せられて、藝者買ひをする者多かるべき也、妾を置く者も少なからざるべき也、今の世、貧乏なるが結局夫婦間の幸福也

男と女

妻より夫へ怒の救なき遠慮

男と女

二八四

有難から

▲「妻より夫へ」氣焰を吐くも外、力を注ぐも外、氣張るも外、家にありては、唯おとなしく、妻の尻にしかれて居り給へ。妻はやきもちやき也、もし浮氣し給は、角を生じ侍らむ。少くとも月に二度は妾を連れて外出し給へ、月に一度は芝居を見せ給へ、新衣を買ひてたべ。舅、姑、小姑を家によせつけ給ふな、もし同居し給は、妾は直に此家を去らむ。毎月の収入は、一切妾に渡し給へ、其中より、小遣錢を御身に參らせむ。送別會、歡迎會、懇親會等のおつきあひは、一切斷りて、唯妾の側にへばりついて居給へ。琴の稽古、歌の稽古、生花れ茶の湯の稽古、御身の名代の訪問、親戚への訪問、舊友への訪問など、外出し給へば、妾にも抱車置きてたべ、妾の爲に養生して生長してたべ、されど人の存亡は期し難し、せめて、五千圓の生命保険に入りて、妾をして、少しは安心する所あらしめ給へ。義捐、寄附、友人や親族への義理には、目をつぶりて、妾への遺産を多くし給へ。一家の事は妾に打任せて、一切口を出し給ふな。

▲男女兩性の相接近せむとするは、動物を通じての天性也、人、悉く柳下惠に

純潔

花柳界の女性

濡れた洋服を脱ぎ

男と女

二八五

あらざる以上は、男女の交際の純潔に終らむことは、望むべくして期すべからざる事也、紳士と婦人令嬢との間に、交際の許されざる日本の社會に、花柳會あるは、蓋し勢の止むを得ざる也、而して汚なく濁れる花柳界あるが爲に、一文の婦人令嬢が、西洋に比して、遙に純潔なるも、亦自然の勢也。

▲日本の婦人令嬢は、餘りに不意氣也、あまりに遠慮がち也、談話が下手也、氣が利かぬ也、旨味がなき也、詞も、顔も、様子も、毫も躍動せず、花柳界の女性に至りては、多く男子に接したるだけに、氣轉が利きて、搔き處に手の届の概あり、其詞も躍動し、其顔も躍動す、殊に目最もよく躍動す。

▲銀杏返しの髪の毛いたく亂れた十七八の娘、薄鼠に細かく櫻を散らした幽禪の半纏、秩父らしい粗い鼠織の綿入は映りが好くないけれど、凡てが臺無しになつて居るだけ、それは不斷着と知られる。

▲だつて、ぐしよくに濡れで、お負に泥足なんですもの、口より手が早い、問答の中にズル／＼と着物が身體から抜け出で、入口の土間に抜き棄てた桃

花^き花^い絹^{すけ}に惜^{あは}氣^れもなく泥^{どろ}足^{あし}を拭^{ぬぐ}ひ、雑^{ざつ}巾^{きん}の手^て拭^{ぬぐ}のと女^{おんな}が騒^{さわ}いで居^ゐる間に、フワリと白^{しろ}い鳥^{とり}が飛^とんだ様^{よう}に見^みえたのが、包^{つつみ}の中の浴^{ゆかた}衣^いを取^とつて肩^{かた}に引^ひ掛^かけたのであつた、「御^ご免^{めん}下^{くだ}さい」と上^あり込^こみ乍^はら、片^{ひら}手で前^{まへ}を合^あせて片^{ひら}手^ては内^{うち}懐^{ふところ}に下^{した}の紐^{ひも}を解^とき下^{くだ}がるを踏^ふみ止^とめて身^みを延^のばし、裾^{すそ}にからまる之^{これ}も桃^{もも}花^{いろは}色^{いろ}但^{ただ}し縮^{ちぢ}緋^ひを後^{うしろ}、足^{あし}に洋^{やう}服^{ふく}の上^{うへ}へ蹴^く落^おして、直^{ただ}ぐ又^{また}包^{つつみ}の中^{なか}の同^{どう}じ物^{もの}を取^とつた、暫^{しば}く隅^{ぐも}の方^{かた}で時^{とき}を移^{うつ}してから、亂^ごれ髪^{かみ}を手^てで束^{つか}ね乍^はら出^でて來^きる姿^{すがた}を見^みれば、白^{しろ}き縮^{ちぢ}緋^ひに鼠^{ねずみ}で秋^{あき}草^{くさ}の形^{かたち}を置^おくこと大^{おほ}きく、水^{みづ}色^{いろ}縮^{ちぢ}緋^ひの結^{むす}び目^めを、ダラリと乳^{ちち}の下^{した}にさ^さげて、片^{ひら}頬^ほに淺^あく笑^{わら}渦^{うず}を寄^よせた愛^{あい}嬌^{けう}、今^{いま}迄^{いた}の洋^{やう}服^{ふく}打^う扮^{ばん}とはどうしても同^{どう}じ人^{ひと}と思^{おも}はれぬ粹^{すい}な骨^{こつ}相^{さう}である

薄^{うす}紅^{こう}な神^{かみ}

▲彼^{かれ}に並^{なら}んで薄^{うす}紅^{こう}な神^{かみ}の様^{よう}な者^{もの}が立^たつて居^ゐる、桃^{もも}花^{いろは}色^{いろ}絹^{すけ}の洋^{やう}服^{ふく}裾^{すそ}長^{なが}くして其^{その}裾^{すそ}打^{うち}煙^{えん}る如^{ごと}く、雨^{あめ}後^ごの白^{しろ}百^{ひゃく}合^{ごう}の今^{いま}や蓄^{たくわ}を破^{やぶ}つたばかりの若^{わか}く生^{せい}氣^き溢^{あふ}れる顔^{かほ}に、惜^{あは}氣^れも無^なく束^{つか}ねた黒^{くろ}髪^{かみ}がこぼれかゝつて居^ゐる、人^{ひと}慣^なれて居^ゐるから左^{ひだり}迄^{いた}差^さ含^こみはせぬが、女^{おんな}と云^いふだけに兩^{りょう}の頬^ほをサツと染^ぞめて居^ゐる

動物

プラチナの鎖^{くさり}の鎖^{くさり}

動物

プラチナの鎖^{くさり}……蟹^{かに}の勇^{ゆう}士^し蟹^{かに}の美^み人^{にん}……鮑^{たか}の厭^{いと}世^よ家^け……雉^{けい}は羽^う族^{ぞく}の剛^{ごう}也^{なり}……禽^{いん}のダイナマイト……鱈^{たか}は鱗^{りん}族^{ぞく}の健^{けん}也^{なり}……沈^{ちん}静^{じやう}深^{しん}穩^{えん}なる大^{だい}都^と會^{かい}……蛇^{へび}と蕨^{わづらひ}の王^{おう}國^{こく}……鱈^{たか}躍^{たつ}つて蛇^{へび}を搏^{つか}つとは是^{こゝ}也^{なり}……魚^{いし}の健^{けん}、味^{あじ}の美^み……大^{だい}陸^{りく}人^{にん}の魚^{いし}食^{じき}を重^{おも}んせざる所^{ところ}以^ゆ……高^{たか}くとも憎^{にく}くなきは白^{しろ}魚^{いし}也^{なり}……水^{みづ}、舟^{ふね}を動^{うご}かして寶^{たから}を返^{かへ}せと迫^{せま}る……汝^{なんぢ}冬^{ふゆ}の精^{せい}神^{しん}を喫^くせよ、佃^{てん}魚^{いし}の鱈^{たか}選^{せん}……初^{はつ}鯉^り魚^{いし}と布^ふ子^こ……意^い氣^き地^ぢなく腐^{くさ}し易^{やす}き鯉^り……鯉^りは勝^{かち}魚^{いし}也^{なり}軍^{ぐん}に勝^{かち}魚^{いし}也^{なり}……一^{いつ}皿^{べん}の紅^{こう}に王^{おう}候^{こう}の豪^{ごう}奢^{しゃ}を誇^{こほ}る……凄^{せき}美^みに過^かぎて氣^き味^{あじ}の悪^{あく}い蝨^し……五^ご彩^{さい}の水^{みづ}煙^{えん}りに包^かまれつゝ……非^ひ常^{じょう}な運^{うん}動^{どう}は蝨^しの働^{はたら}きの終^{はつ}り……海^{うみ}中^{ちゆう}の巨^{きゆう}大^{だい}なる動^{どう}物^{ぶつ}……鯨^{くじら}に負^おふ所^{ところ}多^{おほ}し……海^{うみ}中^{ちゆう}の動^{どう}植^{しょく}物^{ぶつ}研^{けん}究^{きゆう}の興^{きよう}味^{あじ}……水^{みづ}中^{ちゆう}に於^おける美^み麗^{れい}なる魚^{いし}の運^{うん}動^{どう}……軟^{なん}らかき燐^{りん}光^{こう}の玉^{たま}……光^{ひかり}りを發^{はつ}する魚^{いし}類^{るい}……深^{ふか}き太^{たい}洋^{やう}の底^{そこ}に於^おける魚^{いし}の奇^き異^いなる生^{せい}活^{かつ}状^{じやう}態^{たい}……眼^{まなこ}の下^{した}にランブを有^あする魚^{いし}類^{るい}

▲蛇^{へび}の美^みなど云^いつても動^{どう}物^{ぶつ}虐^{じやく}待^{たい}主^{しゆ}義^ぎの人^{ひと}等^らには分^わるまいが、青^{あお}白^{しろ}い水^{みづ}成^{せい}岩^{がん}の絶^{たつ}壁^{へき}に反^{はん}射^{しゃ}して春^{はる}とは見^みえぬ澄^{すみ}み切^きつた月^{つき}影^{かげ}に、軒^{のき}端^{たん}から垂^たるゝ三^{さん}尺^{せき}除^{じゆ}りのプ

ラチナの鎖、それがどんなに美しからう。
 ▲寺の椽側に折々蟹が這ひ上がる、色黒く足に毛が生えて恐ろしく強さうに見える奴もあれば、全身紅を刷いて光澤／＼して居るものもある前の蟹の勇士で後の蟹の美人であらう、中には又身體が武骨で鉄ばかり馬鹿に奇麗な奴がある。是は大方蟹の色男であらう、男の癖におしやれをやる奴であらう、追ひ廻したり追ひ廻されたり、寄り附いたり離れたり、能く見れば蟹の世界にも詩があり小説があるのだ。

▲どうかした天氣模様の日に、鼯の厭世家が其愛嬌のない顔を見せることがある、何でも蚊でも賞めたがる僕も、此先生にだけは賞むべき美點を發見し兼ねる、一たび面を出しさへすれば蟹の勇士も蟹の美人も悉く彼が飽くことなき胃の腑の中に葬られて仕舞ひ、折角の詩も小説も滅茶々だ。
 ▲雉は羽族の剛なる者也、蛇を搏つて寸断し、閑に之を養ふ故に其聲鐵笛の如く山石を裂き木精を驚す。

▲雉の蛇を食ふは唯之を傳聞するのみ、其聲の痛烈なるに依りて蛇を食ふの氣勢を想像するのみ、蛇來つて身を捲くこと三匹、一たび力を振つて翼を鼓すれば、四尺の長物十個に斷じて飛び、紫血驟雨の如く綠翎に飛ぐ、雉は其れ禽のダイナマイトか。
 ▲鱗は鱗族の健なる者也、蛇を搏つて寸断し争ふて之を噉ふ、故に其氣銀箭の如く寒潭に透り雪瀑を衝く。
 ▲其境既に靈怪幽暗の絶頂也、而して瀑布の如き急流を廻り來れる魚族は、水力に對する健闘より鍛錬せる、銀の如く寒き鱗、瑪瑙の如く硬き肉、戟の如く鋭き氣を以て此沈静深穩なる大都會に入る也。
 ▲終古未だ天日を仰がざる陰濕の部分有し光を愛せざる蛇と墓の王國に供しつゝあり。
 ▲涼夜月白きの時、天神廟畔を漫歩すれば、路上に散點せる椀大の暗石、我を見て皆動く也、或物は躍らんとし或物は罵らんとす何ぞ其蝦蟇の多きや。

蛇は遊つて
は是也

絶倫の勇
健捷

動物

二九〇

▲蝦蟇叢中を脱して水邊に下り、陰森たる神山神潭の夜景に對す、活ける物あり我が脚下より出づ、其動けるを認むれども其響を聞かず、水に浮んで輕きこと遊魂の如く流れを斷じて速きこと羽箭に似たり、過ぐる處陰光一條、燐よりも青きの痕を印し、直ちに空潭を横絶して其中心に至る、未だ其長さと大きさを意識するの暇なきに、忽ち見る、潭心斜めに裂て三尺の水劔倒まに空を斬るを、空を斬つて而して後に水を打てり、其響き玻璃玉を破碎するが如く、水煙を濺起して月下に五彩を成せり、一瞬時の後、潭心は再び空寂に歸せり、靈怪なる一條の活ける物も、閃灼たる三尺の水劔も、幻影の滅するか如くに滅せり、始めて覺る手は鱈の蛇を食ふを見しなることを、涼夜川を渡るの蛇ありとは是也、鱈躍つて蛇を搏つとは是也、不幸なる蛇の子は今や方に水底一二丈の處に於て、鱈の眷屬の多數に骨も残さず賞味されつゝあるなるべし。

▲努力して急流を遡り、深潭に逢ふては英氣を養ひ、又遡り又憩ひ、幾たびも繰返して遂に川源に近づくや、鱈の勇健と輕捷は水族中何物も匹敵すること能はざるに至る。

魚の健
味の美

大陸人の
魚食を重
んぜざる

いくら高
くとも憎
くいなき
は白魚也

動物

二九一

▲魚の健にして其味の美なる、生きの儘之を割いて、活動せる肉片を舌に載する、是れ最も著しき日本の特色にして、大に是れ日本の地理學的特質に關し、且つ日本人の特性に關す、地は人を作り、而して地と人との合併作用は、更に著しき特色の人を作る也。

▲西洋人其他一般の大陸人の魚食を重んぜざるは、其魚徒にズラ體大にして、極めて容易に人に捕へられ、之を食ふて味ひ甚だ薄きが故也、獨り大陸人のみならず、何れの海國民と雖も、日本の如く爾く魚味を珍重するはあらず、是れ日本ノ如く、勁健矯捷にして肉味の芳美なる魚族に充たざるゝの海を有せざれば也。

▲いくら高くとも憎くいなきは白魚也、江戸的趣味の結晶して、細長くさやかなる玉となりたるに、神が一つ宛念入れて生命を吹き込み、極寒の底恐ろしき水の中を世界として、自在に星影に戯れて閃くの權能を賦與されたる、此靈

なる小動物は、潮に漂ふ海苔の切れを食となして眠ること幾夜、水稍温む三月
中旬となれば其腹櫻の蕾の如くに色づきて、玉の子の薄紅刷ける卵を孕み、氣
品少しく下ると稱せらる

▲眞に東京人に珍重されて、玉を饌するが如き價を賞せらるゝ白魚は、千鳥よ
り外泣くもの無き眞の夜中、佃の漁夫が篝火焚く小手の上に霜や白き魚や白き、
傾くる四手網に、觸れなば消え失せん二三足を貴し、期節な寒に入りてより立
春迄の間、時刻は午後の十時より篝火も氷るばかりの寒さ、船板に白魚こぼせ
ば、霜に煮えて聲あり何等の趣味ぞ、水黒く舟を動かして、寶を返せと迫るもの
如し

▲此絶頂の詩境より生れ、骨露はなれ水晶の身をチヨボに並べて市に送らる、
鍋は白魚に生海苔、貝の柱に萌やし三葉、此時の酒は銀の釜にて精醸したる者
ならざるべからず、何ぞ初鯉魚を待つて布子を殺さん、南無白魚、風吹き盡し
霜降り盡したる冬の精神、君となりて我腹に入る、寒梅の蕾を噛み、白魚の骨

水舟の黒く
返して寶を
追

汝冬の精
神を喫せ

佃魚の變

期節の初

子初鯉と布

をしやふりて、濁れる血は頭に滯らず、汝眞に江戸ツ子なら、襦袢一枚になつ
ても、冬の精神を喫せよ

▲今日江戸前の鰻尚ほ天下一品の聲價を落さずと雖も、佃の白魚年々に減じて、
篝火焚く手に霜白き極寒の眞夜中の趣味漸く詩と畫とより遠ざかり、特に味ひ
の美なるを以て將軍の食膳に上りし佃附近の魚類は、文明の音響と其臭氣との
爲に驅逐せられて「島別だ」との警語を成さしめ佃の風俗も、今は大に普通化
して、空しく工場煙突に壓倒せられ、盆踊りの「やとまかせ」に辛うじて前時
代の遺風を留めぬ

▲期節々々の初物をはしりと稱して、之に金錢を投するを惜まざるの風は、先
づ魚類よりして野菜に及ぼし、初鯉魚の呼び聲に飛び起つて布子を殺すの意氣
は、江戸人の誇りとなりぬ

▲頭に初字を戴く鯉と江戸ツ子との關係こそ可笑しきものなれ、向録巻いな
せの兄イが、一腔の活氣を喉に込め、町の兩側の家を突き抜いて裏通り迄も響

意氣地な
にきく
勝つ魚軍

動物 二九四
けと叫ぶ「初鯨」の一聲は、雲を劈いて落る時鳥の初音と尖新を競ひ、鯨と云へば直ちに殺しても死なぬ勢を思ひ、割いて切つて刺身に作つても一切れづ、羽が生えて飛びさうに聞こゆれど、其實鯨程意氣地なく腐り易き魚はなし、鯖の生腐りと云へど、生腐りは鯖のみにあらず、鯨こそ鯖より遙に以上の生腐りなる也、人間ならばよくのグズ也、人中に出て口も利けぬ奴也、江戸ツ子の風上にも置けぬヤクザ野郎也、布子を殺して之を迎ふるの價値何處にかある。▲知らずや徳川は三代將軍家光の治世、頃は一厘錢の表に鑄られたる寛永年間の事、珍らしき魚荷や公方に献するの新例は開かれたり、度々献上なす種々の魚類の中に、目に青葉山時鳥の時節、初鯨と名乗りて御前に罷り出でたる、青黒く肥太りて異體の奴あり、蠟を固めたるが如き頭顱を並ぶる、徳川政府の俗吏等は戰國的臭味未だ全く脱却せざる御幣擔ぎの習慣に支配されて、魚の質よりも其名を喜べり、鯨は勝魚也、單に勝つ魚也、此上もなく目出度き魚也、水を離れて直ぐ腐る魚族中第一の意氣地なし、奴が御幣擔ぎの徳川家に買ひ冠

一皿の紅
かに王候
の豪奢を
誇る

價値は腐

られて、鯨餅よりも威勢よきものになり濟まし、爾來献上魚は鯨に限るとの特旨を笠に着て、献上濟みにならぬ内は、市中の賣買罷りならぬとの八釜しき掟さへ設けられ、鯨荷の押送船は、天下の御用と叫ぶ聲に千石船をも傍へ寄らせて、房總の濱方より東京灣の水路に一文字を書き、大名も旗本も路を避けて城に通せしもの也。

▲當時の江戸ツ子をして、生きて碌々人の下に屈せんよりは、死して初鯨となつて、天下の御前に大の字に踏んぞりかへらんことを希はしめしとは、作り話よりも嘘らしき實話也、責めては献上の濟むを待つて、百萬人中の真先驅を自慢するだけにても、江戸ツ子の本懐、腹の虫の満足ならぬと、米櫃の底を鳴らして見せる女房を蹴飛ばし、店賃の催促にペランメーを浴せ掛け、餓鬼を赤裸にして少便臭き筒ッポを質屋へたゝき込み、一皿の紅かに王候の豪奢を凌ぎ得たりと誇る、是れ初鯨の重んぜらるゝ第一の理由也。

▲加之鯨の極めて腐敗し易き特質は、一に海上の運送を迅速ならしめ、二に魚

動物

あり易きに

のき好て美に
蟹好く氣味過

五彩の水
煙り包ま

いた人も驚い

動物

河○岸○の○取○扱○ひ○を○機○敏○な○ら○し○め○、○三○に○市○中○の○觸○れ○賣○を○急○忙○な○ら○し○む○、「○鯉○オ○、○鯉○オ○」
の○觸○れ○聲○、○爾○く○火○の○附○き○た○る○が○如○く○な○る○は○、○人○の○注○意○を○引○い○て○腐○ら○ぬ○内○に○片○を○
附○け○る○の○必○要○と○、○半○ば○腐○り○た○る○魚○を○、○氣○込○み○の○勇○ま○し○き○に○依○つ○て○、○新○ら○し○き○も○
の○に○買○ひ○冠○ら○し○む○る○の○必○要○と○に○教○へ○ら○る○、○所○也○、○乃○ち○知○る○、○鯉○の○價○値○は○其○腐○り○
易○き○に○あ○る○こ○と○を○

二九六

▲白○い○單○衣○を○好○む○瀧○子○は○、○極○樂○寺○谷○の○空○氣○を○透○す○月○の○色○に○染○め○ら○れ○て○、○銀○の○線○
を○以○て○織○り○成○し○た○着○物○を○着○て○居○る○様○で○あ○る○……○長○い○袂○と○裾○が○フ○ハ○リ○ハ○リ○と○風○に○
戲○れ○て○、○小○さ○い○身○體○は○今○月○界○か○ら○降○り○た○ば○か○り○に○見○え○る○瀧○子○が○、○首○を○傾○け○乍○ら○
昂○然○と○身○を○反○ら○し○て○居○る○傍○に○、○身○を○屈○め○て○兩○手○を○後○に○組○ん○だ○頑○丈○造○り○の○老○爺○、○
頂○の○光○る○大○き○な○首○を○、○矢○張○り○瀧○子○の○傾○け○た○様○に○傾○け○て○、○枯○れ○残○つ○た○鬚○の○毛○を○戰○
か○し○て○居○る○有○様○、○其○兩○者○の○對○照○が○如○何○に○も○趣○が○あ○る○、○折○柄○谷○の○底○行○く○小○川○の○一○
部○分○が○、○バ○ッ○ト○明○る○く○な○つ○た○、○月○影○ヶ○谷○か○ら○浮○れ○出○た○山○螢○、○大○き○さ○人○魂○程○も○あ○
つ○て○、○凄○美○に○過○ぎ○て○氣○味○の○好○く○な○い○奴○が○、○瀧○子○の○袂○が○風○に○飄○へ○る○程○の○度○に○、○フ

ハハハハと水面一二尺の空間を上つたり下つたりして居る

▲瀧○子○と○老○爺○は○、○灌○木○の○疎○に○生○へ○た○岸○の○斜○面○——○間○々○に○何○か○の○白○い○花○が○染○め○抜○
か○れ○た○様○に○な○つ○て○居○る○處○を○、○足○許○に○氣○を○附○け○乍○ら○水○際○に○降○り○た○、○川○が○小○さ○い○上○
に○海○に○近○い○か○ら○、○砂○淺○く○し○て○夜○目○に○も○底○が○見○え○る○、○爺○や○下○駄○を○持○つ○て○來○て○頂○戴○
と○云○つ○た○と○き○に○は○、○瀧○子○は○早○や○螢○を○追○ひ○掛○け○て○水○煙○を○蹴○立○て○、○居○る○、○素○の○着○物○
に○紅○の○帯○の○女○神○の○子○は○、○玉○を○展○べ○た○様○な○足○に○月○を○蹴○り○碎○い○て○、○五○彩○の○水○煙○に○包○
ま○れ○つ○、○行○く○の○で○あ○る○

▲螢○は○高○く○或○は○低○く○、○月○の○光○り○の○碎○け○て○散○る○中○に○、○己○が○紫○が○、○つ○つ○た○碧○の○光○を○混○
せ○て○、○追○ひ○掛○け○る○人○の○目○を○眩○ま○し○乍○ら○、○流○れ○に○従○つ○て○海○へ○ハハハと○逃○げ○て○行○く○、○
兩○の○岸○が○急○に○低○く○い○な○つ○て○、○天○地○は○廣○く○、○向○ふ○に○幾○丈○と○も○長○さ○の○知○れ○ぬ○白○い○大○
蛇○が○横○た○は○つ○て○居○る○處○へ○來○た○、○稻○村○ヶ○崎○の○岩○根○に○續○い○て○此○川○が○沖○積○し○た○い○け○の○
砂○原○、○白○き○は○海○が○岸○を○噛○む○の○で○あ○る○、○螢○も○驚○いた○、○瀧○子○も○驚○いた○

▲ザハハハと一寄せ大きく来る程に、螢は身を倒まにして激しい光りを海へ落

動物

二九七

非常な運動の終り

大海中の巨大なる動物

鯨に負ふ所多し

海水を變色する動物の群

動物

二九八

い、クル、と二廻りばかり輪を描いたと思つたら、一直線に高く高く月の邊り迄羽を伸し、一たび消えて見えなくなつて、それから斜めに瀧子の頭を越し、富士の行者が須走を駆け降りる様、心地好く天風に駕して、今来た小川の半町ばかり上へ降りた、アツと振り向いた瀧子は又もや水煙を蹴立て、……けれど、此非常な運動は螢の働きの終りであつた、櫻と思はれる岸の古木の空洞に潜り込み、何かへ止まつて頻りに光り出した、激しく忙がしく光りを打つので、それが疲れて呼吸の迫つて居る様にも見える、止まつた處は、空洞の中に安置された、小さい石の不動明王の火焔の先である、然自身的光が告げて居る、瀧子は猶豫なく空洞の中に手を差入れて、とうとう螢を掴み取つた

▲海は生物を以て充滿せり、大なる海蛇は實に神活的なる程に大なる者也、然れども實際に於て、不思議なる他の怪物も亦存在せり、ニユーファウンランドに棲める鳥賊は其體比較的少なれど一つの腕の端より他の腕の端に至る長さ實に六十尺を算する者あり、鯨鬚は其長さ七十尺以上に達する者あり、眞甲鯨は更に

大なるものにして、此鯨は強力なる齒を以て武装せられ、主として人類を常とせりと稱せらる、然れども時には魚類或は海豹を捕へて食する事あり、其傷けらるゝや船に向つて逆襲する事屢々也、而して此場合には其友は救助に来る事を躊躇せず、實に或時米船は實際巨大なる牡の眞甲鯨の爲に襲はれて沈められたり

▲昔時鯨は海が宛も煙を吐ける煙突を以て蔽はれしが如くに見えし程也、我が海岸にも多くの鯨は棲みし也、然れ共彼等は漸々遙か北方に追ひやられて今も尙減少しつつあり、彼等が退却して人之に次いで來り、而して吾人は地理學上の進歩に於て彼等に負ふ所實に大也

▲大洋中の巨大なる動物は食物の大多量を要す、然れども彼等に豊かに食物を供給せらる、スコールズパイは海が數哩の間水母の種屬に依りて青く染められし事實を記せり、彼は一立方哩に二萬三千億迄も居りしに相違なしと云へり、而して此動物は其深さに於ては大ならざれども、尙ほ彼は數哩の間かく變色せ

動物

二九九

動物

られたる海を通じて航海せりと云へり其數や實に算すべからざる也。此等の事は決して除外例或は稀なる事ならず、航海者は屢々海の色を全く變色する動物の群の間を數哩の間航海する事あり

▲海岸は確實なる附着點あれば、至る處海藻を以て蔽はる、此海藻は大略二種に別たる即ち青色のものと赤色のものと是也、後者は特に光線に大なる關係を有す、此等海藻は無數の動物に食物及び避難處を與ふ

▲干潮に依り殘されたる清き岩の水溜りは、緑りの海藻を以て蔽はれ其側には纖維より成れる、美麗なる藻の房あり、又海綿、珊瑚、章魚の枕、嫁の皿、ふちつば及び他の貝類あり、或は羽毛の如き桂虫、又此處彼處に疾走する蟹あり、或は岩の隙、藻の葉の中より臆病に出て來り、或は大急ぎにて一の隠れ場處より他の隠れ場處へと突進する小なる魚及び小海老あり、此等の小なる水溜は實に夫れ自身大洋の小模形にして、長く注目すればする程多くの者の存在せるを見ん

三〇〇

▲濃綠色及び褐色の海藻は、深さ殆んど十五尋以上の處には生育せざる也、其以上の深さには他の小なる赤色の者を生ず、即ち珊瑚、うにの如きもの之也、

千尋の底に下り行くも、動植物は多く其種類も亦多し、然れども漸次其數を減じ他の種類のもの之に代れり、海中動物の極めて愛らしき事を完全に賞味せんと欲せば、其生活法を見ざるべからず、海中の動植物を器に養育して、其形狀

習慣等を研究するは、實に無限の趣味ありて眞に自然の美に接するを得る也

▲小舟より透明なる水中を見下す程美麗なる者は他に殆ど是無し、底には褐色綠色、或は薔薇色等種々なる色の又種々なる形を成せる美麗なる海藻の動搖するあり、其海藻の上に或は砂上に或は岩上に人手、章魚の枕、貝殻、蟹、海老の如き甲殻類其他奇異なる形狀及び種々なる色の無數の動物の休めるあり、清く澄める水中には無數の動物の漂泊するあり、或は矢の如く飛び行くもあり、又華々しき色を有せる魚の游泳するあり、又章魚海老及び美麗にして透明なる小海老あり、蚯蚓の如き蟲は恰も活けるリボンの如くに泳ぎ廻るもあり、其或

動物

三〇一

類發：擲軟らひき
する光の玉
る魚を

動物
者○は○色○つ○ける○數○千○の○眼○を○有○す○る○も○の○あり○、海月○は○軟○き○色○の○活○け○る○玻○璃○の○浮○遊○せ○
る○が○如○く○或○は○虹○の○色○の○如○く○、日○光○に○輝○け○り○

▲静○に○し○て○涼○し○き○夜○、余○は○如○何○に○屢○々○驚○き○と○尊○敬○と○を○以○て○頭○上○に○星○を○見○、眼○下○
に○船○脚○の○銀○の○如○き○泡○沫○中○に○、海○の○火○を○眺○め○つ○、船○頭○に○立○ち○し○か○よ○、而○し○て○船○脚○の○
泡○沫○に○は○、屢○々○不○意○に○軟○ら○か○き○燐○光○の○燦○た○る○光○の○球○の○現○出○す○る○あり○、其○光○は○多○
分○大○な○る○海○月○の○表○面○よ○り○出○で○し○も○の○な○る○べ○し○、コレ○リ○ツチ○は○云○へ○り○、時○々○轟○然○
た○る○響○と○共○に○船○側○に○起○れ○る○泡○沫○の○美○は○し○き○白○き○雲○及○び○其○中○に○跳○り○、輝○き○消○え○去○
る○小○な○る○星○は○如○何○に○も○美○は○し○く○、又○此○小○な○る○星○は○時○々○此○白○き○雲○の○如○き○泡○沫○よ○り○
離○れ○て○船○側○に○突○き○來○り○、或○は○流○星○の○如○く○に○消○失○す○と○、魚○も○亦○時○に○光○を○放○つ○事○あ○
り○、ま○ん○ぼう○は○白○熱○せ○る○砲○彈○の○如○く○に○輝○く○事○あり○、又○沙○魚○(鱈○の○一○種)○は○、其○表○
面○時○に○緑○色○を○帶○べ○る○凄○き○色○を○發○し○て○、或○大○な○る○恐○ろ○し○き○怪○物○の○如○く○、最○も○物○凄○
き○觀○を○呈○す○る○こ○と○あり○

深き大洋

▲深き大洋は動物の生存に適せずと想像せられたれども、近世の研究者は其誤

の底に於
ける魚の
奇異なる
生活状態

光を放つ
機關

眼の下に
ランプを
有する魚
類

れる事を證明せり、然れども深き大洋の動物は不思議なる生活を營めり、或時
の如きは二千七百五十尋の深さより取出されたる魚ありき

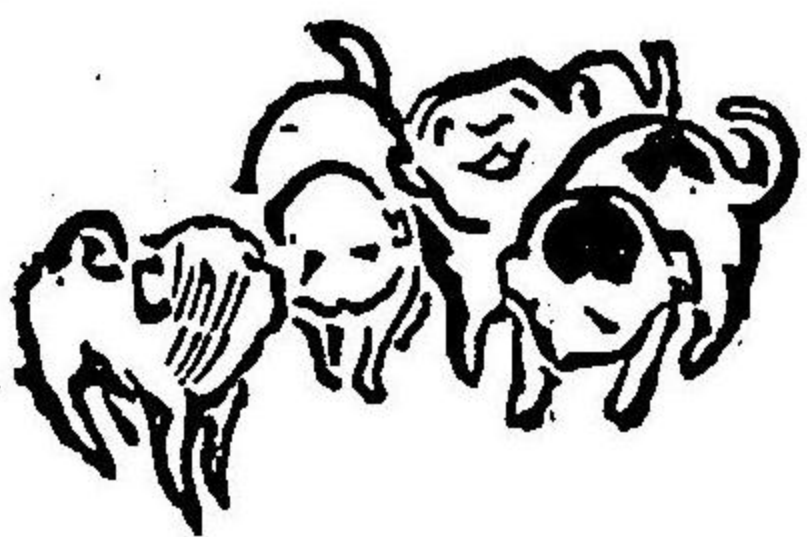
▲深き大洋に於ける生活の状態は、實に甚だ奇異なるもの也、日光は殆んど二
百尋以上に透入し能はざるが故に、是以上の深さは全く暗黒也、故に此處に生
存せる多くの種類は全く明を失はる、者あり、之と反對に他の深き海に生活す
る動物は、其深さを増せば増す程益々其眼の發達せる者あり、故に或種類の動
物に於ては、漸々消失する眼も、他の動物に於ては却て大となるものあり

▲深き大洋に往むもの多くは、燦たる燐光を發するものにして、不思議なる
光を放つ機關を有せり深海の魚は銀色、淡桃色或は黒色也、時としては眞紅な
るもあり、而して光を放つ機關が閃めく時には實に著しき光景を呈す

▲吾人は尙ほ是等の機關の構造及官能に就き學ぶべく多きを有せり、然れども
其用法の殆んど確に推察せらるゝ場合あり、光は明かに魚の意思に依て左右せ
らるゝ、大洋の暗黒なる深さに游泳せる雷魚が、突然其光を放つ機關より光を閃

動物

めかして側にある餌を發見する事を想像するは容易也、然るに一度危険の生ずるや、其光りは直ちに消滅す、此等の機關の最大なるものは、此種類の魚に於ては恰も眼の下に位す、故に此魚は實際ランプを有せり、他の場合に就ては其光りは寧ろ防禦物として役に立ち、或種類の者に於ては、其尾に大なる光を放つ機關の一對を備ふ、故に其尾より發せられたる光りの強き光線は容易に敵の目を眩し得る也、他の場合に於ては此機關は餌食の誘惑物として用ゐらるゝ事多し。



史論人物評論

英雄は太陽の如し……美しき花環……英雄の引立役……時代は尤も秀でたる一個を輝かす……地上を離れて舞踏す……機變と空想の一致……英雄は火の美を愛す……慘酷の詩化……動作の美……辯舌の雄……生れ乍らの粹人通人……人物利用法……隙間なき小刀細工……暗中の跳躍……史を讀むの快事……別誂への人間……數字なき大算術……非常に努力せる我儘勝手……豪華と寒素……一椀の薄茶……作られたるの英雄……火に焼けざる一頑石……可惑老雄……傳記に不斷の點火裝飾……堅實周匠の英雄……低聲の助言者……詩的惡戯者……天授と自作と半ばする英雄……姫君の豆腐買ひ……慧星に似たる生滅……興味ある鬭争力の對比……韵致に富める傳記……恐るべき詭計に富める英雄……夜雨一過桃花開……奇兵の成功……奇兵の評隲……天稟の姦雄……縮りなく吞氣なる戦争……篩ふも漉すも半點の美なし……醜的半面の發露時代……肥料を施さんと經過せられたる時間……韵絶味絶の詩境……安座の重量……活ける殺人器と黄金の太刀の詩的對照……半牛王……絶好活畫……榮華の二重……物理的權力の進歩……沈

英雄は太陽の如し

美しき花環

重なる不導體……恐るべき感化……巧みなる覇政の盜……數理的慘劇……美術的姦策……日本ステーツマンの祖……政治と道德の詩的醇化……政治の神髓……動的武力靜的武力……武人的政治家の典型……悟道的勇斷……檻樓に包まれたる珠玉……權力得喪の心理……武斷主義の殉道者……虹霓の如き榮華……淫酒主義の生活……護教的武士道……儒教道德の權化……儒教種子の大收穫……外虚しきが如き大賢……儒佛兩教の反應……文物が生み出したる妖僧……法王的皇帝……詩歌的適度の興奮……慾情の斷滅と反抗……一掬の涙……天使と惡魔……火の如き不平……根本的失戀……美の理想體の女性化……興奮と精血の消耗……天才の不幸

▲英雄は猶ほ太陽の如し、己れ自身の光輝を以て他の光輝なき遊星を人目に映せしむると共に、己れが中天に輝けるの間は、他の發光體たる恒星を掩蔽して、在れども無きが如きものならしむべし

▲歴史の詩化せらるゝこと英雄輩出時代に如くはなし、一の群を抜きたる英雄が崛起して中心を作れば、之と相吸引し若くは相彈反する種々の人物が連結して、周圍に美しき花環を作るなり、中に一輪異色の花あり、芬芳甚だ高くして

英雄の引

日本の大天才

時代は尤

四方に薫じ、人をして其無双の名花なるを想はしむるも、久しからずして、香失せ形萎れ、衆芳の爛熳たるに壓倒せられて、見れども見えず聞けども聞こえずるに至る

▲古來非常の英雄の起るや、必ず虚名徒らに高くして實力の程度を知り得ざる名士あり、禮を厚ふして招かれ、師として事へられ、而して竟に仕出來したる事無きに了る、是れ英雄の引立役が、引立役として出でたる外に何の意味もなきか、兎に角、斯る人物が一個ありて英雄の帷幄に入るが爲に、何となく英雄の貫目の加はるを覺ゆるこそ不思議なれ

▲秀吉は日本の大天才也、古來如何なる藝術家と雖も、其天才の高さに於て能く秀吉に匹敵し得る者ある無し、彼は高く時俗を抜いて、己れ一個の進むべき征路を開き、天馬の如く空を行けり、風は彼の足に隨ひ、雲は彼の裾を追ふ、何物も其進行を妨ぐることを能はざりし也

▲時代は多數の人物を要求すと雖も、同質同型の人物に於ては、必ず其尤も秀

も秀でた
輝る一個をた

地上に離
れたる所に
舞踏す

機變と空

史論人物評論

三〇八

でたる一個を輝やかして、其他を之に同化せしめ、若くは其背後に蔽ひ去るなり、而して之と抵觸せる異型異質の人物に至つては、悉く英雄の光輝の爲に打消されて、殘夜の星斗の如くに隠れ去ると雖も、時として局面の波瀾を大ならしむべく、他に異型異質の大人物を培養するの餘地を開き、鬼神を叱して之を守護せしめ、遂には輝ける英雄の向ふを張るに足るべく磨き上げ、歴史をして互に食はせ合ふ魂膽策略の多きに堪へざらしむ

▲其平常の生活は勿論、戰場の生活も、恰も天より降れる火に渾身の血潮を沸き立たしめられて、メモリスツズされたる人身を悪靈が自在に弄ぶが如く、高く地上を離れたる所に舞踏し、其衣の裾より起りたる旋風に人を吹き倒し捲き倒して、彼の周圍に一個の頭を擡ぐる者なからしめ、而も自ら其然る所以を知らざるものに似て立策行動皆自然に出で、毫も經營慘憺の痕を見ず、他人は断じて其一點一畫をも模擬すること能はざる也

▲秀吉が賤が嶽の奇捷は或好機會に打たれ、天正十一年末の四月廿日夜をば、

想の一致

英雄は火
の美を愛
す

慘酷の時

凄○美○の○極○に○彩○色○し○て、其○胸○中○の○美○的○嗜○好○に○満○足○を○與○へ○ん○と○せ○し○也、實○に○其○英○雄○且○つ○詩○人○た○る○の○天○才○が、激○し○く○物○に○打○た○れ○て○火○を○發○し○た○る○も○の○也、此○絶○頂○に○於○て○は○英○雄○の○機○變○と○詩○人○の○空○想○と○正○に○相○一○致○す

▲古より英雄にして詩的空想に富める者は多く火の美を愛す、所謂楚人の一炬阿房焦土となるもの、三百餘里を覆歴して天日を隔離せし宮殿樓閣を惜氣もなく焼き拂つて、七日七夜に連る火の壯美を賞觀せし項羽を見ずや、人工の一大湖水を作りて、敵城を其眞つ唯中に於ける小さき離れ島となし、湖を圍んで連夜曉に徹するの萬燈會を行ふ、馬色雑花の如く鎧光流水に似たるもの其間に明滅す、是れ阿房の火の雄烈を缺くと雖も、黑夜の止水の院慘を借り來つて、炬火萬點の凄美を發揮せしむ、其一段詩的趣味の圓熟せる所、却つて楚人の粗大なるに優るを覺ゆる也

▲断じて企及すべからざる秀吉の天分は、慘酷なる戦争を慘酷なる本質に一任して、眉を擡めつゝ之に従事するを愚なりとし、極力之を詩化し畫化して、現

史論人物評論

三〇九

實以上の崇高偉大なるものとならしめんことを企て、而も充分其目的に叶ふの實力を示したるに輝けり。

動作の美

▲彼が一生の傳記は活動に繼ぐに活動を以てせしものにして、何れの頁を開くも、其輕快にして虚空に舞踏するが如き動作の美を認むることを得べし。

辯舌の雄

▲彼が辯舌の雄にして、雄辯能辯兩ながら之を兼ね、煽動者の舌、鼓舞者の舌、教誨師の舌、説客の舌、談論家の舌、落話家講釋師の舌等を、悉く打つて一枚の長廣舌となし、物に應じ事に随つて八面透徹可ならざる無かりしは、彼が成功者たるの、資格を作るの重要素なるを忘るべからず。

大膽にして小心

▲單に大膽なる者、單に小心なる者、共に成功者の資格を有せず、能く大膽にして而も能く小心なる者に最後の勝利は歸する也。

生れ乍らの粹人通

▲其舌頭より彈じ出だすの言語が、如何にも世話に碎けて、柔かに煉れて、誰の胸にも染々と浸み渡るを覺えしむ、是れ秀吉が生れ乍らの粹人通にして、世態人情の裏面に通ずる小説家的才能を有せるが故にして、之に加ふるに鼻垂

人物利用術

小僧の頃より浮世の荒波に揉み抜かれし苦勞人なればなり、離れて聞けば唯雷霆の轟くが如く近く寄りて之を味ふれば、一言一句悉く醇酒の滴るが如きもの、是れ辯舌の秀吉にして、應て又秀吉其人の性格也、其人物の兩面也。

▲彼は到底自己の力を以て酔はせ難く魅し難き相手に逢ふ時に當り、心を潜めて如何に之を利用せんかを研究する也、結局其者をして、利用せらるゝを知りつゝ之を避くること能はざるの地位に立たしめ、私かに舌を打ちつゝも、表面は眞面目腐つて儲からぬ引立役となるの己むを得ざるに陥らしむ。

隙間なく手を詰める小刀細工

▲尋常一様の小刀細工と全く異りて、相手をして其小刀細工たるを充分に承知しつゝも、勢ひ之に乗らざるを得ざる羽目とならしむ、隙間なく手を詰めてより試むるの小刀細工は、其有効の點に於て雄圖大略也、之を試むるの心は江海を吞吐するの大度量にして、之を試むるの手は乾坤を旋轉するの大手腕也。

暗中の跳躍

▲一面に於ては絶大の天才物に觸れて電火の如くに迸り、魔神の乗り移りたるものと思ふより外なき活動を逞うして自ら其爾る所以を知らざるに似たりと雖

も、其儘に引つ繰返して他の一面より見る時は、矢張り我々と同じく法が附かぬ時には死ぬる覺悟を極めて、伸るか反るか一つやつ附けて見る男也、度胸一つに任せて暗中の跳躍を試み、難關を切抜てからホツと五色の息を吐く男也、是でこそ秀吉也、日本一の面白き人間也。

▲隙間だらけ危険な所だらけの人間なればこそ、テキパキと心地好き遣り口を見て、精悍とも峻烈とも、神速とも、透徹とも賞讃するを得べき也。

▲人生の至樂は書を讀むに在り、古英雄の性格を想像して歴史の表面を撫づるの悶かしさに禁へず、大膽を嫌ひ僭越を避くるの餘裕を失ひ、私に勝手の臆測を下して我獨り汝を知れりと自分免許をなしつつも、猶ほ且つ胸底に横はれる心許なき思を打消すこと能はずして、痒きが如く痛きが如き不安の念を如何ともするなき折柄、偶ま其英雄と時代を同うせし人の遺著を得て、我が想像せし所と寸分違はぬ事實の記録を見る乃ち驚喜して絶叫快を呼び、案を拍つて呵々大笑す、人生恐らくは余が此時の満足に比敵すべき快事少なからん。

隙間だら

人生史を
事讀むの快

別誂への
人間

無痛無憂
の解脱境

救済なき

▲彼は全く天に作られたる別誂への人間也、彼が一生を以て遊戯となすは、李白が一生を以て遊戯となせしに比して更に詩的也、彼は文字を以て詩を作らず、彼自身の行動を以て直ちに活ける詩となせり、戦争の殺風景に點綴する炬火燈火の美觀を以て其挿畫となせり、既に詩なり何ぞ一生を以て遊戯となすを妨げんや。

▲如此意匠を凝らして着手せらるゝの戦争は、痛苦にして悲惨なるの勞働にあらず、血と火を以て彩られたる絶好壯美の活ける畫卷にして、人皆畫中に活動するの思ひあり、傷を負ひたる痛みの中にも痛快あり、敵に刺されて死する刹那にも、一種美しき夢に入るが如き快味を感ず、秀吉が指揮の下に離合するの陣形、動揺するの旗影、閃灼するの劍戟、亂鳴するの金鼓、高低するの喊聲は、一致して戦場の天然と美術的調和をなし、人をして現實界を超越して、無痛無憂の解脱境に悟入するの思ひあらしめしもの如し。

▲長陣の退屈、將士驍の延びたるを苦み、膚の垢づきたるを厭ひ、閨房の妻子

を○偲○び○隣○舍○の○熱○酒○を○思○ふ○の○時○に○至○れ○ば○、○忽○ち○暮○營○を○變○じ○て○嘸○飲○歌○舞○の○場○と○な○し、
 敵○城○一○つ○の○冬○枯○の○景○色○を○真○中○に○取○殘○し○て、○四○圍○は○彌○生○半○ば○の○花○盛○り、○天○叟○の○技
 巧○を○嘲○る○が○如○き○不○自○然○の○奇○觀○を○生○せ○し○め○す○ん○ば○止○ま○す、○是○れ○獨○り○大○膽○を○以○て○爲
 し○得○べ○き○の○業○に○あ○ら○ず、○又○智○謀○を○以○て○行○ふ○の○藝○當○に○あ○ら○ず、○人○情○必○然○の○要○求○を
 自○己○の○我○儘○勝○手○の○中○に○融○合○せ○し○め○て、○偉○大○な○る○天○才○の○魔○力○に○萬○人○の○心○を○奪○ひ、
 恍○然○陶○然○と○し○て○醉○中○の○天○地○に○在○る○が○如○く、○自○ら○其○不○滿○足○を○忘○れ○去○ら○し○む○る○の○み
 其○間○に○毫○末○の○加○減○乘○除○な○く、○更○に○斧○鑿○の○痕○の○認○む○べ○き○な○き○也、○之○が○爲○に○破○綻○を
 生○じ、○之○が○爲○に○損○失○を○招○く○が○如○き○こ○と○無○か○り○し○を○見○て、○秀○吉○の○僥○倖○と○な○す○者○は
 誤○ま○れ○り、○彼○等○は○加○減○乘○除○以○上○の○數○字○な○き○大○算○術○を○解○せ○ざ○る○者○の○み
 ▲○刃○の○下○に○於○て○も、○荆○の○上○に○於○て○も、○痛○苦○な○ら○ざ○る○へ○か○ら○ざ○る○場○合○に○も、○悲○慘
 な○ら○ざ○る○へ○か○ら○ざ○る○場○合○に○も、○必○ず○人○情○必○然○の○要○求○に○向○つ○て○適○度○な○る○滿○足○を○與
 へ、○以○て○自○己○の○活○動○の○元○氣○を○常○に○新○解○な○ら○し○め、○以○て○全○軍○の○士○氣○を○常○に○騰○起○さ
 出○で○た○る○ば○か○り○の○も○の○に○し、○歌○舞○も○嘸○飲○も、○鳩○毒○も、○一○た○び○彼○の○手○を○經○れ○ば、

化○し○て○老○翁○を○少○年○た○ら○し○む○る○の○靈○藥○と○な○り、○之○に○依○つ○て○大○業○を○成○就○し○得○た○る○也、
 故○に○秀○吉○の○我○儘○勝○手○も○翻○つ○て○他○の○一○面○よ○り○之○を○見○る○時○は○自○己○の○天○職○に○向○つ○て○の
 非○常○な○る○努○力○也、○其○遊○蕩○は○事○業○也、○秀○吉○は○笛○太○鼓○の○音○と○踊○り○の○足○拍○手○と○を○用○ひ
 て、○小○田○原○城○を○攻○め○落○せ○し○也

▲○獨○り○豪○華○の○趣○味○を○解○す○る○の○み○に○し○て、○寒○素○の○趣○味○を○解○せ○ざ○る○者○は○俗○物○也、○獨
 り○寒○素○を○解○す○る○の○み○に○し○て○豪○華○を○解○せ○ざ○る○者○は○精○神○上○の○不○具○者○也、○而○し○て○世○界
 の○全○部○は○殆○ん○ど○此○俗○物○と○不○具○者○と○を○以○て○充○た○さ○れ○つゝ、○あ○る○也、○能○く○豪○華○の○趣○味
 を○解○す○る○と○共○に○能○く○寒○素○の○趣○味○を○解○す○る○者○に○し○て、○始○め○て○現○實○以○上○に○人○生○の○真
 味○を○咀○嚼○す○る○を○得○べ○き○也、○貴○妃○硯○を○捧○げ、○力○士○履○を○脱○し、○醉○筆○淋○滴○と○し○て○墨○を○皇
 帝○の○衣○に○潑○せ○し○彼○も○一○時、○散○髮○扁○舟○を○弄○し○て○江○湖○に○放○浪○す○る○此○も○一○時、○李○白○の
 人○物○の○價○値○は、○彼○を○以○て○此○に○優○れ○り○と○な○さ○ず、○此○を○以○て○彼○に○過○ぎ○たり○と○な○さ○い
 り○し○に○在○り、○詩○を○作○ら○ざ○る○詩○人○た○り○し○秀○吉○も○亦、○其○豪○華○と○寒○素○と○の○趣○味○を○二○つ
 乍○ら○神○髓○に○徹○す○る○迄○に○咀○嚼○し○得○た○り○し○點○に○於○て○は、○肯○て○李○白○の○背○後○に○指○を○啣○へ

茶一碗の薄

て居るべきものにあらざる也。
 ▲彼は足利家の坊ツちやんが、之に依て身代を潰せし茶の湯を愛すること非常なりしが、彼は茶の湯を以て天下に或る贅澤を教へず、戦亂の爲に荒されて厭世的に傾ける人心に適するの遊樂として、此淋しく佗しく詩味と禪味を淡墨にて繪きたる程に含める茶の湯を鼓吹し、以て時代の不安を醫し、不満足を平かにせんと試みしもの也、而も之に随伴するの目的として、必然に彼は、功名富貴も一碗の薄茶に如かざるを知らしめ、天下の豪傑をして、其野心に燃ゆる頭腦を松風の釜の音に冷ませ、天下太平の文策を、鶯の羽の色に如き温湯の中に見だせしに相違なし。

作られたるの英雄

▲秀吉は自ら作りたるの英雄に非ずして、天に作られたるの英雄也、天に作られたるの實質を物に觸れしめて磨き上げしもの也、故に其行動は火焰の空を飛ぶが如くにして、流水の地を奔るが如くにあらず、花の生活の淡きに甘んじて實を商ふのシミツタレを屑しとせず、彼は風也、火也、花也、インスピレーション也、神韻也、光芒也、電流也、飛影也、絃響也、清爽也、豪快也、痛烈也、敏速也、顯氣也、靈氣也、朝也、春也、之を以て勢ひを制し、之を以て機に投じ、之を以て人を壓到し、之を以て人を心酔せしめ、必ずしも最初より精密の算數を用ひずして、時に當り事に觸れ露に臨み變に應じ、亦奇氣横溢妙才迸發自ら其爾る所以を知らざるが如きものは秀吉也。

十二分の實驗

▲彼が六十餘年の生活は、天下に自己以上の強風なく烈火なく、美化なく、大インスピレーションなく、自己以上の神韻なく、光芒なく、豪快なく、清爽なきを十二分に實驗し得たり。

火に焼ける石

▲家康は實に秀吉の相手なり、是れ家康が秀吉より一段上手なる所以にあらずして、秀吉に缺乏する所の分子を、生憎く家康が多分に持合はせたるに由れり、家康の價値は自ら作りたるにありて、全く秀吉と其内容を異にせり、家康は雨也、風にあらず、水なり火にあらず、實也花にあらず、實體實質也、遅重也、深沈也、晦澁也、陰冷也、橢圓形也、楨櫛子色也、夜也、冬也、一より十迄悉

く皆秀吉の他の極端を占む、彼が秀吉に對して苦手たるの狀態は、恰も原頭の草木猛火の舌に舐め盡されて、獨り一頑石の残れるが如し、眞黒に燻つて益々頑硬の態を加へ冷々として火の爲す無きを嘲る、其濟まし込んだる落附顔、寧ろ憎らしき計り也

老むべき
英雄

▲家康と秀吉とは最初暗中に競争せり、既にして互に相近づくや、用心しつゝ、腫れ物に障るが如く、オツカナピツクリに互に試験し始めたり、而して家康到底秀吉が天才の花に敵すべからざるを知るや、花の凋落を待つて實を以て勝を占めんとするの態度を取りたり、是家康の大不幸也、家康の爲に悲まざるべからず、彼は衰老に至る迄苦難と手を分つこと能はずして、幾度か危地に陥り、纔に年齢の耐久力を以て、秀吉に食ひ荒らされし殘肴冷炙を受け得たり、感むべからずや

傳記に不
裝飾の點火

▲秀吉は家康の長所を以て家康と競争するの愚なるを悟り、家康に無き自家の長所を極度に發揮して其爛熳の色、其赫灼の光、其激烈の氣、要するに凡て其

堅實周
匠の英雄

大天才の閃きをば、殆んど生命を磨り耗らすばかりに吐き盡くし、以て家康を家康の儘に蔽ひ去らんことを企てたり、運命此の如きは結局家康の幸福とすべし、獨り感むべきは秀吉也、睨めつこには笑つて負けを取り易く、息の長さに於ては赤筋を張つても叶はず、詮方なくも、家康に缺く所の自家の特長をば、汽罐の破裂する迄に發揮して、此點に於て彼を背後に墮若たらしめざるべからず、彼をして顔色無からしめざるべからず、斯くて家康の生活の比較的氣樂にして壽命の樂たるに拘はらず、秀吉の生活は、常に後より追ひ立てらるゝが如くにして忙はしく、苦しく、自の廻るが如く、精髓を枯らし膏血を搾りて、盡く身より發するの光りとなし、其傳記に不斷の點火裝飾を施し、能く家秀の光彩を蔽ひ去りしと共に、亦己れの壽命を縮むるの餘儀なかりし也

▲家康の價値は人力を盡して天命を促したるにあり、彼に學ぶべきは、人苟も千挫屈せずして其志す所に向は、早晚必ず成功の幸運に迎へらるゝを得べしとの教へ也、彼は頼朝が政治家的頭腦に尊氏が姦雄的腹吐を兼ねと雖も、其材

能は始め生礦の儘天より受けしものにして、艱難に磨かれしが爲に玉となりたる也、彼の萬事に抜け目なくして、杖にて石橋を叩きつゝ進むが如き堅實周匝は、頼朝尊氏の到底數歩を譲らざるべからざる點にして、全然其逆境より養ひ成されたる價值也とす、彼の用兵の消極的にして、耐久力強きは武田信玄に惱まされて訓練し來りたる結果に外ならざる也

低聲の助言者

▲秀吉の爲に光輝を掩蔽し去られし人物の中には、太陽と同質なる恒星少なからず秀吉無くば秀吉の歩みし道を歩むべき英雄にして、若くは秀吉はなくば、秀吉より天才の度低き粗大の人物を擁護して大業を成しむべき王者の師たる俊傑にして、甘んじこ秀吉が藥籠中の物となり、自ら我を嘲りつゝ而も嘲るべき境遇を脱することを望まざる者ありき、彼等は頭腦餘りに透明に智慮餘りに周密に、算數餘りに精確に、時勢の變轉する状態、過去現在未來の關係、總て、世の中の事が裏の裏迄餘りに見え透く目を見ふるを以て、之が爲に英雄的犯熱を銷磨せられ、縦令失敗に歸するも亦快男兒たるを失はずとの同情を買はんとす

詩的惡戯者

るの山氣なく、一生人の背後に坐して、低聲の助言者たるに終る也、感むべき低聲の助言者たるに終ぬ也、竹中重治は是也黒田孝高は是也

▲爰に、歴山王に依つて輝かされたる海賊ありしが如く、自ら身を以て秀吉に衝突し、粉々に碎け飛んで五彩を閃かしたる千古の快男兒あり、戰國的不屈の氣と其疎放の情とを極端に横溢せしめて、寸毫も制取を加へざりし人間の見本として、傑怪石川五右衛門は其圖々しき野生の面框を擡げたり、飽迄も時代の俗理俗情に反抗して、其餘りに極端に傾きたるの結果は、遂に正を邪となし、邪を正となし、眞を偽となし、偽を眞となすに至らざれば已むこと能はず、天下の英雄豪傑策士勇者を十把一からげにして、片手に持ち上げ之を玩弄物にせんことを企つ、我が力が量らず、身の程を知らざる者なりと云はゞ云へ、人間此の如きを得て始めて眞の快男兒と稱せらるべし、測るに彼の心事たる當時至難中の至難として、到底人力の能く成し得べからざる事と信せらるゝ事をは、英雄豪傑策士勇者を前に並べて殘らず其鼻毛を抜き、恰も人形の首を捻ぢ切る

が如くソツと秀吉の生命を絶ち、天地顛倒して江河逆流するが如き一世の大騒動をば、肱を曲げてゴロリと寝轉び乍ら何食はぬ顔にて見物せんとす、悪戯も茲に至れば一種の哲學なり、一種の詩なり

▲織田信長の成功は半ば其人物の成功にして半ば其幸運の成功也、其人物も亦半ば天授にして半ば自作也、彼は元來剛愎自ら用ふるの偏狹者にして、英雄の第一資格たる人を容るゝの量を缺けり、人を容るゝの量を缺けるだけそれだけ、人を見るに敏也、故に彼は自ら訓練して其偏狹の缺點を補綴すると共に、其人を見るに敏なるの長所を極度に發展して、衆人の材能を自己の材能となすの方針を立てたり、是れ信長が後天的に群雄より一步を進めたる所以にして、其基本財産は此方針より作られたるもの也、木下秀吉を賤奴に拔擢し、明智光秀、瀧川一益を浮浪に選別したる、皆信長の後天的長所也

▲應仁の兵燹以後幸ふじて、舊觀の半ばに復せし京都市街も、再び細川氏一門の争權に依りて火災に罹り、家を失ひし公郷は妻子を捕へて亂を禁裡に避くる

天授と自作する英雄

姫君の豆腐買ひ

の己むを得ざるに至り、宮殿樓閣は幾十家族の雜居所となりて、壊瓦破簾の間、炊煙は兒啼と共に漏れ、やんごとなき姫君は裾を塞げて宮垣の破れ目より豆腐買ひに走り、高位の御簾中褌掛けにて、御苑の池の水に赤ん坊のオシメを洗ふ、されば紫震殿前右近の橋下に市人群れ集まりて茶を賣り餅を鬻ぎ、貴賤老少縦まじに侵入して御簾に近づき、錢を包み題を記して簾間に挿めば、謝料の額に應じて大小精疎の染筆を賜ふ、之を帝室式微の極度と云はずして何をか極度と云はんや

▲信長の人物は甚だしく大ならず、信玄、謙信以上也と雖も、早雲元就以下也、彼は恰もキリストに先だつヨハ子の如く、日本一の大英雄秀吉の爲に門を開くの鍵となれり、秀吉は實に群雄割據時代を總括して其上に出でたる英雄也、群雄割據時代は人物要求時代にして、總ての階級總ての情實は、人物を迎ふる道途を開かんが爲に打破せられ、日本人の能力を訓練して智に於ても、勇に於ても、術に於ても略に於ても、極度に發達したる各種の人物を簇出したり、而し

甚星に似たる生滅

興味ある
闘争力の
對比

て最後に各種の人物、各種の能力を打つて一丸となしたる秀吉出づ、秀吉は自己に始まりて自己に終り、何の系統にも屬せず、何の系統をも開かず、輝くと太陽の如くにして、其生滅は彗星に似たりと雖も、それだけ彼が出てたる所以の意味は深からざるべからず。

▲人間の闘争力に二種あり、一は強さにして一は鋭さ也、強さは消極的にして鋭さは積極的也、強さは受動的にして鋭さは發動的也、強さは實質を堅緻にして他物の刺激を彈反するの力、鋭さは鋒鏘を尖利にして他物の障碍を撃破するの力、信玄は其強き力の發達の極度なる者にして、謙信は其鋭き力の發達の極度なる者也、信玄一百度ならば謙信も一百度、信玄沸騰點なれば謙信も沸騰點、兩々對比して一度の差も無きが故に興味ある也、若し兩者世を異にして出では、共に武力を以て天下を征服し得べき者也、世を同うして出でしむるも、何れか一が中原に入るに便なるの地利を占めば、織田氏に先んじて織田氏の事業を成し得べかりし也、其僻陬に起りて共に地の利を得ざりしと、兩者時を同うして

約致に富
める傳記

互に相牽制せしとは、彼等に同情すべきの恨事なるが如し、然れども、彼れ信玄、謙信は武人にして政治家にあらず、彼等の價值は闘争に長せるにあるのみ、其政治家的要素は信長秀吉に比して一段貧寒に、大局を打算し群雄を駕馭するの主權者的手腕と度量は、秀吉家康に對して數歩を譲らざるべからざりし也、彼等は到底死に抵る迄争闘するに運命に支配せらるべく造られたる者也、武人として早雲、元就よりも一段鍛鍊を経たる者也と雖も、英雄的權略、政治家的智能に至りては、早雲元就が云ふべからざる妙味を其空處疎處に貯へしに劣ること著るし、彼等の真相を他の英雄と比較するに至りて、彼等の爲に恨事となすの恨事は則ち盡くべし。

▲北條早雲の傳記は極めて約致に富めり、眼高く志大に、一劍布衣より起りて風雲を叱咤す、其始めて凡人時代に崛起したるが爲に、嶄然として豚犬群中に麒麟の頭角を擡ぐるが如く、立策行動盡く水際立つて鮮やかなるを見る、尊氏以後絶えて久うして茲に一個の英雄兒を見る、千里の平野を行きくして其單調

恐るべき
詭計に富
める英雄

無○趣○味○に○倦○殺○せ○ら○れ○ん○と○す○る○の○時○、○馬○頭○雲○散○じ○て○端○無○く○奇○峰○の○突○兀○た○る○に○逢○ひ○、
困○眼○を○一○洗○し○て○覺○え○ず○快○哉○を○叫○ば○ん○と○す○

▲○早○雲○は○正○反○對○な○る○二○様○の○主○義○を○其○政○治○と○戰○闘○に○分○ち○用○ひ○た○り○、○政○治○に○於○て○は○
極○め○て○着○實○的○な○る○仁○愛○主○義○に○し○て○、○其○成○功○を○長○日○月○に○期○し○戰○に○於○て○は○極○め○て○投○
機○的○な○る○奇○兵○主○義○に○し○て○、○其○成○功○を○咄○嗟○の○間○に○期○す○、○故○に○一○面○よ○り○見○れ○ば○彼○は○
極○め○て○氣○の○長○き○人○に○し○て○、○他○の○一○面○よ○り○見○れ○ば○極○め○て○氣○の○短○き○人○也○、○政○治○家○と○
し○て○の○彼○は○尊○む○べ○き○君○子○に○し○て○、○戰○略○家○と○し○て○の○彼○は○恐○る○べ○き○詭○計○に○富○め○り○、
其○政○治○家○た○る○の○一○面○こ○そ○尊○む○べ○き○早○雲○の○眞○價○に○し○て○、○彼○の○心○偏○に○民○の○上○に○在○り○、
其○恐○る○べ○き○詭○計○と○驚○く○べ○き○敏○腕○を○用○ひ○て○、○寡○兵○能○く○大○敵○を○破○り○、○味○方○は○勿○論○敵○
兵○を○も○成○る○べ○く○多○く○殺○傷○せ○す○し○て○局○を○結○ぶ○の○方○針○を○取○り○し○は○、○亦○是○れ○人○命○を○重○
ん○ず○る○仁○愛○主○義○に○し○に○、○彼○が○成○る○べ○く○戰○闘○の○時○間○を○短○く○し○、○及○び○其○度○數○を○少○な○
く○す○る○に○勉○め○た○る○の○心○事○は○、○充○分○に○感○謝○を○拂○ふ○に○價○す○る○も○の○也○、○早○雲○の○奇○兵○主○
義○は○其○大○な○る○仁○愛○主○義○の○一○端○に○し○て○、○其○戰○ひ○を○な○す○に○氣○の○短○き○は○民○を○治○む○る○に○

花雨一過
桃花開

奇兵の成

氣○の○長○き○所○以○、○恐○る○べ○き○戰○略○家○た○る○は○尊○む○べ○き○政○治○家○た○る○所○以○な○る○こ○と○を○

▲○毛○利○元○就○も○亦○醜○穢○な○る○足○利○時○代○よ○り○肥○料○を○吸○收○し○て○發○生○せ○し○萌○芽○が○、○遂○に○無○
双○の○名○花○を○開○く○に○至○り○た○る○も○の○也○、○早○雲○は○一○朶○の○梅○花○深○雪○の○中○よ○り○春○の○至○れ○る○
を○告○ぐ○る○が○如○く○、○風○格○高○く○氣○韻○遠○く○し○て○、○他○の○彼○に○踵○い○で○起○れ○る○群○雄○と○面○目○を○
殊○に○す○る○な○り○と○雖○も○、○其○事○業○の○堅○實○な○ら○ん○こ○と○を○求○め○て○成○功○の○遅○々○た○り○し○は○多○
少○歴○ら○ぬ○節○な○き○に○あ○ら○ず○、○毛○利○氏○の○起○る○に○至○り○て○漸○く○春○光○の○融○な○る○を○覺○ゆ○、○早○
雲○の○出○身○は○中○國○也○と○雖○も○、○其○事○業○は○大○に○東○國○的○遲○重○の○氣○を○帶○び○、○全○然○箱○根○以○東○
の○人○情○に○投○合○せ○り○、○元○就○に○至○り○て○は○中○國○に○出○身○し○て○中○國○に○成○功○せ○る○が○故○に○、○比○
較○的○輕○快○、○比○較○的○鮮○麗○、○夜○雨○一○過○桃○花○の○開○く○を○見○る○の○趣○あ○り○

▲○此○時○代○の○英○雄○は○皆○人○心○が○濫○政○に○苦○み○放○縱○散○漫○な○る○氣○風○を○厭○ふ○の○傾○向○を○看○取○し○
て○、○機○會○の○乘○す○べ○き○を○覺○り○た○る○者○な○れ○ば○、○組○織○的○事○業○を○企○て○秩○序○的○行○動○を○な○す○
に○於○て○一○致○し○、○民○を○本○と○す○る○の○善○政○を○施○す○に○於○て○一○致○せ○ざ○る○能○は○ざ○り○し○也○、○就○
中○最○も○一○致○し○た○る○の○點○は○、○英○雄○何○れ○も○時○代○の○裏○面○よ○り○勃○興○し○、○全○く○赤○手○空○拳○に○

あらざれば、微々たる一城岩の主管者たるに過ぎざりしを以て、小を以て大を
摧き、寡を以て衆を破るべく、必ず奇兵を用ひて危険を冒すの歴史を有せる事
也、早雲既に爾り、元就亦爾らざるを得ず、信玄も謙信も信長も、群雄の成功
は一に奇兵の成功のみ

▲信玄謙信も亦自己の小を以て他の大に當るべく、早雲元就一流の奇兵を用ふ
る必要を感ぜざるに非ざりしと雖も、兩氏は最初より恃むに足るの根底と用ふ
るに足るの兵力を有せしを以て、奇兵の必要も早雲元就の如く唯此一途に依り
て死活の運命を決する程に非常ならず、奇よりも多く正を用ひ、虚よりも多く
實を用ひ、鬪争の技術を比較して得失を評論するの餘裕あり、早雲に於て、兵
は單に已むを得ずして用ふるの非常手段たりしも元就に至りて之に些少の技術
的趣味加はり、信玄謙信に至りては全く純然たる趣味に屬せる技術となりて、
鬪争の爲に鬪争をなすに及べり、兵を弄びて自ら喜ぶに及べり、兩氏能く奇を
用ふと雖も、其奇は即ち技術上の奇のみ、奇を用ひて趣味を多からしむるもの

四家奇兵
の評論

天稟の姦
雄

いみ、早雲が新時代を開拓するの根本的意義より來りたる必要上、已むを得ず
して奇兵を用ひしとは、其高と低、其深と淺、固より同日の談に非る也、

▲尊氏は是れ亂世の姦雄、其器度の大は頼朝に匹敵し、而も内容の堅實ならざ
るは、却つて頼朝よりも術數を藏するの奥行に富める所以也、日本の諸英雄の
斷じて尊氏に及ばざる一點は彼が戦ひに勝つに拙にして、敗るゝに巧みなるの
長所也、彼は常に大兵を以て小敵と戦ひ、勝つこと稀にして敗るゝこと多し、
其敗るゝや、苦戰奮鬪充分に手を詰めて、而して後に敗るゝにあらず、戦ひの
道を半ばも行ずして耐忍もなく走る也、而も彼の兵力は一敗毎に益々加はり、
敵の兵力は一勝毎に愈々減すること、甚だ不思議なるが如し、他無し、是れ尊
氏が大局の打算に長せる所以にして、既に人心の自己に歸せるを知り、決死の
小敵の希望するところに投じて大なる損傷を被るを愚也となし、他の銳鋒を避
けて自滅せしむるの方針を取りたる也

▲古來應仁の亂の如く縮まりなく呑氣なる戰爭あるなし、我々の祖先に斯る馬

縮まり無
く香気な
る戦争

史論人物評論
三三〇
鹿○げ○て○氣○の○長○き○人○々○あ○り○し○と○は、殆○ん○と○信○ず○る○こ○と○能○は○さ○る○程○也、動○機○の○上○に
動○機○あ○り○て、細○か○に○探○究○す○れ○ば○頗○る○複○雜○な○り○と○雖○も、細○か○に○探○究○す○る○の○價○値○あ
る○事○件○に○も○あ○ら○ず、要○す○る○に○足○利○民○の○濫○政○は、腐○肉○の○上○に○生○じ○た○る○蛆○蟲○が、其○肉
を○争○ふ○て○相○鬪○ふ○如○く、細○川○勝○元○、山○名○宗○全○二○匹○の○大○蛆○蟲○を○生○じ○て○一○方○は○十○六○萬、
一○方○は○十○一○萬○の○小○蛆○蟲○を○從○へ、惡○臭○紛○々○近○づ○く○べ○か○ら○さ○る○の○争○鬪○を○開○き○た○る○も
の○に○過○ぎ○さ○る○也、畠○山○斯○波○兩○家○の○家○督○争○ひ○は○其○近○き○動○機○也、將○軍○義○政○と○弟○義○視
と○の○私○慾○競○べ○は○其○遠○き○動○機○也、一○は○勝○元○に○依○頼○し○一○は○宗○全○に○依○頼○し○て○各○自○ら○逞
う○し○た○る○也、斯○く○て○兩○軍○幕○府○を○挟○ん○で○其○東○西○に○陣○し、時○々○小○競○合○ひ○を○な○し○て○は
制○限○も○な○く○休○息○し、兵○結○ん○で○解○け○さ○る○こ○と○實○に○十○有○一○年、少○年○武○士○は○壯○年○と○な
り、壯○年○武○士○は○白○髯○の○老○武○者○と○な○り○て○も、猶○ほ○陣○中○生○活○よ○り○脱○す○る○こ○と○能○は○さ
ず、双○方○の○司○令○長○官○た○る○勝○元○宗○全○が○死○亡○し○て○も○猶○ほ○終○局○せ○ず、戰○争○の○中○途○に○一○寸○歸
國○し○て○妻○子○の○顔○を○見○て○歸○る○も○あ○り、戰○争○の○片○手○強○請○強○盜○等○の○内○職○を○な○し○て○懷○を
肥○や○す○も○あ○り、禁○闕○社○寺○邸○宅○悉○く○兵○火○に○燒○け、珍○器○寶○物○金○銀○皆○掠○奪○に○歸○し、市

篩子と流
すも半
の美を見
出し難し

醜的半面
の發露時

民○は○奔○竄○し○て○亂○を○避○け、帝○都○は○茫○々○た○る○焦○土○の○野○に○化○す○る○に○至○り○て○已○む、而○も
其○已○む○も○亦○割○然○た○る○終○局○に○あ○ら○ず、山○名○軍○の○本○會○な○る○義○視○が○遂○に○堪○り○兼○て○逃○げ
出○し○た○る○を○始○まり○と○し○て、何○時○し○か○烟○散○霧○消、跡○方○も○な○く○な○り○て○けり、十○有○一
年○の○對○戰、其○間○に○一○の○義○憤○な○く、一○の○雅○量○な○く、一○の○奇○計○な○く、一○の○奮○勇○な○く、
醜○に○始○り○て○醜○に○終○り、篩○ふ○も○漉○す○も○半○點○の○美○を○見○出○し○難○し、實○に○凡○俗○的○時○代○の
凡○俗○的○事○件、睡○眠○的○時○代○の○睡○眠○的○事○件○な○る○哉

▲足○利○十○三○代○の○中、義○滿○以○後○の○十○代○は、混○亂○殆○ん○と○云○ふ○に○忍○び○す、將○軍○は○唯○豪
族○が○權○力○を○争○ふ○の○神○輿○と○な○り○て○昇○ぎ○廻○は○さ○れ、起○す○も○倒○す○も○毀○つ○も○殺○す○も○彼○等
が○心○の○儘○と○な○り、天○下○に○將○軍○程○割○り○に○合○は○ぬ○職○業○は○無○き○に○至○れり、故○に○此○間○に
於○け○る○重○も○な○る○問○題○及○事○件○を○見○ば、足○利○時○代○は○日○本○人○の○醜○的○半○面○を○發○露○せ○ん○が
爲○に○開○か○れ○し○の○一○期○に○し○て、明○治○の○今○日○よ○り○文○明○の○假○相○を○剝○ぎ○去○り○た○る○も○の○と
相○匹○敵○す○る○に○足○る○を○首○肯○す○べし

▲足○利○氏○が○能○く○事○業○の○命○脈○を○十○三○世○に○傳○へ○た○る○所○以○は、其○凡○俗○的○時○代○な○り○し○が

肥料を施さんとして
経過せらるる時

韻絶味絶
の詩境

滅亡を待たばさく
引延ばさるる時

爲め也、其睡眠的時代なりしが爲め也、磊々たる頭顱一の英雄なく、亦姦物らしき姦物なく、足利氏に抛棄せられたる政權を拾ふて天下の耳目を一新するの快男兒なかりしが爲のみ、然れども足利氏十三世は、日本の歴史上最も光彩ある群雄割據時代を開きて、百世稀に見るの人物を一時に輩出せしむべく、其土壤に肥料を施さんとして経過せられし時間也とすれば、臭きも醜きも左迄厭ふべきにあらず、義満も義政も勝元も宗全も皆肥料也。

▲平氏の歴史の趣味多きは、文人專權と武人專權とを混同して一種の面目を開きたれば也、故に其末路も、純文人專權なる藤原氏の末路の如く優柔ならず、純武人專權なる源氏の末路の如く殺伐ならず、優柔と殺伐の中間より韻絶味絶なる一段の詩境を開き來り、壯烈の裏面に哀傷あり、鐵血に配合するに風月を以てし、之を琵琶に和して歌へば、數百歳の下能く人をして斷魂せしむ。

▲平氏は事實に於て清盛の爲に起され清盛の爲に亡ぼされたり、清盛死後の平氏は其滅亡を詩化すべく時間的に引き延ばしたるもの、み、重盛の如きは平

氏の滅亡に後人の同情を喚起して、琵琶斷魂記の詩的趣味を深からしむべく現滅せしものに過ぎず。

▲平氏專權時代は、天秤の一端上りて一端下がらるが如し、平氏が中天に飛揚しつゝある間に、一たび彼と對峙の歴史を有せし源氏は、地上に固着して實力を養ひつゝありし也、平氏が上昇の極に達して將に下降せんとしたる時は、源氏が下降の極に達して將に上昇せんとするの時なりき。

▲武人專權時代第二の曙光は、年少艱苦を嘗め盡せし堅實なる頼朝の額上に輝き、最初の一頓挫は、却つて彼に大なる彈反を與へたり、彼が將に將たるの器度は、頼信以來東國の豪族を歸服せしめし、累代の名將の恩威を想望するに足り、八州の武人をして一種史的且つ詩的なる感想に、胸中の琴線を鳴らさしめ、戰敗れて却つて非常の勢力を加へたり、彼は其祖たる頼信にも倣はず、古の大元帥たる坂上田村麿をも學ばず、持重山の如く海内を壓し、同族同系統なる範頼、義經の能力をも、同族異系統なる義仲の勳功をも、安座して自家の

勢力上の
力学問題

安坐の重
量

藥籠中に收め、其安座の重量を以て、自家の三世、北條氏の九世を一貫したる。覇政の基礎を築きたり、頼朝が外形の偉大は略後世の尊氏に似たりと雖も、其無爲にして破綻無かりし内容の堅實は遙に尊氏を凌げり。

▲日本は此大頭温客の頼朝に依りて、身親ら矢石を犯すの將軍以上、始めて眞に大元帥らしき器度を見たり、如此主腦に統率せらるゝ源氏の軍隊は、徹底冷強沈重にして、活ける甲冑、活ける劔戟、活ける殺人器也、其進動するところ兵氣流水の如く、些の温熱を帯ばず、之を鐵漿黒々と薄化粧、錦の袍動もすれば月を傷み花を惜むの涙に霑ひ易く、黄金の太刀腰に重げなる大將を圍みて、華奢風流畫圖より抜け出でたるが如き、平氏の軍隊と對照し來れば、平軍の痛々しさ一入にて、水禽に驚かされ、火牛に脅かされ、膽を落し魂を飛ばしての敗走も、唯其憐むべきを覺えて其笑ふべきを知らず、病魔に憤死したる清盛が末路の慘にして而も壯なる、壇の浦の藻屑と失せし其遺族の最後の慘にして且つ哀なる、亦是れ詩的感想上の好比較觀にあらずや。

活ける殺人器の袍の太刀黄金の太

火牛軍

絶好活畫

光景の如き地を流し血を流したる如き也

▲頼朝が藥籠中の物にして、其藥素も毒素も共に彼が大腸裡に消化さるべき義仲は先づ進んで京師を掃蕩せり、獨り彼が田單火牛の謀を用ひしのみならず、其部下の兵士悉く火牛の如く狂暴なりし、寧ろ彼自身が一個の火牛王なりし、歌舞の地、宴飲の都、戀愛の都、常春の都は、火牛群の爲めに蹂躪せられたり、此忙殺急殺の間に、平氏が楚人の一炬を待たずして自ら阿房を火にするの自棄的勇斷を挿み、公卿と軍士と美人と劔戟と、混亂雜沓して都を去るの絶好活畫を挿み、火の雪と涙の雨とを挿み、無量の感慨、萬斛の愁思を挿み、經正が琵琶を挿み、忠度が國詩を挿み、破れたる樂みを挿み、摧けたる戀を挿み、遂に山圍み潮打つの一ノ谷に集合して、頼み難き再興を頼むに至る、平氏が末路の悲惨は、其武人より文人化したるが爲め也、其平氏より藤原氏化したるが爲め也、武人の血と文人の血と須磨の浦輪の波の如く人々の心臓に相打ちたれば也、畫の如き好景の地に畫の如き人が血を流したれば也、武骨なる景季が箴に梅を挿みしを賞する勿れ、是れ偶々死に抵つて亂れざる平家の公達の風流に感化せ

茲に其生活に終り絶美に終る
高き感情の響き

られしものゝみ、義仲、頼朝相食むの際に乗じて、敏速に漁夫の利を謀らざりしを尤むる勿れ、恰も是れ花の敦盛の笛を聴きて、都門榮華の回想に一同鐵の袖をしぼりあへぬ時なりしにあらずや、既に義仲の火牛軍に敵せず、何ぞ義經の野猪軍に當らん、昨日は東關の下に轡を並べし十萬餘騎も、鵬越の險阻忽ち破れて、今日は西海の波に漂ふ數千人となり、磯邊の楫枕幾夜も重ねずして、又もや屋島の根據地を失ひ、終に壇の浦の最後となりぬ、扇を掲げて敵を招くの美く、海底に都府あるを信するの幼帝、苟くも死を惜み耻を晒せし宗盛父子を除くの外は、平氏の一門茲に其美的生活を絶美に終りたり、後世清盛の暴逆を惡む者多しと雖も、何人も平氏の末路に深き同情を寄せざるはなく、頼朝の勃興を喜ぶ者多しと雖も、何人も源氏の末路に同情を寄するはあらず、是れ他無し、源氏の亡びしは骨肉相食みて人情の普通に反したるが爲め也と雖も、平氏は餘りに人情の越く所を縦まゝにしたるの失にして、其狂暴の中にも高き感情の響を聴き、其末路の頁の終らるゝ迄も人情結合を解かざりしが爲め也

榮華の二重

物理的權力の進歩

沈重なる不導體

▲非凡の人傑にあらずして、普通の人情を具へたる清盛は、藤原氏及白河鳥羽兩法皇に示されし模範の前に子孫の長計を思ふべく、爾く冷頭願ならざりし也、專權の美味、榮華のアルコール分は、獨り數代飢渴せし帝室をして第二の藤原氏たらしめしのみならず、始めて之を嘗めし武人をして其飽醉に堪えざらしめ、第三の藤原氏たる平氏は、藤原氏を學んで寧ろ藤原氏の昇る能はざりし處に達せり、藤原氏を學ぶと共に法皇を學び、清盛一人にして藤原氏專權と法皇專權とを兼併し、其榮華を二重にせり

▲武人權力の進歩は、物體を高處より落せる時に於ける速力増加の理法と齊しく、全然物理的也、專權時代に近づくに隨つて非常の速度を加へたり

▲權力は猶ほ驕兒の如し、己れを戀ふ者を嫌ふて、己れを戀ふ者の敵を愛する也

▲義仲の速に滅亡せし原因は、柄にも無く平氏の專權と榮華を學びたるが爲め也、義經の滅亡も一半の原因は、頼朝の冷酷なるに在りと雖も、其一半は同じ

く平氏の氣風に感化せられしに在る也、故に義仲の末路も義經の末路も、其悲惨にして詩的なること多少平氏の末路と相似たり要するに、源氏も義仲、義經迄は、藤原氏の氣風の中に擒にされし也、堅實にして沈重なる頼朝は、其人格に於て既に如此浮華の弊風に感化せられざる不導體なる上、殷鑑歴々其眼中に在れば、最も痛切に、政權の基礎を此腐敗せる歴史の外に置くの必要を感じ、此誘惑に遠ざかる地に政府を設くるを得策となせり。

鎌倉政治の根本意

▲頼朝が政治の根本的意義は、人情の發展を出來得る限りに抑壓したる陣中生活の趣味を應用し、寒素なる氣風を養成して嚴肅なる法規に合適せしめ、平和を持續し、政權の根底を固くするに在る也。

一種變調なる酷薄

▲頼朝が家門の系統と、其政治の系統とは、嚴密に之を區別せざるべからず、頼朝の政治は長く死せざるも、其家門は餘りに脆く亡滅したり、寧ろ消滅したり、蓋し爲義、義朝が父子兄弟相食みて以來、骨肉互に殺ぐの風は源氏の流行病となれり、必ずしも源氏の系統に酷薄の血液を遺傳するにあらず、義家、義光

巧なる朝政の毒者

兄弟の情誼、頼義、義家父子の親愛の如き、美談として傳ふるに足るもの無きにあらざるに、義朝以下公曉に至る迄此流行病の慘毒を免る者あらずしは何ぞや、蓋し義朝が情を矯め忍んで其父を殺し、其諸弟を屠りしより受けたる煩悶鬱憂は、其敢爲の氣性と衝突して物狂はしき自暴自棄となり、一種變調なる酷薄の病癖を醸し出して、當時幼弱なりし頼朝の頭腦に恐るべき感化を與へたるものなるべし、感化は眞に恐るべし、義朝が忍んで爲したる事を、頼朝は平然自若として行ふに至れり。

▲何れの時代に於ても權力の背後には必ず、其覬覦者あり北條氏は獨り頼朝の政權を盗みしのみならず、自己の助言に依りて頼朝が製造したる總ての物を盗めり、其主義を盗めり、其制度を盗めり、其覬覦者を杜絶して家門の長久を保険する方法を盗めり、而して盗みたる物の總てを、頼朝の用ひしよりは一層過度に用ひたり、質實簡明なる政治は一層質實簡明に、堅緻周密なる制度は、一層堅緻周密に、殘忍刻薄の行爲は一層殘忍刻薄に、虛位虛榮は益々之を避け、

劇理的修

實權實力は愈々之を重んじたり。有らゆる慘劇は北條氏の手に乗られて現じたるも、悉く是れ、政權の基礎を安固にし、家門の長久を保障するの方針より算出せられし、數理的手段なるを以て、深謀遠慮一々加減乗除の法則を離れず、自ら危うすべき事を爲して反つて大に安きを得たり、源氏の政權を北條氏に移して、單に一の徳利の酒を他の徳利に移したるが如く、其實其用共に些かも變せしめざりしものは、實に義時の大手腕也、政子も亦義時に利用せられしのみ。

美術的姦

元來單純淺薄なるは日本人の常性にして、古より多く姦物と稱し得べき者を出さず、陰險深毒義時の如き、我國に於ける姦物の最上なる者也、頼朝、魯氏、家康より其英雄的要素を除きて、三者の姦物的要素のみを一に併せ、以て纔に義時の陰と深とに正敵し得べし、義時も亦異彩ある一人傑たるを失はざる也、見よ義時は源氏の實權を盗むと共に其虚位を盗むが如く淺薄なる者にあらず、京都に乞ふて偶像よりも能力無き本尊を奉じ、己れは唯幕府の執權職天皇の陪

日本ステ
の祖

臣として、其實天皇をも偶像化するの權力を握れり、是れ頼朝の主義方針を今一段低くして、根底を固むるに意を用ひたるものにあらずや、姦策も此に至れば一種の美術也。

政治と道
徳の詩的
醇化

▲北條氏の事業の比較的永續せられしものは、義時を繼承するの泰時が、義時に優るの人物たりしを以て也、姦にあらず黠にあらず、眞成の人物たりしを以て也、日本に於けるセントルマンの祖、ステイツマンの祖たるを以て也。
▲天何ぞ北條氏を寵するの渥きや、泰時の繼承者經時早死して、泰時がステイツマンの要素の半ばを割き、其半ばを宗教家的慈眼哀腸に填めたる、眞に敬愛すべき最明寺殿は、菩薩に代る如來の如く輝き出でたり、高士青砥藤綱を拔擢し、清士佐野常世を任用し、政治の基礎と道徳の基礎を積極的に一致せしめて、殆んど詩味を帯ぶる迄に醇化し鉢の木の一曲、人をして鎌倉政府の全盛期を追想するの情に堪へざらしむ。

政治の神

▲泰時、時頼の主義は、能く人情を壓制して而も人情を保護したるもの也、人

情の發展をして其規を超えしめず、一定の範圍の中に充分満足を與ふべき餘地を開きたるもの也、政治の極意此に在り、政治の神髓此に在り、政治の原理此に在り如何に人類社會の進歩に随つて政治機關の組織が變ずればとて、秦時、時頼の據りたる理法の外に逸出する事能はざる也

▲如何なる善政と雖も、其安全を保險すべく武力に依頼せざるべからざるを以て、惡政に動的武力の必要なるが如く、善政も亦靜的武力を必要とす、靜的武力とは天下の動亂を未前に鎮壓し、民をして之に依頼して枕を高くせしむべき強大なる軍備を意味す、軍備の眞價は之を用ひざるに在り、已むを得ずして之を用ふるにも、纔に鋒頭を示して事即ち收まるに在り、戰はずして敵を屈するは是れ善の善なる兵法にして、用ひずして敵を生ぜざるは是れ善の善なる兵備也。

▲時頼が大政治家たる所以は、其子時宗の治世に至りて著しく現はれたり、詩家が所謂膽藝の如き相模太郎の時代に至りて著しく現はれたり、北條氏の政權

靜動的武力

武人的政治家の典型

343

鎌倉政府の如し

を持続すべく、寧ろ其善政を持続すべく、寧ろ日本國民の幸福を持続すべく、武人的政治家の典型時宗は出でたり、秦時の嚴を補ふに必ず時頼無かるべからず、時頼の寛を補ふに必ず時宗無かるべからず、寛嚴剛柔代るく相救ひて、緊縮に過ぎんとするを弛緩にし弛緩に失せんとするを緊縮にし、紀綱常に新なるが如し、時頼が軍備の効力を試験したる遠慮は、其子時宗の代に於ける外敵の近き憂ひを攘ひ得たるを見よ

▲元王忽必烈大英雄の資を以て、宋朝を滅ぼし、朝鮮を呑み、東亞席捲の雄圖を披いて我に臨む、眼中固より絶東の孤島なき也、未だ藤原氏の氣風より脱出せざる京都朝廷は、之が爲に震駭せり、今にも日本は外敵の難に亡びて、天照大神以來の歴史を異種族の蹂躪に任すべきもの、如く狼狽せり、然れども鎌倉政府は動かざること山の如し、北條流の一喝、彼が來書に答書を與へずして斥く、元使再び來り再び之を逐ふ、彼が威嚇の軍乃ち到る、一撃して之を走らす、此に於て元使三たび來る、時宗之を斬る、忽ち龍口の劔を揮つて虜使頭足分かる

悟道的勇

數量測る
べからざる
成功

濫褻に包

史論人物評論

三四四

もの即ち是也、何ぞ夫れ痛烈なる、此時に於てや、時宗天皇の英資に兼ねるに、其心友日蓮が劔刃上を行き氷稜頭に立つの怪道の勇断に感化せらるゝと多く、武道と禪理との一致より徹底果決の氣を養ひ來り、難に當りて自ら機鋒を迸發するを禁ずること能はざりし也、時宗の鋒鏖一寸出づれば元主の歩武一寸進む、寸々尺々相對立して毫末も譲らず、遂に全日本を賭にして運命を試むるの危地に迫れり、飛報あり筑紫より來る、曰く元の先鋒十萬海を蔽ふて到ると、後龜山天皇徒跣して伊勢に祈り、身を以て國難に代らんことを誓ふ、然れども關東は靜なること水の如かりき、單に神風の功德を説くと勿れ、蒙古の軍よりも關東の令を恐るゝ我が將士は、殆んど神の如き活動を敵に示して、神風の未だ起らざるに、敵艦を神風圏内に退却せしめたり、神風は却つて武功の跡を掃ひ清めしものゝみ、北條氏が現在に於て成したるの功、及び將來に遺したる功の結果は、其數量の大なること測るべからざるものと云ふべし。

▲北條氏滅亡したるは、武人專權の必然的政弊に原因するものにあらずして、

まれたる
の珠玉

權力得喪
の心理

史論人物評論

三四五

其偶然的政弊に原因せり、唯人物と共に現じたる北條氏の善政が人物と共に滅したるのみにして、肯て善政其物の腐敗性より悪政を化學的作用したるにあらざるを以て、何れの時代にも、適當の人物を得ると共に其善政は再現すべき也、北條氏の善政は貞時に至りて其門を閉ぢ、貞時は單に父祖の遺せる形式を基礎として閉ぢられたる門の外に自己の愚政を行へり、されど貞時は猶ほ其形式を守ることを知る、高時に至りては更に其形式をも破壊して、全然獨自なる暴政を行へり、北條氏の極めて脆く滅亡したる所以也、北條氏は恰も濫褻の中の珠玉に似たり、前より見れば時政、義時の外包あり、後より見れば高時、貞時の外包あり、此醜穢なる外包の總てを一剝し去りて、始めて温光の底に徹するを認め得べし。

▲一の專權時代が他の專權時代に遷移するや、北條氏の如く單に源氏の政權を繼承したる者を例外として、必ず舊專權者の人心を失ひたるを機會とする者なれば、之に代るの新專權者が人心を得るの政治を行はざるべからざるは、洵に

見易きの理也、然れども此間に困難なる問題あり、新専權者は舊時代に於て志を得ずして雌伏せし者なれば、其政權を掌握するや、恰も貧民の俄に大金を儲け得て、昨日迄悪魔の如くに嫉視せし富者の爲すところを學ぶが如く、自己に亡ぼされし者が亡びし所以の道をば、自己も亦同一の歩武を以て通過するの愚を演ずるに至るは、蓋し人情免るべからざるの弱點なるに似たり、偶々強大なる意志の力を以て此弱點に打勝つ者ありと雖も、子孫數代の後に至るや、必ず高時、義滿の如き先祖の勞苦を知らざる坊ツちやんを生じて遂に同一の窟中に陥らざるは無し、故に彼等の亡ぶるは、先づ自ら亡ぶるの要素を作りて之を時勢に與ふるに外ならざる也。

武斷主義の殉道

淫酒主義の生活

▲武人専權時代の第一期を開きたる平氏は、藤原氏に示されたる模範の、如何なる制限迄學ぶべきかを實地に試験すべく、自ら其犠牲となるに甘んじ、源氏及び北條氏に向つて其弊を避くるの法を教へし、武斷主義の詢道者たる也。

▲藤原氏が快樂主義寧ろ淫酒主義の生活は、高等翫間たる文士と高等藝妓たる、

淫酒主義の狡猾なる小刀細工

才女の輩出を促し、公任、行成、信齊、俊賢に對する、紫式部、和泉式部、清少納言、赤染衛門あり、以て藤原氏の宴飲に風致を添へ、能く宮闕、邸第の中を無苦無憂の極樂國土たらしめしと雖も、門垣の外は直ちに地獄也。

▲藤原氏は其淫酒主義の生活の安全を謀るべく、豪族と盜賊の憂を耳にせざる強固なる藩屏を築かざるべからず、高等翫間と、高等藝妓の外、武人の價値が著るしく藤原氏の眼に映じ來れるは之に依れる也、然れども流石は藤原氏也、帝室を利用し寶位を玩弄したると同一の筆法にて、之にも狡猾卑劣なる小刀細工を用ひたり、武人の誇勇心を利用し、其愚直を玩弄し、地方に出で、は豪族の上に權力を加ふることを許すと共に、朝廷に入りては殿階を昇ること能はざるものとし、以て武人に其分を知らしめ、殿階以上の事、即ち國政に關する事は我々の權限外也との觀念を養はしめたり、故に藤原氏は、武人が戈を枕にするの功勞に依頼して、美人の膝を枕にするの幸福を保ちつゝも、彼が爲に、其宴席に列なるの權利を要求せらるゝの危険なき也、何ぞ其小刀細工の狡猾なる

一種嗜烈
的武士道

や。
 ▲藤原氏の末路に於て、豪族の跋扈と盜賊の蔓延が、最も防禦の設備に乏しき寺院に向つて危害を加へ易かりしを以て、僧徒は先づ未來の地獄に遠ざかるよりも、現在の地獄を避くるの必要を感じたる也、此に於て、寺院は其私有地に徵兵制度を行ひ、兵甲を繞らして佛殿を守護するの抵觸せる現象を呈し、金光の佛體と霜色の劔戟と相映發する處一種嗜烈なる護教的武士道を特生するに至りしが、終には僧徒其者も亦此必要の勢力に敵すること能はずして、法衣の下に甲冑を帶し、袈裟を以て圓顛を包むの異裝を異裝とせざるに及べり、柔和忍辱ならざるべからざる教規の爲めに、其性情を抑壓せられつゝ來りたる僧徒が、一旦護教擁法てふ口實の下に平生の鬱屈を漏らすの機會を得るや、其反動力は彼等を殉道の勇士たる地位に止めずして、兇暴の範圍に入るべく極端ならしめずんば己まざりし也、彼等の眼中には唯法敵佛敵あるのみ、天子も無く大臣も無き也、彼等の兇暴は信仰を基礎とし、若しくは信仰を加味したるの兇暴なるを以て、其何物をも畏れざるの勇氣は、單純なる武士道以上の或るインスピレーションを包みつゝありし也。

儒教道德
の權化

儒教種子
の大收穫

▲千古の聖主仁徳天皇は、之れを儒教道德の權化と云ふも不可ある無し、天皇は實に、孔子が理想する所の帝堯帝舜と比肩すべき聖主也、儒教道德の日本に輸入せらるゝや、直ちに之を消化するの能力ある偉大なる人物を得たるは、獨り日本の幸福のみに止まらずして、亦實に儒教其者に貢獻するの大なる功績也とす後世孔子の遺教に感化されて出でたる者、日清韓三國を一貫して、能く仁徳天皇の仁徳に匹敵し得べき聖主ありや、天皇は實に堯舜禹湯以後の一人にして孔子を媒介に是等の聖主と默契冥通したりし也、壞垣廢宮の中晏如として、「民の貧しきは朕の貧しきにして、民の富めるは朕の富める也」と云ふ、其天性の仁徳よりは、寧ろ其修養より得たる信念の堅確なるに敬服す。
 ▲應仁天皇が稚郎子の爲に謀りて十二分なりし用意は、徒に稚郎子をして自ら殺すの餘儀無きに陥らしむるの經營に過ぎざりき、眞摯にして而も明敏なる青

年が、人事のやゝ複雑なる時代に生れて其心靈に飢渴を感じ初めたる時、醇正なる儒教の種子を取つて未だ耕さざる原始の沃土に撒かる、其發芽や高麗の非禮を表書に見するの明智となり、其成熟や慾望を斷絶して長上に推讓するの美德となれり、驚くべき大收獲と云ふべし。

▲大鷦鷯尊は深く藏して虚しきが如き大賢也、皮相の見を以てすれば、百濟輸入の文教は殆んど稚郎子の専有に歸せるが如くなりしと雖も、大鷦鷯が黙々として暗裡に吸収したる分量は、肯て稚郎子に劣るものにあらず、所謂、玉韜まいて石輝を發するもの、其人物の奥床しさは、皇太子たる弟君にも立勝して見えしなるべし。

▲聖德太子は佛教輸入時代に於けるの稚郎子にして、稚郎子は儒教輸入時代に於けるの聖德太子のみ、兩教が日本に與へたる感化の反應として、最初に生まれし大人物は二皇子也、二皇子が人物の價值と其功勞は、略正敵するに足る、二皇子の差違は二皇子の差違にあらずして兩教の差違のみ、其兩教の差違に關

賢が外虚しき
如き大

儒佛兩教
の反應

文物が生
み出た妖
僧

法王的皇
帝

係せざる末端は時代の差違のみ。

▲慧星も亦軌道を有するにあらずや、如何なる思想も、如何なる事業も、決して系統なくして偶然に生るゝ者はあらざる也、歴史あつて以來の横暴を逞ふし、歴史あつて以來の怪事を公行せし妖僧道鏡は應仁の朝に百濟の貢士王仁が上りし、十卷の論語、一卷の千字文を遠祖となせる文字の産物に外ならず、我國の暗黒を開發せる文字の光彩は、正射して稚郎子を出し、聖德太子を出し、反射して行基を出し道鏡を出し、而して始めて究極したる也、大菩薩の尊號を賜はりし高僧、と行基空前絶後の妖僧道鏡とは、元來氷岩相容れざるものにあらず、同一系統の前と後のみ、行基は前半にして道鏡は後半なるのみ。

▲聖武天皇は聖德太子と似たる多くの點を有せりと雖も、亦著るしく異なる一點を有せり、聖德は宗教家にして且つ政治家也、聖武は純宗教家也聖德は政治を宗教の機關に供すると共に、宗教を政治の機關に供したり、聖武は唯政治を宗教の機關に供せるのみ宗教を政治の機關に供すべく、餘りに信仰の熱狂に過

詩歌的適度の興奮

慾情の斷絶と其の反抗

ぐ、聖武は寧ろ政治の元首たる皇帝と云はんより、宗教の元首たる法王と稱するの當れるに如かざる也。

▲人心の深底に蓄積しつゝありし佛教の潜勢力は、聖武の感化力と相打つて、發酵し、醗酵し、國民悉く其濃味に酔へり、國民と佛教は恍然として同化せり、日本の佛教となり、佛教の日本となれり、國民過度に興奮すれば、革命となり或は外征となる、國民適度に興奮すれば、詩歌となり或は美術となる、詩歌は適度より較過度に近きもの也と雖も、美術は眞に適度なる興奮の産物也、佛教の潜勢力と聖武の感化力との化合より醸されたる興奮劑は、如何に醇濃にして深穩なるものなりしぞ、之が爲に惡酔して狂暴する者無く、之を厭惡して排斥する者も無く、奈良朝の文明は、之を他觀すれば活ける繪畫を開展するが如く、之を自觀すれば活ける詩歌を呼吸するが如くなりしなるべし。

▲最上の一人(聖武)にして猶ほ且つ三寶の奴と自稱す、僧ならざれば人にあらすとなすの氣風なるが故に、功名心の大なる者は皆争ふて僧となる也、既に僧

一掬の涙

となるは、功名心の大なる者也とすれば、功名心の大なる者に普通なる如く、飲食遊樂の慾、兩性相愛の情も、僧たらざる者より僧たる者に多しとせざるべからず、嚴密なる戒律の下に、此燃ゆるが如き慾情の斷絶を練習するは、至難の業たると共に、亦痛快の事也、此故に、佛教道德の極度なる人情壓制は、能く人間共通の慾情に超絶して、飄然世外の者の如き高僧を成就すると共に、時として非常なる誘惑の爲に、難行苦行の歴史と離ること纔に一吋一分なるや、極度なる壓制に反抗するの極度なる爆發は、直ちに眇たる肉塊を彈射して、活佛の地位より魔王の地位に飛下せしめずんば止まざる也。

▲吾人千載の下に孝慊天皇の心事を推測し奉じて、實に一滴の涙無き能はず、男子は必ず一たび妻無かるべからずして、女子は必ず一たび夫無かるべからざるものとするは妙齡の皇女を最上の一人たる地位に上らしめて、其配偶無からしむるは、未だ心身の發育充分ならざる子女を僧尼たらしめて、其運命より兩性の情を奪却するものと同じからずや、人情の發展を壓制するの甚しきものに

あらずや、此壓制に反抗するは人情の自然的傾向也、則ち妙齡の女皇は風流才子惠美押勝を得て其情熱の飢渴を満たしたり、然れども押勝は自由の人也、未だ、弱齡より僧藉に入らしめられて其運命より兩性の情を奪却せられたる道鏡と同病相憐み同情相合するの熱烈なるには如かざる也、女皇の恩寵の押勝より道鏡に移りたるは、必ず斯く成り行くべき運命のみ、佛教道德の極度なる壓制に對する人情の反抗が、生理的作用に支配せられたるもののみ、肯て女皇の多情なるに依るにあらざる也。

▲天使墮落して惡魔となる、然れども墮落して惡魔の領域に至る者は猶ほ幸福也、一旦天上界より失脚せしも、藤羅に支持せられて絶壁の中間に倒懸し、惡魔の領域に墮落せんとするも自由ならざる此人間界は苦惱なる哉。

▲人は決して現在世界に向つて、其根本的苦惱を脱離する方法を求め得べからず、求め得たりとする者は、自ら其愚昧なる心を欺騙しつゝあるのみ。

▲神人は慟哭し、哲人は飲泣し、正人君子は其巖の如く強大なる胸間に、紅熱

天使と惡魔

根本的苦惱

凄冷なる反響

天才の内在的容外形

噴火山的胸懷

根本的失戀

の怒潮を漲らしむ。

▲究極する所彼は失望の絶叫を放ちて、萬有に凄冷なる反響を發せしめざるを得ず、曰く世の乙女は何故に甚だ美ならざるか世の酒は何故に甚だ甘からざるか、世の樂みは何故に甚だ樂からざるかと是れ詩人の聲なり。

▲業平の脈管に流動するものは尊貴なる皇系の血液なることを記憶せざるべからず、疎放なる天才、訓練されざる自負心燃ゆるが如き野性的の情熱、是れ業平の内容也、權家の横暴、皇族の不遇、及彼の内容と合一せざる纖巧粉飾の社會是れ業平の外界也、此内容を以て此外界に對す、噴火の如き猛烈なる大不平は、彼の頭顱を衝破して上騰せずんばあらず。

▲彼が暗怪なる巨巖に純金の塊と水晶の柱を包含せるが如き野性的の大詩才と、不平鬱勃未だ破裂せざる噴火山の如き胸懷とは、莽蒼跌宕の山河未だ原人時代の靈氣を蒸發し盡さざるの地に吐くの外なき也。

▲彼は失戀の人にあらず、斷じて失戀の人にあらず手の届かざる高き枝の林檎

史論人物評論 三五六

を指して煩悶するの狀態以外に失戀の意味なしとせば、業平は聊か此輩より高からざるべからず、彼をしも失戀の人と名づけ得べくんば、彼の失戀は根本的なり、絶對的なり現世界に於ては満足を與へられざる性質に屬す。

▲彼は天地の偉大莊麗を俯仰して、臆氣ながら萬有の上に垂れ引く妙なる衣の裾を見たり、美の理想體の女性化したるものを夢見たり是れ彼が初戀の芽ざしなり、彼の燃ゆるが如き野性的情熱は、夢境と現境との限界を破壊して奔騰を逞ふし、之が爲に煩悶せり苦惱せり、彼一たび世の美なる女性を見れば、恍惚として其物は彼女にあらずやと疑ひ、直ちに馳せ近づきて其足下に俯伏す、然れども其物等は盡く彼女にあらずき、業平が心醉崇拜に價すべき美の理想體にはあらずき、業平は多くの情人を造りし移り氣なる多情漢たる裡面に於て、何物にも慰藉され得べからざる根本的不満足の煩悶を波動せしめつゝありき、

▲未開時代疎放なる天才の常として、美の理想體を女性化せしめし者を想像し、之を現實したる者に遭逢せんことを熱望して止まず、其心靈は之が爲に飢渴の

史論人物評論 三五七

苦惱を嘗め而して自ら其然る所以を知らず、物に觸れ事に感ずるや、中懷の不満足直ちに迸出して人を思ひ人を戀ふの辭となる、所謂人は即ち美の理想體なるのみ。

▲今集歌人の聲多くは絲聲なり、竹聲なり獨り業平の聲は肉聲なり生物の聲也、胸中の鬱勃發して單純なる叫聲となる、他の意足らずして辭餘りあるものと自ら同じからざる也。

▲荒鷺の如く痛烈凄慘なる根本的苦惱を、行衛定めぬ旅路に馳すべく、朔天胡地人をして懼せしむるの東國に向つて、其狩衣の袖を飄へせり

▲烟波浩蕩海灣に連るの所、天宮廬の如く芦荻の上に垂るゝ所、無邊の暮色靜に兩翼を展開するの所、暗然愴然として其根本的苦惱の塊を動かし來り、沈痛悲愴の聲を放ち、滿舟の人をして涙滂沱たらしめたり

▲螢が其光りの一閃き毎に生命を搾るが如く、天才の人の事に當つて興奮すや血と精とを焔に化して五體より吐き出すなり、斯くて彼等は壽を保たず、其

29/1/39

幸天才の不

史論人物評論

三五八

較○長○生○の○者○と○雖○も○晩○年○は○燃○え○盡○し○た○る○白○灰○の○み○、○動○け○る○骸○骨○の○み○、○毫○禱○の○み○、
猫○或○は○狐○の○魅○入○り○た○る○も○の○み○、
る○も○の○み○

▲天才の人界に降るや、人間の腹を通過して出づるてふ事が、抑も不幸の始め也、而して、天才が發する光輝は、人間世界の暗黒を照破して、心靈を養ふの糧食たる詩美を寄與するものなりと雖も、其光輝は廉價に購ひ得べきにあらず、天才の光輝は多く困難、危険、不平、悲哀等に刺激せられたる場合に發揮するものなれば、他人が絶好の活詩畫として之を見る場合は、其人に取りて極めて痛苦なる場合ならざるべからず

文士寶典終

明治三十九年十月一日印刷
明治三十九年十月十二日發行

文士寶典附
定價金五十錢
郵税金六錢

著者 伊藤 忠次

發行者 日高 藤兵衛
東京市本郷區千駄木林町百九十六番地

印刷者 中村 彌助
東京市京橋區日吉町十番地

印刷所 近藤 商店
東京市京橋區日吉町十番地



發行所

東京市本郷區千駄木
林町百九十六番地
日高有倫堂
(電話下谷二五二八番)

明治二十九年八月卅日印刷 東京市本郷區千駄木林町百九十六番地
每月新刊發行の都度増補改刷

日高有倫堂
(電話下谷三五二八番)

有倫堂出版書目

文學博士 桑木嚴翼著

性格と哲學

定價金 壹圓
郵税金 拾錢

文學士 久保天隨著

文壇獅子吼

定價金 參拾五錢
郵税金 六錢

博士の學術文章は世既に定評あり本書は博
士が豊富なる學殖深遠なる觀察を以て高妙
なる哲學宗教の問題より卑近處世法並に女
子問題を解釋し其他戯曲文藝等廣大なる範
圍に亘り整齊慎重なる評議を下せるもの
にして論理の井然たる文章の精采ある誠
界の珍書たるを失はざる好學の士は本書の
訓に依り必らず啓發する所多きを信す
デヨサイア、スツロンク原著石川三四郎譯

二十世紀の大覺醒

定價金 拾五錢
郵税金 四錢

聲のみ高くして根底動き初め信仰亂れ慰安
破れ世を救ふの先づ自ら救はれざるべか
らざるは現時の宗教界也人を呼び醒すに先
づ自ら覺醒するを要するは方今の基督教徒
也本書の生れたる所以茲にあり基督の福音
教徒の使命並に天國の根本原理に亘り新時
代に適應すべき新解説を試み靈活剛健なる
信仰を鼓吹せるもの謹んで本書を斯壇に獻す
櫻庭篁村著

小竹影集

定價金 六拾五錢
郵税金 拾錢

戀と慾との二筋道誰かは踏迷はぬ者あるべ
きその好き道しるべの一處空塵一情残るべ
はしく花あり實あり血あり涙ある「山櫻」
前者は性情兼ね深く後者情趣偏に抑すべし
著者が益々計りなる同情は竹の葉結ぶ月
の如く如何なるものをも照さで止むまじく
見えて嬉し
泉鏡花著

ななむと櫻

定價金 五拾錢
郵税金 六錢

朝霞、夕霞、風情なるかな月とともに、櫻
かざして伏へ君花の心を汲めや君、いざや、櫻
此の七本櫻、千駄木の文の林に、緑を分け
て香ふ也
大町桂月伊藤銀月剛修 伊藤天籟編

文士寶典

定價金 五十錢
郵税金 六錢

東西諸文星の名籍玉什を練め、更に之を嚴
密なる審美眼を以て、不悖の文字のみを撰
擇し、文勢を保ち、神韻を失はざる、繁簡
の適度に於て、緊密に取舍排し、文士並
に文士たらんとする人の爲に、最良なる一
巻の完備せる理想的資料を編纂したる一
者也、之を綴れば、深刻腸を抉る者、天
衣無縫なる者、香氣齒頰に湧く者、奇句警
語應接に遑あらず
櫻庭篁村著

紀行天下泰平

定價金 四十五錢
郵税金 六錢

文章絢爛の極致に入り閑淡にして味深く眼
前の景、口頭の語、自然に出で、沖淡深粹
最も及び易からざるは篁村先生の紀行文也
本書題して天下泰平と云ふ命題既に洒脱也
中以山水美人所悉く先生が輕妙老熟の筆致を
趣を味はむとする人士は請ふ一本を備へよ

伊藤銀月著

社會高原生活

定價 四十錢
郵税金 六錢

斯新の思想奇創の文字を以て文壇を風靡せ
る銀月君、就中社會と人間とを觀察するに
於て別個の眼孔を有すと稱せらる、此書最
も適切に君の長所を發揮せるものにして、
富士の裾野と人間生活との關係の現在及び
將來を、非凡の才力を以て描寫し出だす、
實に是れ絶好の題目にして當世未だ見ざる
の珍書、社會と人間との新なる研究法を教
ふるもの也
小栗風葉著 鐮木清方畫

小 十七八

定價金 七十五錢
郵税金 十錢

櫻は三月菖蒲は五月女盛りは十七八げに少
女は人生の花なり而して少女の可憐なる心
事と態度とは唯だ多情多恨の才子よく之を
描き多情多恨の才子よく之を愛讀す風葉先
生の濃麗筆を味はると思はると大方の
君子は請ふこの篇を讀まれよ
川上眉山著 鐮木清方畫

小 觀音岩

定價金 八十錢
郵税金 拾五錢

前編
同。情。豊。富。文。致。清。艶。
思想高逸 裝釘美麗
これ本書の特色也
網島梁川譯 (近刊豫告)

ルナン耶蘇傳

定價金 圓五十錢
郵税金 十四錢

耶蘇は人類の王也。ルナン其傳を結びて曰
く「其教は永へに新なるべく其物語は氣高
き眼に涙を溢れしめ其苦みは優しき心を動
すべし、世々の後まで人類の中會て耶蘇よ
り偉大なる者生れずと語り傳へなむ」と。
此書救主の生涯、其懐しき神の國の思想、
天の關係を明にし、其國を論じ、他の宗教
との關係を隠見す、自由討論の精神一貫し
また此間に隠見す、自由討論の精神一貫し
て批評の鋭及觸れざる所なく、之がため一
時歐米基督教界を震動して顔色を失はしめ
たりと雖、世界史上に於ける耶蘇の位置は
寧ろ之によりて確められたりと言ふべきな
り。梁川先生は絢爛瑰麗、現代獨歩の筆を以
て此書を著し、世に傳へたる、世界の美文と
耶蘇傳の白眉となすものと模範的美文とは
之によりて吾邦文壇に供へられむとする也
櫻庭篁村著 鐮木清方畫

小 不問語

定價金 七十五錢
郵税金 十錢

附 大詩人出現 鹽原遊記
泉鏡花著 鐮木清方畫

朝霞、夕霞、風情なるかな月ととも、櫻
かざして吹へ君花の心を汲めや君、いざや、
此の七本櫻、千駄木の文の林に、緑を分け
て香ふ也

大町桂月伊藤銀月刪修 伊藤天頼編

新刊 文士寶典

定價金五十錢
郵税金 六錢

東西諸文星の名篇玉什を練め、更に之を嚴
密なる審美眼を以て、不朽の文字のみを撰
譯し、文勢を保ち、神韻を失はざる、緊簡
の適度に於て、緊密に取捨按排し、文士並
に文士たらんとする人の爲に、最良なる一
卷の完備せる理想的資料を編纂したる一
者也、之を繙けば、深刻腸を抉ぐる者、天
衣無縫なる者、香氣齒頰に湧く者、奇句警
語、庭篁村著

新刊 紀行天下泰平

定價金四十五錢
郵税金 六錢

文章絢爛の極致に入り閑淡にして味深く眼
前の景、口頭の語、自然に出で、沖淡深粹
最も及び易からざるは、篁村先生の紀行文也
本書題して天下泰平と云ふ命題既に洒脱也
中に收むる所悉く先生が輕妙老熟の筆致を
以て山水美人事美の意態景趣を曲盡せる者
也殊更に奇巧を求めざる紀行文の淡粹なる
趣を味はむとする人士は請ふ一本を備へよ

本居豊穎撰

上巻 下巻

新刊 紫文摘英

各定價金三十五錢
郵税金 六錢

源氏物語が千古の大文學たるは今更贅言を
要せず而も之を教科書に使用せしむるには
餘りに浩瀚に過ぎ又事々に恃論の箇處多く
女子教育家の齊しく遺憾とするところ源氏
博士の稱ある本居先生大に之を既し五十四
帖を通じて其英を摘み瘡を去り最も聯絡と
校訂に意を用ひ、紫文摘英を編せらる即ち
是れ源氏全篇の縮圖にして一讀其大意を窺
ふべく併も紫文の妙は此上下二卷に盡くせ
り各種女學校の良教科書たるは勿論荷も國
文學に志あるの女士は必ず一本を備へざる
べからず乞ふ高讀の榮を給へ

泉鏡花著 鏑木清方畫

(再版)

再版 小無憂樹

定價金八十五錢
小包料金十錢

著者積年の思を籠めて、はじめより單行一
冊として、新に筆を取りたるは、此の編を以
て嚆矢とす、願くば紳士淑女をして、良匠が
彫心の經營に成りて、世に美しき戀を秘め
たる一大宮殿の裡に遊ばしめむ

平井桃水著 鏑木清方畫

再版 小慰問袋

定價金七十五錢
小包料金十錢

硝煙彈雨の下に在りて、勇將猛卒を樂しまし
めし慰問袋に、戦時裏面の材料を収めて、冷
讀者に分たんとする桃水氏が従軍土産

思想高逸 装釘美麗
これ本書の特色也

網島梁川譯 (近刊豫告)

ルナン耶蘇傳

定價金四十錢
郵税金 十錢

耶蘇は人類の王也。ルナン其傳を結びて曰
く「其教は永へに新なるべく其物語は氣高
き眼に涙を溢れしめ其苦みは優しき心を動
すべし、世々の後まで人類の中會て耶蘇よ
り偉大なる者生れずと語り傳へなむ」と。
此書教主の生涯、其懐しき神の國の思想、
天父の觀念を叙べ、奇蹟を論じ、他の宗教
またの關係を明にし、其國家觀、社會主義觀
またの關係を明にし、自由討論の精神一貫し
て批評の鋭及觸れざる所なく、之がたしめ
たりと雖、世界史上に於ける耶蘇の位置は
寧ろ之によりて確められたりと言ふべきな
り。梁川先生は絢爛瑰麗、現代獨歩の筆を以
て此書を讀し、世に傳へ、世界の諸國に於
て耶蘇傳の白眉となすものと模範的美文とは
之によりて吾邦文壇に供へられむとする也

庭篁村著 鏑木清方畫

再版 小不問語

定價金七十五錢
郵税金 十錢

附 大詩人出現 鹽原遊記

泉鏡花著 鏑木清方畫

再版 小誓之卷

定價金七十五錢
郵税金 十錢

これ鏡花先生があふる、ばかりの同情を以
て天と地と、人に、訴へて同情を求め
初戀の詩篇也

大町桂月著

再版 我が文章

定價金四十八錢
郵税金 六錢

桂月先生の文章愈老熟して縦横自在真情流
露し行く處に行き止る處に止まり此の街
所なく苦む所なく直ちに人を以て文を遣り
洒落飄逸快調にして男性的意氣を發揮し而
かも言外に情熱溢る文此に至れば聖なり先
生の文の如きは、實に當代の逸品なり

文學士 久保天隨著

再版 紀行山水寫生

定價金四十五錢
郵税金 六錢

徳田秋聲著

再版 小花たば

定價金四十五錢
郵税金 拾錢

文學士 小原無絃譯

原文シエレーの詩

定價金三十五錢
郵税金 四錢

秋元蘆風譯

獨詩 野葡萄

定價金三十五錢
郵税金 六錢

○原文對照○卷末に評註を附す

大町桂月序佐藤湖月編纂
明治大家文集
 定價金八十錢
 郵税金拾錢

明治の昭代文運の勃興前古其比を見ず今一
 々諸大家の著作を讀み其風格を知るは容易
 のとにあらすこの書明治三十八年の間論文
 といはす美文といはす小説といはす荷も文
 章を以て一家をなし特色を有せる文豪を撰
 びまた文章の特色を發揮せる名篇を選び明
 治の文章家は集つめて此の書にあり之れ明
 治文學の縮圖にして一讀の下以て明治の諸
 大家の面影を伺ふべく文壇の一大偉觀たる
 を失はず文を學ぶ人によりては以て真模範
 とするに足る有益にして且つ興味ある良書
 なり

文學士 小原無絳譯
原文バーンスの詩
 定價金三十錢
 郵税金四錢

大町桂月著
代表日本人
 定價金四十五錢
 郵税金六錢

日本人を化せしは區々たる教義にあらすし
 て事實也歴史也國體也祖先の發揚せる國民
 性也我が國には儒教佛敎以外一種の武士道
 ありて今日の發展を致したる事今更言を待
 ざたる所なるが武士道の真相を知らむとせ
 ば理論のみならず十分也之を人物事實に
 徴せざるべからず此書日本國民の特性の何
 たるかを説き建國以來その特性を發揮せる
 人を選びて其面目を描き日本國民の前路に
 光明を與へ敎訓を與ふ一風變はれる日本國
 民の歴史也兼ねて道徳經也

大町桂月先生選
第四時代青年文集
 定價金十錢
 郵税金六錢

大町桂月先生選
第二時代青年文集
 定價金十錢
 郵税金六錢

大町桂月著
家庭と學生
 定價金卅八錢
 郵税金六錢

文學士 久保天隨著
美文 夕紅葉
 定價金三十五錢
 郵税金六錢

細越夏村著
新体靈 笛
 定價金三十錢
 郵税金四錢

姉崎博士序 萬朝報記者茅原華山著
向上の一路
 定價金三十錢
 郵税金六錢

海老名彈正先生著
宗教々育觀
 定價金五十五錢
 郵税金八錢

匿名隱士著
破天人論
 定價金三十錢
 郵税金四錢

網島梁川著
梁川文集
 定價
 金二四廿五錢
 郵税金十五錢

梁川網島先生、其高邁博大的識、精嚴理到の
 言、恰も燭を把つて照すが如し、されど先
 生は談理是れ能とする學者に非ず一面冷靜
 細緻の頭腦を備へたる倫理學究にして他面
 別に抑ふ可らざる詩人の熱情を宿して天地
 を戀ひ此戀を湛へて日夜に冥想し旦暮に修
 養止まざる哲人也解脫の人も、理を談ずれ
 ば簡淨にして靈活、感興を遣れば深遠にし
 て尊麗、其想獨特、其文獨特、鬱然一家を
 成して現代思想界の一角に拔く可らざる自
 家の領を占めて妄に他人の追従するを許さ
 ず是れ筆に非ずして人格なれば也、弊堂幸
 先生の高風を慕ふ所の諸君子に薦む
 山口先生題詩 蘆風秋元喜久雄譯

萬朝報記者 茅原華山編纂
青年と詩吟
 定價金二十五錢
 郵税金四錢

大文科 夏目先生校閱 チャールス、ラム著
 講師 ロイド先生 序文 文學士 小松武治譯
沙翁物語集
 定價金七十錢
 郵税金十錢

岩野泡鳴著
悲戀悲歌
 定價金三十五錢
 郵税金四錢

高橋五郎著
杜伯品藻
 定價金卅五錢
 郵税金六錢

海老名彈正先生著
基督教本義
 上製金六十五錢
 並製金五十五錢
 郵税金八錢

齊木仙醉先生譯
トルス教訓小説集
 定價金三十錢
 郵税金四錢

苦學社社輯
苦學の伴侶
 定價金三十錢
 郵税金四錢

海老名彈正先生著
人道
 定價金十錢

第四版 新時代青年文集

定價金十錢 郵税金六錢

大町桂月先生選

新刊 新時代青年文集

定價金十錢 郵税金六錢

桂月先生最も青年を愛し指導訓練須臾も懈らざる爰に滿天の青年諸子の傑作數千篇中より其尤なる者を選び正なる批評を加へて時代青年文集を新せらるる收むる所叙事抒情あり論說書簡あり將た新體詩あり成な絢爛の花の如く情熱火の如し以て青年の煩悶を醫すべく元氣を鼓舞すべし附録には當代諸大家の名篇を添へて錦上更に美花を飾る

大町桂月著

第五版 家庭と學生

定價金卅八錢 郵税金六錢

文學士久保天隨著

再版 美文 夕紅葉

定價金三十五錢 郵税金六錢

細越夏村著

新體 詩集 靈 笛

定價金三十錢 郵税金四錢

姉崎博士序 蕨朝報記者茅原華山著

改訂五冊 向上的の一路

定價金三十錢 郵税金六錢

大町桂月先生 中内蝶二先生合著

第六版 少女と山水

定價金三十五錢 郵税金六錢

山口先生序 シルレル原著 齋木仙醉譯

接神術

定價金二十二錢 郵税金四錢

文學士大町桂月先生書翰 木村鷹太郎先生書翰 文學士上田 敏先生書翰 岩野 泡鳴著

新體 詩集 夕 潮

定價金三十五錢 郵税金六錢

文博士 大町桂月著

第十版 わが筆

定價金四十五錢 郵税金六錢

嘲罵の中に涙あり放言の中に真理あり教訓あり才氣あり霸氣あり或は酒脱に或は沈痛を以て其真面目を以て其野を走る而かも其脈の氣を以て其野を走る而かも其才を以て其家庭學校社會及び文學等に關する草見到處に充ち才情擲すべし美文もその間に光彩を放つ天地間有数の快文字也

大町桂月先生序 角金潮聲著

參版 宇宙と人生

定價金二十五錢 郵税金四錢

大學 上田先生 序文 文學士 小松武治譯

第七版 沙翁物語集

定價金七十錢 郵税金十錢

上製クロロス 美本

岩野泡鳴著

詩集 悲戀悲歌

定價金三十五錢 郵税金四錢

高橋五郎著

杜伯品藻

定價金卅五錢 郵税金六錢

トルストイ伯の主義人物を評す

再版 基督教本義

上製金六十五錢 郵税金十錢 並製金五十五錢 郵税金八錢

海老名彈正先生著

再版 トルス 教訓小説集

定價金三十錢 郵税金四錢

齊木仙醉先生譯

苦學の伴侶

定價金三十錢 郵税金四錢

海老名彈正先生著

人道

定價金十錢 郵税金二錢

加藤直士譯

トルス トイの 日露戰爭觀

定價金三十錢 郵税金四錢

横山筆助著

再版 成功したる催眠術 應用自在

定價金三十錢 郵税金四錢

茅原華山編纂

我 人

定價金二十錢 郵税金六錢

鈴木秋子女史著

軍國の婦人

定價金廿八錢 郵税金四錢

基督教講壇集

定價金七十錢 郵税金八錢

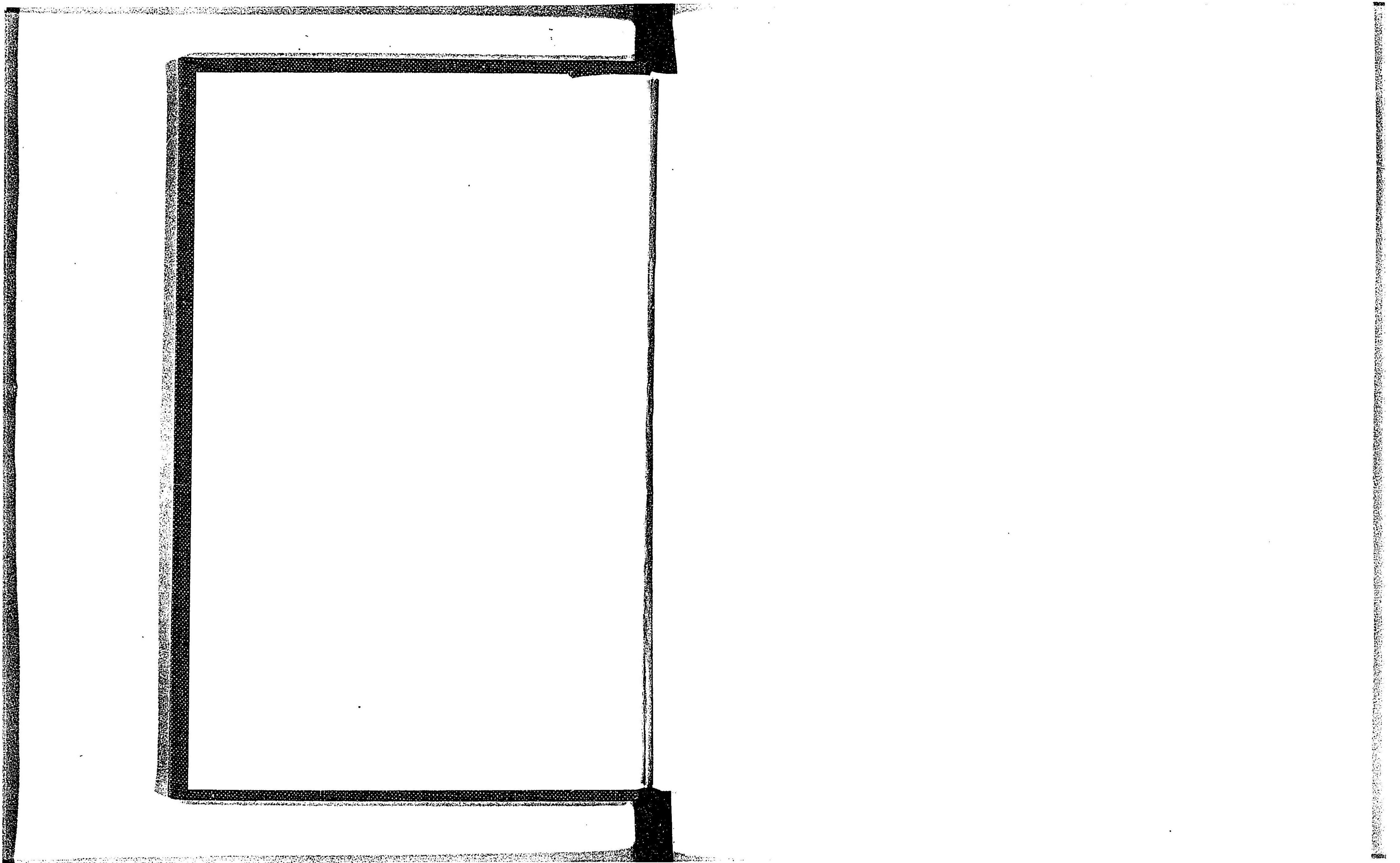
本書は其の生命の如く聖書の根柢たる現代基督教のあらゆる大家の教説を網羅掲げたり居ながら各大家の口演を聴聞する好冊なり其内容に於ては活水如湧の感あり乞ふ愛讀の榮を給へ

杉山先生書簡 黒澤辰三郎編

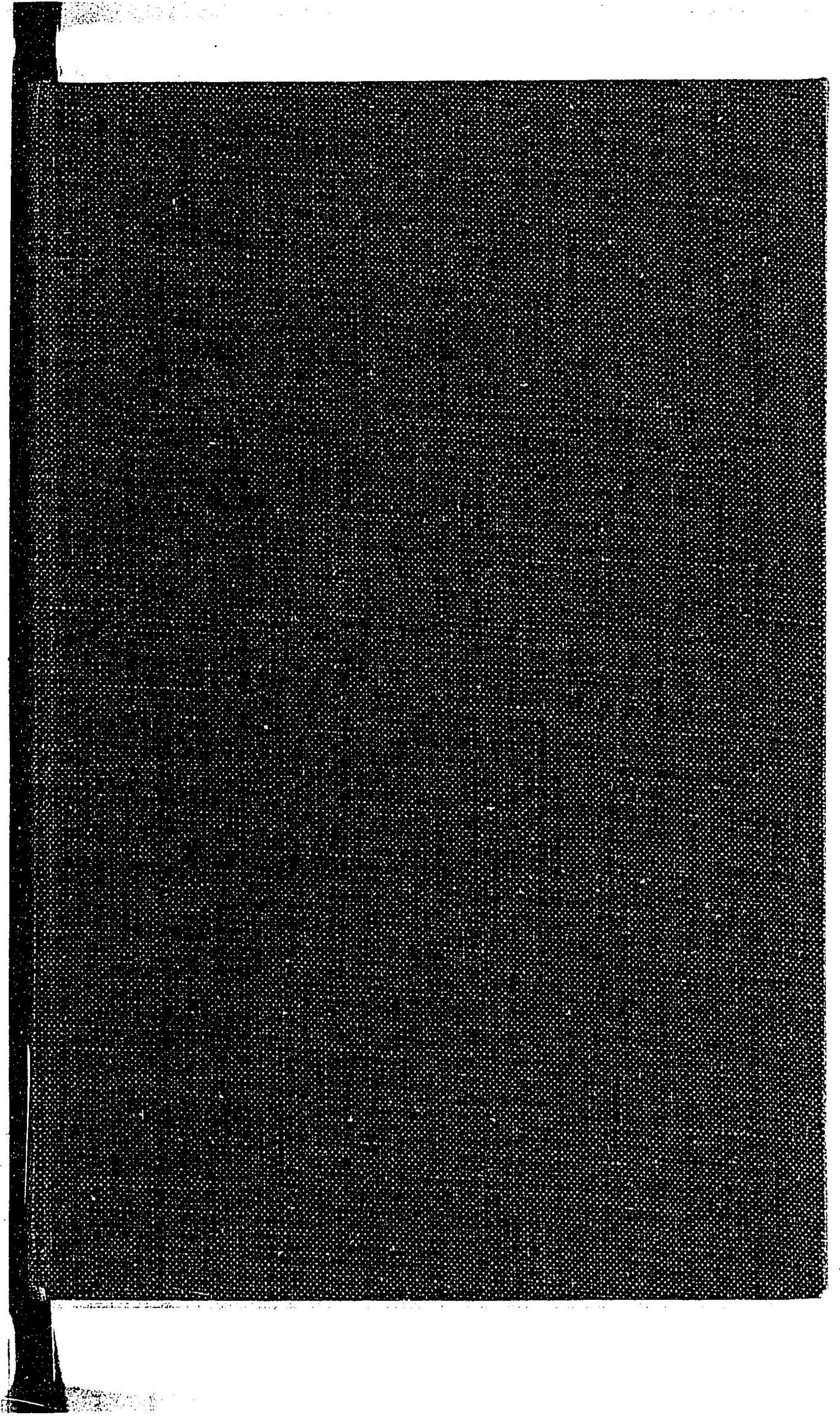
日本 名家手簡

定價金三十錢 郵税金六錢





1870



1870

30
488

30-488

Ⓜ

084835-000-5

30-488

文士宝典

伊藤 天籟(忠次) / 編

M39

DBA-0183

